任之事。父不レ得二於子一。無レ已之求。君不レ得二於臣一。故識二乎微之爲レ著者強。察二乎息レ民之爲レ用者霸。明二乎輕之爲レ重者王。秦王曰。寡人案レ兵息レ民。則天下必爲レ從。將二以逆レ秦。蘇子曰。臣有三以知二天下之不レ能二爲レ從以逆レ秦也。臣以二田單如耳一爲二大過一也。豈獨田單如耳爲二大過一哉。

しも救はず、秦人去りしも從はざりき。識らず、三國の秦を憎んで懷を愛したるか、亡(五四)其懷を憎んで秦を愛せしか。夫れ攻むるも救はず、去るも從はざりしは、是れ三國の兵困しんで、趙奢・鮑佞(五五)の罷れたるを以て也。故に地を裂いて、以て齊を敗れり。田單、齊の良に將とし、兵を以るて中に横行する十四年。終身敢て兵を設けて、以て秦を攻め韓を折かずして、封内(五九)に馳す。識らず、從の一たび成る惡くにか存するや」と。是に於て、秦王兵を解いて境を出でず。諸侯休し、天下安くして、二十九年相攻めず。(六一)

一 蘇代也　二 博く人才を薦選してそれ〳〵長ずる所の技藝によつて之を使用す　三 仕事に問を缺く事なく　四 適當に適材を置く事ゆゑ人の力の困乏する事なし　五 明主が人の言葉に對するには、誰彼の別なく多く聽き置きて必要の時に之を用ふ　六 大功を以て自ら任ずる者　七 任が重ければ重き程　八 言辭恭順にしてもごちず　九 地が他に百倍する大國　一〇 其後に復軍事賦役等の事あるを憂まず　一一 只一驛にして止め、二度と世に高き功業を致さんとはせず　一二 民力疲るくるも兵役をやめず　一三 自己の欲求を緩り、必ず之を己が領分となさんとす　一四 疲弊甚しくはんの存するといふのみ也　一五 趙は交通自在四方に通達する國也、從つて軍事上不利の地なり　一六 趙の都、趙の國を取る意　一七 今其國を得るも兵つかれ

天下之主亦盡過矣。夫慮敝二亡齊罷二楚敵魏。與二不レ可レ知之趙一。欲二以寡レ秦折レ韓。臣以爲二至愚一也。夫齊威宣者。世之賢主也。德博而地廣。國富而民用。將武而兵强。宣王用レ之。後破レ韓威レ魏。以南伐レ楚。四攻レ秦。爲二齊兵困一於殽塞之上一十年。攘レ地。秦人遠レ迹不レ服。而齊爲二虛戾。

力疲き四方來り伐たば秦國長久の利にあらじ　一八 併すを得ず　一九 休むを得ず　二〇 刑罰にて嚴重に威壓せば　二一 趙民は一旦は秦に從ひても長く其土に止まらずして離散せん　二二 戰勝てば國は安かるべき筈なるに却て危きは職事止まざれば也、功大なれば權重かるべきに却て輕きは地が己の有と爲らざれば也　二三 力に餘る事は父も其子に强ひて爲さすを得ず　二四 其上にも其上もと際限なく功を求むる事は君も其臣に强ふるを得ず　二五 微細なる事がやがて著大なる事となるを識りて微細なる事によく注意する者は他より强く　二六 民力を休養すれば事有る時民をして我用に立たしむべき事を察知するものは　二七 極積みて重に至るを明かにし能く輕き事を慎む者は　二八 止め　二九 合從　三〇 此時此二人合從を謀れる也　三一 天下の主下文の如き事を謀る意。開君長は「嚮」の字を衍とし、一說には「オホムネ」（天下の主は大率）と解す　三二 將に亡びんとする齊　三三 罷も敝も共に疲れたる義　三四 存亡不可知。或は國情不可知の義といふ　三五 威王・宣王　三六 用に立つ　三七 秦が也　三八 殺山也、前に見ゆ　三九 地を開拓して威を振ひたれども。開君長は「攘地」の二字衍といふ　四〇 恐れて遠く遠れ避けて服從せず　四一 居宅人無きを虛と曰ひ、死して後無きを戾といふ、地は空虛となり、民は子孫斷絶して不祠の鬼となる意也　四二 兵力を濫用したる其結果として　四三 今彼の合從を企つる諸侯の國情を見るに　四四 精銳なる兵器　四五 正解に「田單疑フラクハ田文ニ作ルベシ」司馬は齊の將種首也　四六 此上の原文四十二字他章の錯簡ならん今正解により譯文を闕く　四七 魏の地　四八 齊楚趙の三國秦軍を追擊せんとす　四九 趙の將　五〇 將が　五一 卒に追擊の事を果さざりし也　五二 亡乃に同じ、寧る也　五三 才困弊して物の役に立たず　五四 諸侯地を割いて秦に賂ひ以て齊を破る。一說に「齊に敗ちる」と訓じ、齊が合從の約に背きたる故に敗れたりと解す　五五 良兵　五六 齊の國中　五七 即

夫齊兵之所二以破一韓魏之所二以僅存一者。何也。是則伐レ楚攻レ秦。而後受二其殃一也。今富非レ有二齊威宣之餘一也。精兵非レ有二齊韓勁魏之庫一也。而將非レ有二田單司馬之慮一也。收二破齊罷楚敵魏一。不レ可レ知之趙。欲二以窮レ秦折レ韓。臣以爲二至誤一。臣以爲二從一不レ可レ成也。客有難者今臣有患於世夫刑名之家皆曰白馬非馬也已如白馬實馬乃使有白馬之爲也此臣之所患也昔者秦人下レ兵。攻レ懷服二其人一。三國從レ之。趙奢鮑佞將。楚有二四人一。起而從レ之。臨懷而不レ救。秦人去而不レ從。不レ識三國之憎レ秦而愛レ懷耶。亡其憎レ懷而愛レ秦耶。夫攻而不レ敕。去而不レ從。是以三國之兵困。而趙奢鮑佞之罷也。故裂レ地以敗二於齊一。田單將二齊之良一。以レ兵橫二行於中一。十四年。終身不二敢設レ兵以攻レ秦折レ韓也。而馳二於封內一。不レ識從之一成惡存也。於レ是秦王解レ兵不レ出二於境一。諸侯休。天下安。二十九年不二相攻一。

ち中に橫行する謂也　合從の一度にても成るべき理由の那邊に存するかを知らず　卿士增飾の辭也、と の年數の如き固より拘はるべからず

張儀說二秦王一曰。臣聞レ之。弗レ知而言爲二不智一。知而不レ言爲二不忠一。爲二人臣一不忠當レ死。言不レ審亦當レ死。雖レ然。臣願悉言レ所レ聞。大王裁二其罪一。臣聞天下陰レ燕陽レ魏。連レ荊固レ齊。收二餘韓一成レ從。將二西南以與レ秦爲レ難。臣竊笑レ之。世有二三亡一。而天下得レ之。其此之謂乎。臣聞レ之曰。以レ亂攻レ治者亡。以レ邪攻レ正者亡。以レ逆攻レ順者亡。今天下之府庫不レ盈。困倉空虛。悉二其士民一。

張儀秦王に說いて曰く、「臣之を聞く、知らずして言ふを不智と爲し、知つて言はざるを不忠と爲すと。人臣と爲つて不忠なるは當に死すべく、言つて審かならざる亦當に死すべし。然りと雖も臣願はくは悉く聞く所を言はん。大王其罪を裁せよ。臣聞く、天下燕を陰とし魏を陽とし、荊を連ね齊を固め、餘韓を收めて從を成し、將に西南して以て秦と難を爲さんとすと。臣竊かに之を笑ふ。世に三亡あり、而して天下之を得たりとは、其れ此れの謂か。臣之を聞く、曰く、亂を以て治を攻むる者は亡び、邪を以て正を攻むる者は亡び、逆を以て順を攻むること數千百萬、白刃前に在り、斧質後に在り、而も皆去り走つて死罪にする能はず。其上殺す能はず其百姓死する能はざる也。賞を言ふも則ち與へず、罰を言ふも則ち行はず。賞罰行はれず、故に民死せざる也。今秦は號令を出して賞罰を行ふ。功あるも功なきも相事とする也。其父母懷抱の中を出でゝより、生れて未だ嘗て寇を見ざるも、戰を聞けば、頓足徒裼、白刃を犯し、煨炭を蹈み、死を前に斷ずる者、比として此れ也。夫れ死を斷ずると生を斷ずるとは同じからず、而も民之を爲すものは、是れ鷙を貴べば也。一以て十に合ふ可く、十以て百に合ふ可く、百以て千に合ふ可く、千以て萬に合ふ可く、萬以て天下に勝つ可し。今秦の

張軍數千百萬。白刃在前。斧質在後。而皆去走不能死罪一也。其上不能殺也。其百姓不能死也。言賞則不與。言罰則不行。賞罰不行。故民不死也。今秦出號令而行。賞罰有功無功相事也。出其父母懷衽之中。生未嘗見寇也。聞戰頓足徒裼。犯白刃。蹈煨炭。斷死於

地形、長を斷つて短を續がば、方數千里、名師數百萬なり。秦の號令賞罰、地形利害、天下如く莫き也。此を以て天下と與にせば、天下は兼ねて有つに足らざらん。是に知りぬ、秦戰うて未だ嘗て勝たずんばあらず、攻めて未だ嘗て取らずんばあらず、當る所未だ嘗て破らずんばあらず、地を開くこと數千里、此れ甚だ大功なるを。然り而して甲兵頓れ、士民病み、蓄積索き、田疇荒れ、囷倉虛しく、四鄰の諸侯服せず、霸王の名成らず。此れ異なる故なし。謀臣皆其忠を盡さゞれば也。臣敢て往昔を言はん。昔は齊、南、荆を破り、東、宋を破り、西、秦を服し、北、燕を破り、中、秦・魏の君を使ひ、地廣くして兵强く、戰へば勝ち攻むれば取り、天下に詔令す。清濟濁河、以て限となすに足り、長城鉅防以て塞とするに足れり。齊は五戰の國也。一戰勝たずして齊なかりき。故に此に由て之を觀れば、夫れ戰は萬乘の存亡也。且つ臣之を聞く、曰く、株を削り根を掘り、禍と鄰る無れ、禍乃ち存せずと。秦、荆人と戰ひ、大いに荆を破り郢を襲うて、洞庭・五都・

前一者。比是也。夫斷死。與斷生也不同。而民爲之者。是貴奮也。一可二以合十。十可二以合百。百可二以合千。千可二以合萬。萬可三以勝天下矣。今秦地形。斷長續短。方數千里。名師數百萬。秦之號令賞罰。地形利害。天下莫如也。以此與二天下。天下不足二兼而有一也。是知秦戰未二

江南を取れり。荆王亡げ奔走し、東、陳に伏す。是の時に當つて、荆に隨ふに兵を以てせば、則ち荆舉ぐ可く、荆を舉げば、則ち其民貪るに足り、地利するに足り、東、以て齊・燕を弱め、中、三晉を陵ぎしならん。然らば則ち一舉して霸王の名成る可く、四鄰の諸侯朝す可かりし也。而るに謀臣爲さず、軍を引いて退き、荆人と和し、荆人をして亡國を收め、散民を聚め、社主を立て、宗廟の令を置き、天下を帥ゐて、西面して以て秦と難を爲さしむ。此れ固より已に霸王の道を無ふの一なり。

㊀ 臣の罪の有無を裁斷せられよ ㊁ 陰は北也。陽は南也。趙は合從の長なれば趙を主として南といひ北といふ也 ㊂ 楚也 ㊃ 殘餘の韓 ㊄ 合從 ㊅ 戰爭 ㊆ 三つの國を亡ぼす道、蓋し古語也 ㊇ 以下が所謂三亡也 ㊈ 六國也 ㊉ 貨財兵器を藏するを府庫といひ、穀粟を藏するを囷倉と曰ふ、囷は圓く倉は方也 ㊊ 素く徵發し ㊋ 刑器前後に在り進み戰はざる者を誅する也 ㊌ 徼と戰って死する能はず。「而も皆……能はざる也」の所、韓非子には「而して却走して死する能はず、其士民の死する能はざるに非ず、上能はざるが故也」に作る ㊍ 已に功ありしと未だ功あらざるとを論ぜず皆事に戰鬪に從ふ ㊎ 懷はふところ、衽はえり ㊏ をどり上りて足ぶみし、徒手はだぬぎして ㊐ 熱灰炭火、火の中をも構はず進む ㊑ 死を決して前進す

嘗不勝。攻未嘗不取。所當未嘗不破也。開地數千里。此甚大功也。然而甲兵頓。士民病。蓄積索。田疇荒。囷倉虛。四鄰諸侯不服。霸王之名不成。此無異故。謀臣皆不盡其忠也。臣敢言往昔。昔者齊南破荊。東破宋。西服秦。北破燕。中使韓魏之君。地廣而兵強。戰勝攻取。詔令天下。清濟濁河。足以爲限。長城鉅防。足以爲塞。齊五戰之國也。一戰不勝而無齊。故由此觀之。夫戰者萬乘之存亡也。且臣聞之。曰。削株掘根。無遺禍鄰。禍乃不存。秦與荊人一戰。大破荊。襲郢。取洞庭五都江南。荊王亡奔走。東伏於陳。當是之時。隨荊以兵。則荊可舉。舉荊。則其民足貪也。地足利也。東以強齊燕。中陵三晉。然則是一舉。而霸王之名可成也。四鄰諸侯可朝也。而謀臣不爲。引軍而退。與荊人和。令荊人收亡國。聚散民。立社主。置宗廟。令帥天下。四面以與秦爲難。此固已無霸王之道一矣。天下有比志而軍華下。大王以詐破之。兵至梁都。國梁數旬。則梁可拔。拔梁。則魏可舉。舉魏。則荊趙之志絕。荊趙之志絕。則趙危。而荊孤。東以強齊燕。中陵三晉。然則是一舉。而霸王之名可成也。四鄰諸侯可朝也。而謀臣不爲。引軍而退。

る者秦人實然り　死を決すると生を決するとは違ふ、誰しも生を欲し死を惡む、然るに秦人の死を決するを爲すは　蓋ひ進む事を貴び闘ます故也　秦の一人は敵の十人を相手として之と戰はしむべし　長い所を斷ち切りて短き所に續ぎ足し眞四角とす　名聲高き軍隊　秦に及ぶ者なし　共に爭はば　天下を併有すること容易也　兵器甲冑　田畑　格別他の理由あるにあらず　昔の事實　楚　濟水と黃河、濟水は水清み黃河は濁る　限界となして國を守る　大きなる堤防　とりでとして敵を禦ぐ　五國して勝ちたる國　齊の國力全く衰へたり　國の存亡のわかれ目　禍根を絕つをいふ　楚人　楚の都　湖の名、五都一に五湖に作る　かくれ伏す　そのまゝ兵を以て楚に入れば　たやすく取る　其民を取りて我民とし　其地を利して我有とす　原文「强」は「弱」の誤といふ說に從ふ、原文のまゝならば「齊燕より强く」と訓ずべきか　韓魏趙　我に來朝す　離散したる民　社稷の主、卽ち社稷の祭祀を主る者　宗廟（先祖のおたまや）を掌る役　戰爭をいふ

天下有た志を比せて華下に軍す。大王、詐を以て之を破れり。兵、梁都に至り、梁を圍むこと數旬ならば、則ち梁拔く可く、梁を拔かば則ち魏舉ぐ可く、魏を舉げば則ち荊・趙の志絕え、荊・趙の志絕えば則ち趙危ふく、趙危ふければ則ち荊孤となり、東、以て齊・燕を弱め、中、三晉を陵ぎしならん。然らば則ち是れ一舉して霸王の名成る可く、四鄰の諸侯朝す可かりし也。而るに謀臣爲さず、軍を引いて退き、魏氏と和し、魏氏をして亡國を收め、散民を聚め、社主を立て、宗廟を置かしむ。此れ固より已に霸王の道を無ふの二なり。前に穰侯の秦を治むるや、一國の兵を用ひて、以て兩國の功を成さんと欲せり。是の故に、兵終身外に暴露し、士民內に潞病して、霸王の名成らず。此れ固より已に霸王の道を無ふの三なり。趙氏は中央の國也。雜民の居る所也。其民輕くして用ひ難し。號令治まらず、賞罰信ならず、地形便ならず、上能く其民力を盡さしむるに非ず。彼れ

天下有比志　天下有た志を比せて華下に軍す。大王、詐を以て之を破れり。兵、梁都に至り、梁を圍むこと數旬ならば、則ち梁拔く可く、梁を拔かば則ち魏舉ぐ可く、魏を舉げば則ち荊・趙の志絕え、荊・趙の志絕えば則ち趙危ふく、趙危ふければ則ち荊孤となり、東、以て齊・燕を弱め、中、三晉を陵ぎしならん。然らば則ち是れ一舉して霸王の名成る可く、四鄰の諸侯朝す可かりし也。而るに謀臣爲さず、軍を引いて退き、魏氏と和し、魏氏をして亡國を收め、散民を聚め、社主を立て、宗廟を置かしむ。此れ固より已に霸王の道を無ふの二なり。前に穰侯の秦を治むるや、一國の兵を用ひて、以て兩國の功を成さんと欲せり。是の故に、兵終身外に暴露し、士民內に潞病して、霸王の名成らず。此れ固より已に霸王の道を無ふの三なり。趙氏は中央の國也。雜民の居る所也。其民輕くして用ひ難し。號令治まらず、賞罰信ならず、地形便ならず、上能く其民力を盡さしむるに非ず。彼れ

與二魏氏一和。令下魏氏收二亡國一。聚二散民一。立二社主一。置中宗廟上。此固已無二霸王之道一矣。前者穰侯之治レ秦也。用二一國之兵一。而欲三以成二兩國之功一。是故兵終身暴二露於外一。士民潞二病於內一。霸王之名不レ成。此固已無二霸王之道一三矣。趙氏中央之國也。雜民之所レ居也。其民輕而難レ用

固より亡國の形也。而も民氓を愛へず、其士民を悉して、長平の下に軍し、以て韓の上黨を爭ふ。大王、詐を以て之を破り、武安を拔けり。是の時に當つて、趙氏上下相親しまざる也、貴賤相信ぜざる也。然らば則ち是れ邯鄲守らず。邯鄲を拔き河間を完し、軍を引いて去り、西、修武を攻め、羊腸を踰え、代・上黨を降さば、代の三十六縣、上黨の十七縣は、一饋甲を用ひず、一民を苦しめずして、皆秦の有たりしならん。代・上黨は戰はずして已に秦と爲り、東陽・河外は戰はずして已に反つて齊と爲り、中・呼沱より以北は戰はずして已に燕と爲らん。然らば則ち是れ趙舉がるなり。趙舉がれば、則ち韓必らず亡び、韓亡ぶれば則ち荆・魏獨立する能はず、荆魏獨立する能はざれば、則ち是れ一舉して韓を壞り、魏を蠶し、荆を挾んで、以て東、齊・燕を弱め、白馬の口を決して、以て魏氏に流さば、一舉して三晉亡び、從者敗れ、大王手を拱いて以て須たば、天下編隨して伏し、霸王の名成る可かりしなり。而るに謀臣爲さず、軍を引いて退き、趙氏と和を爲す。

也。號令不レ治。賞罰不レ信。地形不レ便。上非二能盡二其民力一。彼固亡國之形也。而不レ憂二民氓一。悉二其士民一。軍二於長平之下一。以爭二韓之上黨一。大王以レ詐破レ之。拔二武安一。當二是時一。趙氏上下不二相親一也。貴賤不二相信一也。然則是邯鄲不レ守。拔二邯鄲一。完二河間一。引レ軍而去。四攻二修武一。踰二羊腸一。降二代

大王の明、秦兵の强を以て、霸王の業を弃て、地曾ち得可らず、乃ち欺を亡國に取れり。是れ謀臣の拙き也。且つ夫れ趙當に亡ぶべくして亡びず、秦當に霸たるべくして霸たらず、天下固に秦の謀臣を量る一なり。乃ち復た卒を悉して以て邯鄲を攻め、拔く能はず、甲を棄て弩を負ひ、戰慄して却く。天下固に秦の力を量る二なり。軍乃ち引き退いて李下に幷す。大王又軍を幷せて興に戰を致し、能く厚く之に勝つに非ず。又交〻罷め却く。天下固に秦の力を量る三なり。內には吾が謀臣を量り、外には吾が兵力を極む。是に由て之を觀れば、臣以ふに、天下の從豈其れ難からんや。內には吾が甲兵頓れ、士民病み、蓄積索き、田疇荒れ、困倉虛しく、外には天下の志を比する甚だ固し。願はくは大王以て之を慮る有らんことを。且つ臣之を聞く、戰戰慄慄として日一日を愼むと。苟くも其道を愼まば、天下有つ可し。何を以てか其の然るを知るや。昔者紂天子と爲つて、天下を帥る百萬に將たり。左は淇谷に飲ひ、右は洹水に飲ふ。淇水竭き、洹水流れ

上黨。代三十六縣。上黨十七縣。不用二領甲。不苦二民。皆秦之有也。代上黨不戰而已爲秦矣。東陽河外。不戰而已反爲齊矣。中呼沱以北。不戰而已爲燕矣。然則是趙舉。趙舉。則韓必亡。韓亡。則荊魏不能二獨立。荊魏不能二獨立。則是一舉。而壞韓蠶魏挾荊。以東弱二齊燕。決二白馬之口。以流二魏氏。一舉而三晉亡。從者敗。大王拱手以須。天下編隨而伏。霸王之名可成也。而謀臣不爲。引軍而退。與二趙氏一爲和。以二大王之明。秦兵之強。霸王之業。地尊不可得。乃取欺二於亡國。是謀臣之拙也。且夫趙當亡不亡。秦當霸不霸。天下固量二秦

ず、以て周武と難を爲す。武王、素甲三千領を將て、戰ふこと一日、紂の國を破り、其身を禽にし、其地に據りて其民を有ち、天下傷まざる莫かりき。智伯は三國の衆を帥ゐて、以て趙襄主を晉陽に攻め、水を決して之に灌ぐこと三年、城且に拔けんとす。襄主龜を錯き策を數へ、兆を占ひて以て利害を視る、何れの國に降るべきかと。而して張孟談を使とす。是に於てか潛行して出で、智伯の約に反して兩國の衆を得、以て智伯の國を攻め、其身を禽にして、以て襄主の功を成せり。今秦の地、長を絕ち短を續がば、方數千里、名師數百萬あり。秦國の號令賞罰地形利害、天下如くもの莫し。此を以て天下と與にせば、天下は兼ねて有つ可き也。臣昧死して大王を望見し、舉して天下の從を破り、趙を舉げ韓を亡ぼし、荊・魏を臣とし、齊・燕に親しみ、以て霸王の名を成し、四鄰の諸侯を朝せしむる所以の道を言ふ。大王試みに其說を聽き、一舉して而して天下の從破れず、趙舉らず、韓亡びず、荊・魏臣たらず、齊・燕親しまず、霸王の名成らず、四鄰の諸侯朝せずんば、大王臣を斬つて以て國に徇へ、以て謀を爲して忠ならざる者に主とせよ。」

一 華山の下　二 計の誤なちん。徂徠の說に、これ王の獨斷に出づるを言ひ、以て謀臣の忠を盡さざるを見はすも也と　三 魏の都大梁　四 一旬は十日　五 意思相通ぜず。魏は趙楚の中間にありて與國たり、故に魏を取れば二國通ぜず、趙尤も秦に近し故に趙危ふき也　六 孤立無援　七 原文「强」は「弱」の誤といふ說に從ふ　八 宗廟會とある「會」字を脫したるなちん　九 高註には「穰侯秦ニ相タリ秦ヲ興シテ魏ヲ安ンゼント欲ス、故ニ兩國ノ功ヲ成サント欲スト曰フ」鮑註には「秦及ビ穰侯ノ封ゼラルル所也、剛壽ヲ取リ以テ陶ヲ廣ムルノ類ノ如シ」　一〇 身をさちし　一一 澁は羸也。疲病するをいふ　一二 四方の民の雜居する所　一三 土着にあらざる故に輕薄也　一四 地に險固なし故に守るに便なちず　一五 上たる者其民をして力を盡さしむるの能なし　一六 人民土は土着の民、民は流亡の民　一七 邯鄲の都を守る能はず　一八 韓非子に「蔑」に作る。管領すること　一九 阪の名　二〇 二つの郡の名　二一 一兵の義。領はえり、衣類の歌詞　二二 東陽河外は本齊の地、而して趙管て之を取り今復齊之を取る、故に反つてといふなちん、齊趙皆な趙の敗に乘じて之を取るをいふ也　二三 中は韓非子に「中山」に作る。呼沱は水の名　二四 瀆は木中の蠹也。害するをいふ　二五 津の名。白馬の河口をきりて水攻めにする也　二六 合從を爲す者　二七 待也　二八 それかちそれにと相續いで降伏し　二九 韓非子の文により「幷霸王之業也曾不可得」に改めて譯出す。一說には「霸王之業也曾（マタカツテ）不可得」の誤かといふ　三〇 今にも亡びんとする如き趙に僞らる　三一 秦の謀臣の能力を盡りて其拙きを知る其一也

之謀臣二一矣。乃復悉レ卒以攻二邯鄲一。不レ能レ拔也。棄レ甲兵レ怒。戰慄而却。天下固量二秦力一二矣。軍乃引退。并二於李下一。大王又并レ軍而致二與戰一。非二能厚勝一之也。又交罷却。天下固量二秦力一三矣。內者量二吾謀臣一。外者極二吾兵力一。由レ是觀レ之。臣以天下之從。豈其難矣。內者吾甲兵頓。士民病。蓄積索。田疇荒。困倉虛。外者天下比レ志甚固。願大王有二以慮一之也。且臣聞レ之。戰戰慄慄。日愼二一日一。苟愼二其道一。天下可レ有也。何以知二其然一也。昔者紂爲二天子一。帥二天下一。將二百萬一。左飲二於淇谷一。右飲二於洹水一。淇水洹水不レ流。以與二周武一爲レ難。武王將二素甲三千領一。戰一日。破二紂之國一。禽二其身一。操二其地一。而有二其民一。天下莫レ不レ傷。智伯帥二三國之衆一。以攻二趙襄主於晉陽一。決レ水灌レ之。

三三 原文「兵怒」を韓非子により「貧弩」に改め譯す 三四 邑の名。其所にて全軍を集合せる也 三五 趙と 三六 大いに 三七 秦も趙も共に兵を罷めて退く 三八 內にしては天下の諸侯皆吾が謀臣の無能を量り知り、外にしては吾兵力の疲度はどの位といふ見當がつきたり 三九 田畑 四〇 古語也。もぢおそれて日々慄ちなき樣に慄む 四一 馬に水かふ 四二 軍馬多くして水を飲み盡したりと也。軍馬のもぢたゞしき形容 四三 周の武王と戰ふ 四四 素は白也。飾りなき質素のよろひを附けたる兵三千人。領はよろひ一組、甲の數にて人數を示す也 四五 皆殷の亡びたるを傷めり 四六 晉韓魏 四七 趙襄子をいふ。大夫を主と稱す、襄子は晉の大夫なる故に襄主といふ。晉陽は趙氏の邑也 四八 水攻めも也 四九 臣下を爲す也。錯は指に同じ數也。韓非子には「鑄に作る、灼くに先つて鑄る也。策は竿竹 五〇 龜を灼いて出るさけめを兆といふ。その形によつて何れの國に降るが利か害かを視る也 五一 趙の謀臣 五二 張孟談は城を忍び出て韓魏二國に說き、二國をして智伯との約に背かしむ 五三 長短相補つて正方形とする 五四 名譽高き軍 五五 共に敵はゞ 五六 眛は冒也。死を冒して敢て 五七 一擧しての「一」を脫せしならん 五八 國中に其罪を示し 五九 首也。不忠者の首魁として十分刑せられよと也。韓非子には「以て王の爲めに謀つて忠ならざる者と爲せ」に作る

三年。城且レ拔矣。襄主錯レ龜數レ策。占レ兆以視二利害一。何國可レ降。而使二張孟談一。於レ是潛行而出。反二智伯之約一。得二兩國之衆一。以攻二智伯之國一。禽二其身一。以成二襄主之功一。今秦地絕レ長續レ短。方數千里。名師數百萬。秦國號令賞罰。地形利害。天下莫レ如也。以レ此與二天下一。天下可二兼而有一也。臣昧死望二見大王一。言之所下以擧破二天下之從一。擧レ趙亡レ韓。臣二荊魏一。親二齊燕一。以成二霸王之名一。朝中四鄰諸侯之道。大王試聽二其說一。一擧而天下之從不レ破。趙不レ擧。韓不レ亡。荊魏不レ臣。齊燕不レ親。霸王之名不レ成。四鄰諸侯不レ朝。大王斬レ臣以徇二於國一。以主爲レ謀不忠者一

蔡澤見レ逐二於趙一。而入二韓魏一。遇レ奪二釜鬲於涂一。聞下應侯任二鄭安平王稽一。皆負二重罪一。應侯內慙。乃四入レ秦。將レ見二昭王一。使三人宣言以感二怒應侯一。曰。燕客蔡澤。天下駿雄弘辨之士也。彼

蔡澤(一)趙に逐はれて韓・魏に入り、釜鬲(二)を涂に奪はる。應侯、鄭安平・王稽に任じて皆重罪(三)を負ひ、應侯內に慙(四)づと聞き、乃ち西、秦に入る。將に昭王に見えんとし、人をして宣言(五)して以て應侯を感怒(六)せしめて曰く、「燕の客蔡澤は天下の駿雄弘辨(七)の士也。彼れ一たび秦王に見(八)えば、秦王必ず之を相として君が位を奪はん」と。應侯之を聞き、人をして蔡澤を召さしむ。蔡澤入つて則ち應侯に揖(九)す。應侯固より快からず。之を見るに及んで又倨(一〇)る。應侯因て之を讓めて曰く、「子嘗て我に代つて秦に相(一一)たらんと宣告す。豈に此あるか。」對へて曰く、「然り。」應侯曰く、「請ふ其說を聞かん。」蔡澤曰く、「吁、君何ぞ見るの晚きや。夫れ四時の序、功を成す者

一見二秦王一。秦王必相レ之。而奪二君位一。應侯聞レ之。使三人召二蔡澤一。蔡澤入則揖二應侯一。應侯固不レ快。及レ見レ之又倨。應侯因讓レ之曰。子嘗宣二言代レ我相レ秦。豈有レ此乎。對曰。然。應侯曰。請聞二其說一。蔡澤曰。吁。君何見之晚也。夫四時之序。成レ功者去。夫人生手足堅強。耳目聰明聖智。豈

は去る。夫れ人生れて手足堅強に、耳目聰明にして聖智なる、豈に士の願ふ所に非ずや。」應侯曰く、「然り。」蔡澤曰く、「仁を質として義を秉り、天下に道を行ひ德を施し、天下懷き樂み敬愛して、以つて君王たらんを願ふ。豈に辨智の期に非ずや。」應侯曰く、「然り。」蔡澤復た曰く、「富貴顯榮にして、萬物を成理し、萬物各〻其所を得て、生命壽長に、其年を終へて天傷せず、天下其統を繼ぎ其業を守りて、之を無窮に傳へ、名實純粹にして、澤千世に流れ、之を稱して絕ゆる毋く、天下と與に終はる、豈に道の符にして、聖人の所謂吉祥善事に非ずや。」應侯曰く、「然り。」澤曰く、「秦の商君、楚の吳起、越の大夫種の若きは、其れ卒に亦願ふ可きか。」應侯、蔡澤の己を困しめて、以て說かんと欲するを知り、復た曰く、「何爲れぞ不可ならん。夫れ公孫鞅の孝公に事ふるや、身を極めて二毋く、公に盡して私に還らず、賞罰を信にして以て治を致し、智能を竭して情素を示し、怨咎を蒙し舊交を欺きて、魏の公子卬を虜にし、卒に秦の爲めに將を禽にして、敵軍を破り、

非二士之所レ願與。應侯曰。然。蔡澤曰。質レ仁秉レ義。行レ道施レ德。於天下。天下懷樂。敬愛。願三以爲二君王一。豈不二辨智之期一與。應侯曰。然。蔡澤復曰。富貴顯榮。成二理萬物一。萬物各得二其所一。生命壽長。終二其年一而不二夭傷一。天下繼二其統一。守二其業一。傳二之無窮一。名實純粹。澤流二千世一。稱レ之而毋レ絕。

地を攘くこと千里なり。吳起の悼王に事ふるや、私をして公を害せず、讒をして忠を蔽はざらしめ、言苟くも合ふを取らず、行苟くも容れらるゝを取らず、義を行うて毀譽を顧みず、必ず主を霸とし國を强めんと欲して、禍凶を辭せず。大夫種の越王に事ふるや、主困辱に離ふも、忠を悉くして解らず、王亡絕すと雖も、能を盡くして離れず、功多くして而も矜らず、富貴なるも驕怠せず。此の三子の若き者は、義の至、忠の節也。故に君子は身を殺して以て名を成す。義の在る所は、身死すと雖も憾悔なし、何爲れぞ不可ならん。」蔡澤曰く、「主聖にして臣賢なるは、天下の福也。君明にして臣忠なるは、國の福なり。父慈にして子孝に、夫信にして婦貞なるは、家の福也。故に比干の忠なるも殷を存する能はず、子胥の智なるも吳を存する能はず、申生の孝にして晉惑亂せり。是れ忠臣孝子有りて、國家滅亂するは何ぞや。明君賢父の以て之を聽く無ければなり。故に天下其君父を以て戮辱と爲し、其臣子を憐れむ。夫れ死を待つて後、以て忠を立て名を成す可

與二天下一終。豈非二道之符。而聖人所レ謂吉祥善事一與。應侯曰。然。澤曰。若二秦之商君。楚之吳起。越之大夫種一。其卒亦可レ願與。應侯知二蔡澤之欲二困レ己以說一。復曰。何爲不可。夫公孫鞅事二孝公一。極レ身毋レ二。盡レ公不レ還レ私。信二賞罰一以致レ治。竭二智能一。示二情素一。蒙二怨咎一。欺二舊交一。虜二魏公子卬一。卒爲レ秦禽。將破二敵軍一。擴レ地千里。吳起事二悼王一。使二私不レ害レ公。讒不レ蔽レ忠。言不レ取二苟合一。行不レ取二苟容一。行レ義不レ顧二毀譽一。必欲二覇レ主強レ國。不レ辭二禍凶一。大夫種事二越王一。主離二困辱一。悉レ忠而不レ解。主雖二亡絶一。盡レ能而不レ離。多レ功而不レ矜。富貴不二驕怠一。若二此三子一者。義之至。忠之節也。故君子殺レ身以成レ名。義之所レ在。身雖レ死無二憾悔一。何爲不可哉。蔡澤曰。主聖臣賢。天下之福也。君明臣忠。國之福也。父慈子孝。夫信婦貞。家之福也。故比干忠不レ能レ存レ殷。子胥智不レ能レ存レ吳。申生孝而晉惑亂。是有二忠臣孝子一。國家滅亂何也。無二明君賢父以聽レ之。故天下以二其君父一爲二戮辱一。憐二其臣子一。夫待レ死而後可二以立レ忠成レ名。是微子不レ足レ仁。孔子不レ足レ聖。管仲不レ足レ大也。

くんば、是れ微子も仁とするに足らず、孔子も聖とするに足らず、管仲も大とするに足らじ」と。

一 藉人 二 炊事道具也、足なきを釜といひ、足あるを鼎といひ、鼎の足と足の間の濕きを扇といふ 三 保證して之を官に舉げ 四 安平は趙に降り稽は諸侯に通ず 五 內心 六 應侯を感動激憤せしむる機に宣言さるゝ也 七 俊傑雄辯 八 兩手を拱ぬくとにて對等の禮也、わざと應侯を憤激せしめんとて平身低頭の敬禮を爲さゞる也 九 前の宣言によりて固より不快の所也 一〇 今斯く相見るに及んで蔡澤對等の禮を行ひ揖して拜せず倨傲の態あり 一一 物の理を 一二 春夏秋冬の順序 一三 體也、身に體するをいふ 一四 執り行ふ 一五 嫌智の士期待する所 一六 理は治也、萬物の發達を全うせしむるをいふ 一七 天年、壽命 一八 若死に短命 一九 說は說也。其の事業の糸筋を總攬し 二〇 名も實も全美にて 二一 恩澤、餘澤 二二 天下皆之を稱賛して絕えず 二三 天下のあらん限りは曠く 二四 道を行ひ德を施すの效驗。史記に「道德の符」とあり、從よべし 二五 祥は福也、めでたい事 二六 宰相商鞅、以下三人何れも天壽を全うせずして殺されたる者也 二七 史記には「後」の次に「罷」（イツハリテ）の字あり、殘更に裏をかきていつはり答ふる也 二八 秦の商君也 二九 一身を君の爲に竭して二心無く 三〇 自己の身の上にかへりみず 三一 まどゝろ 三二 うちみとがめを身に受くるも厭はず喜交ある魏の公子卬を欺きて之を虜にし 三三 公私の別を正して正邪の辨を明かにしたる也 三四 當座の間に合はせを言ひて人の意に迎合する事をせず 三五 當座に都合よき機なる行をして人に容れられんとせず 三六 遭也。史記には「離」に作る 三七 憐也 三八 ふしとなるもの、特に立派なもの 三九 殷の紂王の無道を諫めて終に殺さる 四〇 吳王闔閭の臣、闔閭越王句踐を擒にし時其不可を諫めて用ひられず遂に誅られて死を賜ふ 四一 晉の獻公の太子、獻公其の愛妾驪姬に惑ひ遂に申生を殺す 四二 忠臣孝子の言を 四三 人間のはゞ、賤しむべき者。正解には「其君父の戮辱を爲すを以て」と訓じ、戮辱を「君が其臣ヲハヂシメル」と解せり 四四 死して後始めて 四五 殷の一族、紂王の暴虐によりて殷の亡びんとするを知り之を去る 四六 魯に仕へ（其道行はれざるを以て去る 四七 齊の公子糾に仕へしが、其死する時共に死せず相公に事へて覇業を爲す「大」は大人物の義

於レ是應侯稱レ善。蔡澤得二少閒一。因曰。商君・吳起・大夫種其爲二人臣一。盡レ

是に於いて應侯善しと稱す。蔡澤少間を得て、因て曰く、「商君・吳起・大夫種の、其の人臣となつて忠を盡し力を致せるは、即ち願ふ可し。閎夭の文王に事へ、周公の成王を輔けたる、豈に亦忠ならずや。君臣を以て之を論ぜば、商君・吳起・大

忠致レ力。則可レ願矣。閎夭事二文王一。周公輔二成王一也。豈不二亦忠一乎。以二君臣一論レ之。商君吳起大夫種其可レ願。孰與二閎夭周公一哉。應侯曰。商君吳起大夫種不レ若也。蔡澤曰。然則君之主慈仁任レ忠。不レ欺二舊故一。孰與秦孝楚悼越王一乎。應侯曰。未レ知二何如一也。蔡澤曰。今主固親二忠臣一。

夫種の、其の願ふ可きは、閎夭・周公に孰れぞや。」應侯曰く、「商君・吳起・大夫種は若かざる也。」蔡澤曰く、「然らば則ち君の主の、慈仁にして忠に任じ、舊故を欺かざるは、秦孝・楚悼・越王に孰れぞや。」應侯曰く、「未だ何如を知らざる也。」蔡澤曰く、「今主固より忠臣を親しむこと、秦孝・越王・楚悼に過ぎず、君の、主の爲めに亂を正し、忠を批ち難を折き、地を廣め穀を殖し、國を富し家を足し、主威を強うして海内を蓋ひ、功萬里の外に彰はるゝこと、商君・吳起・大夫種に過ぎず、而して君の祿位貴盛にして、私家の富三子に過ぎたり。而るに身退かず。竊かに君の爲めに之を危ぶむ。語に曰く、『日中すれば則ち移り、月滿つれば則ち虧く』と。物盛んなれば則ち衰ふるは、天の常數也。進退盈縮變化するは、聖人の常道也。昔者齊の桓公諸侯を九合し天下を一匡す。葵丘の會に至つて、驕矜の色あり、畔く者九國なり、吳王夫差、天下に敵なく、諸侯を輕り、齊・晉を陵ぎ、遂に以て身を殺し國を亡ぼせり。夏育・太史啓は叱呼して三軍を駭かしゝも、而も身庸夫に死

不レ過二秦孝越王楚悼一。君之爲レ主正レ亂。批レ患折レ難。廣レ地殖レ穀。富レ國足レ家。强二主威一。蓋二海内一。功彰二萬里之外一。不レ過二商君吳起大夫種一。而君之祿位貴盛。私家之富。過二於三子一。而身不レ退。竊爲レ君危レ之。語曰。日中則移。月滿則虧。物盛則衰。天之常數也。進退盈縮變化。聖人之常

せり。此れ皆至盛に乘じて、道理に及ばざれば也。夫れ商君は孝公の爲に權衡を平かにし、度量を正し、輕重を調へ、阡陌を決裂して、民に耕戰を致ふ。是を以て兵動けば地廣まり、兵休めば國富む。故に秦、天下に敵なく、威を諸侯に立つ。功已に成りて、遂に以て車裂せらる。楚の地に持戟百萬あり。白起數萬の師を率ゐて、以て楚と戰ひ、一戰して鄢・郢を擧げ、再戰して夷陵を燒き、南、蜀・漢を幷せ、又韓・魏を越えて强趙を攻め、北、馬服を坑し、四十餘萬の衆を誅屠し、流血川を成し、沸聲雷の若し。秦をして帝を業せしむ。

一　應侯「善し」といひて意聊か和ぐ、こゝに蔡澤に乘ずべき少しの間隙を得たりと也　二　君と臣と兩方の上下り論ぜば　三　閎夭周公の願ふ可きに比して何れか優れりや　四　秦の孝公・楚の悼王・越王句踐　五　君の主卽ち秦王　六　驚也。うち拂ふ　七　主君の威勢を强くして其威蓄ねく海内に及ぶ　八　商君・吳越・大夫種の三人　九　日が天の中央に至れば次第に西の方に移る　一〇　きまつてゐて變る事のないめぐりあはせ　一一　或は進み或は退き、事によつて盈ちもし、時に從つて色々に變化する　一二　糾合也、一匡の匡は正也、天下を統一して霸業を爲すをいふ　一三　塊名　一四　ゐごりはこる　一五　其惱めに怨を受けて　一六　古への二人の勇者　一七　つまらぬ男の手に死せり。高誘曰く「夏育ハ田博ノ爲メニ殺サル、然レドモ太史嗽（史記に啓を嗽に作る也）ハ未ダ

道也。昔者齊桓公九合諸侯。一匡天下。至葵丘之會。有驕矜之色。畔者九國。吳王夫差。無敵於天下。輕諸侯。陵齊晉。遂以殺身亡國。夏育太史啓叱呼駭三軍。而身死於庸夫。此皆乘至盛。不及道理也。夫商君爲孝公平權衡。正度量。調輕重。決裂阡陌。教民耕戰。是以兵動而地廣。兵休而國富。故秦無敵於天下。立威諸侯。功已成矣。遂以車裂。楚地持戟百萬。白起率數萬之師。以與楚戰。一戰舉鄢郢。再戰燒夷陵。南并蜀漢。又越韓魏。攻強趙。北坑馬服。誅屠四十餘萬之衆。流血成川。沸聲若雷。使秦業帝。自是之後。趙楚慴服。不敢攻秦者。白起之勢也。身所服者。七十餘城。功已成矣。

誰ノ殺ス所タルヲ知ラズ」　〔八〕史記「反ちざれば也」に作る、其義ふべき道理に考へ至りて自ら反省引退せざるの過ちも也　〔九〕權衡はかり、度量はものさしとます、輕重は貨幣　〔一〇〕田間の界畔、南北を阡といひ東西を陌といふ、決裂は開き破る也、井田の法を廢し、新に界畔を造りしをいふ　〔一一〕農事を專むる傍ら兵事を訓練す、故に戰へば勝つて地を取り廣め、休めば農殖に勵みて國富む　〔一二〕車裂きの刑に遭ふ　〔一三〕ほこを持する兵士　〔一四〕軍　〔一五〕楚の地　〔一六〕趙の將馬服君趙奢の子趙括を射殺し降卒四十萬人を長平に坑殺す。坑とは壕し不意を擊ちて、撃殺するを謂ふ也　〔一七〕血の押く音　〔一八〕帶笠をなさしむ

是より後、秦・楚慴服して、敢て秦を攻めざる者は、白起の勢也。身を服する所の者七十餘城。功已に成りて、死を杜郵に賜ふ。吳起は楚悼の爲めに無能を罷け、無用を廢し、不急の官を損じ、私門の請を塞ぎ、楚國の俗を一にして、南、揚越を攻め、北、陳・蔡を并せ、横を破り、從を散じ、馳說の士をして、其口を開く所賜ニ死於杜郵一。吳起爲ニ楚悼一罷ニ無能一。廢ニ無用一。損ニ不急之官一。塞ニ私門之請一。一ニ楚國之俗一。南攻ニ揚越一。北并ニ陳蔡一。破ニ橫散一從。使ニ馳說之士一。無ニ所ニ開ニ其口一。功已成矣。卒支解。大夫種爲ニ越王一墾ニ草剏ニ邑一。辟ニ地殖ニ穀一。率ニ四方之士一。專ニ上下之力一。以禽ニ勁吳一。成ニ霸功一。句踐終棺而殺ニ之一。此四

無からしむ。功已に成りて、卒に支解せらる。大夫種は越王の爲めに草を墾き邑を剏め、地を辟き穀を殖ゑ、四方の士を率ゐて、上下の力を專らにし、以て勁吳を禽にして、霸功を成す。句踐終に倍いて之を殺せり。此の四子は功成つて去らず、禍此に至る。此れ所謂信びて誠する能はず、往いて反る能はざる者なり。范蠡は之を知つて、超然として世を避け、長く陶朱と爲れり。君獨り博する者を觀ずや。或は大いに投ぜんと欲し、或は功を分たんと欲す。此れ皆君の明かに知る所也。今君秦に相として、計つて席を下らず、謀つて廊廟を出でず、坐ながらにして諸侯を制し、利三川に施いて、以て宜陽を實し、以て羊腸の險を決し、太行の口を塞ぎ、又范・中行の途を斬ちて、棧道千里蜀・漢に通じ、天下をして皆秦を畏れしむ。秦の欲得て、君の功極まる。此れ亦秦の功を分つの時也。是の如くにして退かざれば、則ち商君・白公・吳起・大夫種是れ也。君何ぞ此の時を以て相印を歸し、賢者に讓つて之を授けざる。必ず伯夷の廉あつて、長く應侯と爲り、世世

子者。功成而不去。禍至於此。此所謂信而不能屈。往而不能反者也。范蠡知之。超然避世。長爲陶朱。君不觀博者乎。或欲大投。或欲分功。此皆君之所明知也。今君相秦。計不下席。謀出廊廟。坐制諸侯。利施三川。以實宜陽。以決羊腸之險。塞太行之口。又斬范中行之途。棧道千里。通於蜀漢。使天下皆畏秦。秦之欲得矣。君之功極矣。此亦秦之分功之時也。如是不退。則商君白公吳起大夫種是也。君何不以此時歸相印。讓賢者授之。必有伯夷之廉。長爲熙侯。世世稱孤。而有喬松之壽。孰與以禍終哉。此則君何居焉。應侯

孤と稱して喬・松の壽あらん。(三五)禍を以て終るに孰れぞや。此れ則ち君何れにか居らん。」應侯曰く、「善し」と。乃ち延き入れ坐せしめて上客となす。後數日入朝して、秦の昭王に言つて曰く、「客の新たに山東より來る者蔡澤といふ、其人辯士なり。臣の人を見たる甚だ衆きも、及ぶ者ある莫し。臣如かざる也」と。秦の昭王召し見て、與に語つて大いに之を說び、拜して客卿となす。應侯因て病を謝し、相印を歸さんと請ふ。昭王強ひて應侯を起たす。應侯遂に篤しと稱し、因て相を免ず。昭王新たに蔡澤の計畫を說び、遂に拜して秦相となす。東、周室を收む。蔡澤、秦王に相たること數月、人或は之を惡す。誅を懼れて、乃ち病を謝し、相印を歸す。號して剛成君となす。秦に居ること十餘年、昭王・孝文王・莊襄王に事へ、卒に始皇帝に事へて、秦の爲めに燕に使し、三年にして、燕、太子丹をして入つて秦に質たらしむ。(四四)

一 ちもそれ從ふ　二 勢力　三 自身に征服する　四 杜郵は咸陽の西門十里にあり。前章に出でたる如く白起墓

王の再び趙を攻めんとする時病と稱して遂に將たらず、秦王怒り白起をして咸陽に留るを得ざらしむ、白起出でて杜郵に至る、王使者を遣し之に劍を賜ふ、白起遂に自殺せり　五 無用の事業　六 目下必要なき冗官を〈ちし に驅す、故に揚越といふ　七 連橫の說を破り合從の約を散ず、吳起の志は其主楚の悼王を天下の霸たらしめんとするに在れば也　八 蔡方此方驅せ廻りて遊說す　九 手足をばら〳〵に切り離す。史記吳起傳に見ゆ　十 草深き未開墾を開墾して人里をはじめ造る　十一 天下四方より寄り集りたる名士を引率して　十二 君臣の力を專一にして　十三 强敵吳王　十四 原文「棓」に作るは「倍」の誤。倍は負也。大夫種の德功にそむきて也　十五 其位を也　十六 伸びたるまゝにて屈する能はず　十七 越王に仕へ越王を輔けて會稽の辱を雪ぎし人　十八 官を辭して越を去り陶といふ處に居住し姓を朱と改め、殖產を爲して巨富を得、陶朱公といへり　十九 博奕　二十 計或は思ひ切つて賽を投じ全勝を取らんと欲する事あり、或は雙方共に半々の勝利を得んと欲する事あり　二十一 計策廟上に成り　二十二 謀議を廟廟（廟堂）の內に決し　二十三 利益は三川の地までひろがりて其結果宜陽の中を充實す。一說「利は三川を施（ウツ）して以て宜陽を實し」と訓じ、施は移也、三川の利益を移しそれによつて宜陽を充實すと解す　二十四 「以て」は輕く又の意位に解すべし。太行山の羊腸の險阪を切り開きて打つて出るに便にし、太行山の口を塞ぎて敵の打入るを防ぐ　二十五 かけはし　二十六 欲望は滿足し　二十七 范蠡の功極まれり秦王、君が全功を專らにするを欲せず他の人も亦其功あらんを欲す、恰も博者の功を分つを欲するが如しと也　二十八 此四人と末路を同じうすべし　二十九 宰相の印を返して其位を去る　三十 周の時の有名なる廉潔の士　三十一 侯の自稱、卽ち子々孫々諸侯の位を失はずと也　三十二 喬は王子晉、松は赤松子、共に古への仙人　三十三 何れを

曰善。乃延入坐爲二上客一。後數日入朝。言二於秦昭王一曰。客新有下從二山東一來者上。蔡澤。其人辯士。臣之見レ人甚衆。莫レ有二及レ者一。臣不レ如也。秦昭王召見與語大說レ之。拜爲二客卿一。應侯因謝レ病。請レ歸二相印一。昭王強起二應侯一。應侯遂稱レ篤因免レ相。昭王新說二蔡澤計畫一。遂拜爲二秦相一。東收二周室一。蔡澤相二秦王一數月。人或惡レ之。懼レ誅。乃謝レ病。歸二相印一。號爲二剛成君一。居レ秦十餘年。事二昭王孝文王莊襄王一。卒事二始皇帝一。爲レ秦使二於燕一。三年而燕使二太子丹入質一於秦一。

選びて之に居るか　内に引入れ席上に安坐せしめ上等の客とす　應侯が也　辭は辭に通ず　病氣を理由として職を辭し　病氣重し　東の方周室を縣して、其地を收め取る　王に讒言する者あり　人質

濮陽人呂不韋賈二於邯鄲一。見二秦質子異人一。歸而謂レ父曰。耕田之利幾倍。曰。十倍。珠玉之贏幾倍。曰。百倍。立二國家之主一贏幾倍。曰。無數。曰。今力田疾作。不レ得二煖衣餘食一。今建レ國立レ君。澤可二以遺レ世。願往事レ之。秦子異人質二於趙一。處二於屏城一。故往說レ之曰。子傒有二承國之業一。又有二母在レ中。今子無レ母二於中一。外託二於不レ可レ知之國一。一日倍レ約。身爲二糞土一。今子聽二吾計一。事求レ歸。可三以有二秦國一。吾爲レ子使二秦必異人、趙に質たり、屏城に處る」と。故に往いて之に說いて曰く、「子傒は承國の業あり。又母の中に在る有り。今子は中に母無く、外知る可らざるの國に託す。一日約に倍かば、身糞土と爲らん。今子、吾が事を計るを聽いて歸るを求めば、以て秦國を有つ可し。吾れ子の爲めに、秦をして必ず來つて子を請はしめん」と。乃ち秦王の后の弟陽泉君に說いて曰く、「君の罪死に至る、君之を知れりや。君の門下は高尊の位に居らざるは無く、太子の門下は貴者なし。君の府・珍珠寶玉を藏し、君の駿馬外廐に盈ち、美女後庭に充てり。王の春秋高し、一日山陵崩れて、太子事を用ひば、君累卵よりも危ふく、朝生よりも壽しからじ。說の、以て一切に、君をして富貴千萬歲にして、其太山四維よりも寧く、必ず危亡の患なからしむ可き有り」と。陽泉君席を避けて、其說を聞かんと請ふ。不韋曰く、「王年高く、王后子なし。子傒承國の業あり、士倉又之を輔く。王一日山陵崩れば、子傒立つて、士倉事を用ひ、王后の門必ず蓬蒿を生ぜん。子異人は賢材也。棄てられ

孝文王

濮陽の人、呂不韋、邯鄲に賈し、秦の質子異人を見て、歸つて父に謂つて曰く、「耕田の利幾倍ぞ。」曰く、「十倍。」「珠玉の贏幾倍ぞ。」曰く、「百倍。」「國家の主を立てば贏幾倍ぞ。」曰く、「無數なり。」曰く、「今力田疾作するも、煖衣餘食を得ず。今國を建て君を立てば、澤以て世に遺す可し。願はくは往いて之に事へん。秦子

來請レ子。乃說二秦王后弟陽泉君一曰。君之罪至レ死。君知レ之乎。君之門下。無レ不レ居二高尊位一。太子門下無二貴者一。君之府藏二珍珠寶玉一。君之駿馬盈二外廐一。美女充二後庭一。王之春秋高。一日山陵崩。太子用レ事。君危二於累卵一。而不レ憂二於朝生一。說有レ可レ以一切。而使君富貴千萬歲。其寧二於太山四維一。必無二危亡之患一矣。陽泉君遽レ席請レ聞二其說一。不韋曰。王年高矣。王后無レ子。子傒有二承國之業一。士倉又輔レ之。王一日山陵崩。子傒立。士倉用レ事。王后之門。必生二蓬蒿一。子異人賢材也。棄在二於趙一。無レ母二於內一。引レ領四望。而願二一得レ歸。王后誠請而立レ之。是子異人無レ

て趙に在り、內に母なし。領を引き西望して、一たび歸るを得んを願ふ。王后誠に請うて之を立てば、是れ子異人國なくして國あり、王后子なくして子ある也。」陽泉君曰く、「然り」と。入つて王后に說く。王后乃ち趙に請うて之を歸す。趙未だ之を遣らず。不韋趙に說いて曰く、「子異人は秦の寵子也。中に母なし。王后取つて之を子とせんと欲す。秦をして趙を屠らんと欲せしめば、一子を顧みて以て計を留めじ、是れ空質を抱く也。若し子異人をして歸りて立つを得しめ、趙厚く之に送遣せば、是れ敢て德に倍き施に畔かず、是れ自ら德と爲して講ぜん。秦王老いたり。一日晏駕せば、子異人ありと雖も、以て秦に結ぶに足らじ」と。趙乃ち之を遣る。異人至る。不韋楚服して見えしむ。王后其狀を說び、其智を高しとして曰く、「吾は楚人也。而して自ら之を子とす」と。乃ち其名を變じて楚と曰ふ。王、子をして誦せしむ。子曰く、「少にして棄捐せられて外に在り。嘗て師傅の敎學する所なし。誦に習はず」と。王之を罷む。乃ち留止す。閒に曰く、「陛下嘗て車を趙

に輙む。趙の豪傑、名を知らるゝを得たる者少なからず。今大王國に反る。皆西面して望む。大王一介の使の以て之を存する無し。臣其の皆怨心ありて、邊境を以て早く閉ぢ晚く開かしめんを恐る」と。王以て然りとし、其計を奇とす。王后之を立てんことを勸む。王乃ち相を召し之に令して曰く、「寡人の子、楚に若く莫し。立てゝ以て太子とせよ」と。子楚立つ。不韋を以て相となす。號して文信侯と曰ひ、藍田の十二縣を食む。王后、華陽太后と爲る。諸侯皆秦に邑を致す。

一 商人也。邯鄲は趙都、賈しは商賈をしに行くをいふ 二 秦より趙に質子として來り居る異人（後に子楚）といふ人を見る 三 利益 四 もりたてば 五 一生懸命に田地を耕作するも 六 襤かき衣有り餘る程の食物 七 恩德を後世まで遺し得べし 八 鮑註に爲のごとしと解す、一仕事せんとの意 九 史記には「聊城」に作る 一〇 わざ〳〵 一一 異人の異母兄にて孝文の太子と內定せる者 一二 宮中 一三 外に出でて身を固慎不可測にして何時どうなるか知れぬ趙國に託す 一四 一旦約に背かば身は必ず殺されん 一五 秦に也 一六 孝文の后華陽夫人 一七 君には死刑になるべき程の罪あり 一八 年齡 一九 一旦王の死に遭ひて。山陵は墳墓の處、王崩ずれば山陵を設いて墳をつくる之を山陵崩るといふ也 二〇 木槿（モクキン）と蜂蝟との兩說あり、何れにしても壽命一日に過ぎざるもの 二一 我に說あり之に因る時は只この一事にて萬事都合よく。一切は一變と

國而有國。王后無子而有子也。陽泉君曰。然。入說王后。王后乃請趙而歸之。趙未之遣。不韋說趙曰。子異人秦之寵子也。無母於中。王后欲取而子之。使秦而欲屠趙。不顧一子以留之計。是抱空質也。若使子異人歸而得立。趙厚送遣之。是不敢倍德。畔而施。是自爲德講。秦王老矣。一日晏駕。雖有子異人。不足以結秦。趙乃遣之。異人至。不韋使楚服而見王后。說其狀。高其智曰。吾楚人也。而自子之。乃變其名曰楚。王使子誦。子曰。少棄捐在外。嘗無師傅所教學。不習於誦。王罷之。乃留止。問曰。陛下嘗軼車於趙矣。趙之豪傑。得知名者不少。今大王反國。皆西面而望。大王無一介之使以存之。臣恐其皆有懇心。使中邊境早閉晚開。王以爲然。奇其計。王后勸立之。王乃召相。令之曰。寡人子莫若楚。立以爲太子。子楚立。以不韋爲相。號曰文信侯。食藍田十二縣。王后爲華陽太后。諸侯皆致秦邑。

ふい君　地の西方の隅　華陽夫人　子傷の傳也　よもぎ。さびれて衰ふる形容　宮中　類を引きのばして西方秦を望み　國を傾くべかざる地位に居りながら　子異人は敢て趙の德に背かず施に背かず必ず厚く之に報いて兩國和親ならん　子異人は自ら趙を德として和好を結ぶに相違なし　王の死をいふ　王后は楚人なるが故に楚の服を着て之を悅ばしむる也　異人の名　異人に書を讀ましむ　宮中に留めて讀く　異人は王の問服の時王に說いて曰く　孝文王亦嘗て趙に質たり、今之を國曲にいふ也　それら趙の豪傑は皆西の方秦を望みて大王を思慕す　一人の使者を遣して　存問。安否を尋ぬるをいふ　それら豪傑が王を戀ふる心を起して　秦に對して警戒を嚴にするをいふ　領邑とす　太后の養地として獻上せる也

文信侯欲攻趙以廣河間。使剛成君蔡澤爲燕相。澤事燕。三年而燕太子質於秦。文信侯因請張唐相燕。欲與燕共伐趙。以廣河間之地。張唐辭曰。燕者必徑於趙。趙人得唐者。受百

莊襄王

始皇帝

文信侯趙を攻めて以て河間を廣めんと欲し、剛成君蔡澤をして燕に事へしむ。三年にして燕の太子、秦に質たり。文信侯因て張唐に燕に相たらんことを請ひ、燕と共に趙を伐つて以て河間の地を廣めんと欲す。張唐辭して曰く、「燕は必ず趙に徑す。趙人唐を得る者は百里の地を受く」と。文信侯去つて快からず。少庶子甘羅曰く、「君侯何ぞ快からざるの甚だしきや。」文信侯曰く、「吾れ剛成君蔡澤をして燕に事へしむる三年にして、燕の太子已に入つて質たり。今吾れ自ら張唐に燕に相たらんことを請へども、而も行くを肯んぜず。」甘羅曰く、「臣請ふ之を行かしめん。」文信侯叱して曰く、「去れ、我自ら之を行かしめんとするも、而も肯んぜ

里之地。文信侯去而不レ快。少庶子甘羅曰。君侯何不レ快甚也。文信侯曰。吾令二剛成君蔡澤事レ燕。三年而燕太子已入質矣。今吾自請二張卿相レ燕。而不レ肯レ行。甘羅曰。臣請行レ之。文信侯叱曰。去。我自行レ之而不レ肯。汝安能行レ之也。甘羅曰。夫項橐生七歲。而爲二孔子師一。今臣生十三歲於茲一矣。君其試レ臣。奚以遽言レ叱也。甘羅見二張唐一曰。卿之功孰二與武安君一。唐曰。武安君戰勝攻取。不レ知二其數一。攻レ城隳レ邑。不レ知二其數一。臣之功不レ如二武安君一也。甘羅曰。卿明知二功之不レ如二武安君一與。曰。知レ之。應侯之用レ秦也。孰二與文信侯專一。曰。應侯不レ如二文信侯專一。曰。

ず。汝安くんぞ能く之を行かしめん。」甘羅曰く、「夫れ項橐は生れて七歲にして、孔子の師と爲る。今臣生れて茲に十二歲、君其れ臣を試みよ。奚を以て遽かに叱を言ふや」と。甘羅、張唐に見えて曰く、「卿の功は武安君に孰れぞ。」唐曰く、「武安君は戰へば勝ち攻むれば取る、其數を知らず、城を攻め邑を墮る、其數を知らず。臣の功は武安君に如かず。」甘羅曰く、「卿明かに功の武安君に如かざるを知るか。」曰く、「之を知る。」「應侯の秦に用ひらるゝや、文信侯の專なるに孰れぞ。」曰く、「應侯は文信侯の專なるに如かず。」曰く、「卿明かに文信侯の專なるに如かざるを知るか。」曰く、「之を知る。」甘羅曰く、「應侯の趙を伐たんと欲するや、武安君之を難ず。(一四) 咸陽を去る七里、絞つて之を殺せり。今文信侯自ら卿の燕に相たらんを請ふ。而るに卿行くを肯んぜず。臣、卿が死する所の處を知らず。」唐曰く、「請ふ孺子に因て行かん」と。(一五) 庫に車を具へ、厩に馬を具へ、府に幣を具へしめて、行くに日あり。甘羅、文信侯に謂つて曰く、「臣に車五乘を借せ。請ふ張唐の爲めに先づ趙に報ぜん」と。趙王に見ゆ。趙王郊迎す。趙王に謂つて曰く、「燕の太子丹の秦に入れるを聞きしか。」曰く、「之を聞けり。」「燕の太子の秦に入るものは、燕、秦を欺かざる也。張唐の燕に相たるものは、秦、燕を欺かざる也。秦・燕相欺かずんば、則ち趙を伐たん、危ふし。燕・秦の相欺かざる所以は、異なる故なし。趙を攻めて河間を廣めんと欲すれば也。今王、臣に五城を割らし、以て河間を廣めば、請うて燕の太子を歸し、強趙と與に弱燕を攻めん」と。趙王立ろに五城を割き、以て河間を廣む。燕の太子を歸す。趙、燕を攻め、上谷の三十六縣を得たり。秦に什の一を與ふ。

一 差也。原本缺之。但、名のみにて本文なき也 二 呂不韋 三 地名 四 剛成君は蔡澤の號。河間の地を廣むるには先づ燕を味方にする必要あり、故に蔡澤をして燕に事へて籌策する所あらしめ三年にし其功表はれたる也 五 秦の卿 六 秦より燕に往くのには必ず趙を通る。史記には燕の上に「之」(ユク)の字あり 七 唐は張唐の自稱。趙にては嘗て自分が趙を伐ちたるを怨みに思ひ、自分を捕へ得たる者は百里の地を受ける事になり居ると也 八 張唐の許を去りて家に歸り 九 官名。甘羅は甘茂の孫にて當時文信侯の家人たりしなちん 一〇 幾の人。此事蹟は他に所見なし 一一 權を專らにする 一二 白起 一三 其非をいふ 一四 武安君を杜郵に殺す、但

卿明知レ爲レ不レ如二文信侯專一與。曰。知レ之。甘羅曰。應侯欲レ伐レ趙。武安君。離レ之。去二咸陽一七里。絞而殺レ之。今文信侯自請二卿相一レ燕。而卿不レ肯レ行。臣不レ知二卿所レ死之處一矣。唐曰。請因二孺子一而行。令二庫具レ車。廐具レ馬。府具レ幣。行有レ日矣。甘羅謂二文信侯一曰。借二臣車五乘一。請爲二張唐一先報レ趙。見二趙王一。趙王郊迎。謂二趙王一曰。聞二燕太子丹之入レ秦與。曰。聞レ之。聞二張唐之相レ燕與。曰。聞レ之。燕太子入レ秦者。燕不レ欺レ秦也。張唐相レ燕者。秦不レ欺レ燕也。秦燕不二相欺一者。無二異故一。欲三攻レ趙而廣二河間一也。今王齎二臣五城一。以廣二河間一。請歸二燕太子一。與二強趙一攻二弱燕一。趙王立割二五城一。以廣二河間一。歸二燕太子一。趙攻レ燕得二上谷三十六縣一。與二秦什一一。

し前章に出づる如く絞殺の事なし傳聞のまゝに言ひたるならん　一一　あなたはどこでどうして殺さるゝか分りません　一二　童子。甘羅をいふ。坊ちやんの御言葉添へにより燕に行きませうと也　一三　燕に行く費用の貨財をいふならん　一四　いよ〳〵行く日取も決したり　一五　自身城外まで出迎ふ。貴賓の禮を以てせる也　一六　欺かぬといふ證據也　一七　趙の國は甚だ危ふし　一八　五城の地を秦に贈るを諾されその旨を臣に持たせて秦に歸らしめ　一九　秦では也。史記には燕太子の上に「秦」の字あり　二〇　燕の地　二一　十分の一

秦王欲レ見二頓弱一。頓弱曰。臣之義不二參拜一。王能使二臣無レ拜則可矣。不即不レ見也。秦

秦王、頓弱を見んと欲す。頓弱曰く、「臣の義、參拜せず。王能く臣をして拜する無からしめば、則ち可なり、不らずんば即ち見えじ」と。秦王之を許す。是に於て頓子曰く、「天下其實ありて其名なき者有り、其實なくして其名ある者有り、其名なく又其實なき者有り。王之を知るか。」王曰く、「知らず。」頓子曰く、「其實

王許レ之。於レ是頓子曰。天下有下有二其實一而無二其名一者。有下無二其實一而有二其名一者。有下無二其名一又無二其實一者。王知レ之乎。王曰。弗レ知。頓子曰。有二其實一而無二其名一者。商人是也。無二把レ銚推レ耨之勞一。而有二積粟之實一。此有二其實一而無二其名一者也。無二其實一而有二其名一者。農夫是也。解レ凍而耕。暴レ

ありて其名なき者は商人是れ也。銚を把り耨を推すの勞なくして、積粟の實あり。此れ其實ありて其名なき者也。其實なくして其名ある者は農夫是れ也。凍を解いて耕し、背を暴して耨り、而して積粟の實なし。此れ其實なくして其名ある者也。其名なく又其實なき者は王乃ち是れ也。已に立つて萬乘たるも孝の名なく、千里を以て養ふも孝の實なし」と。秦王悖然として怒る。頓弱曰く、「山東の戰國六あり。威、山東を掩はずして母を掩ふ。臣竊かに大王の爲めに取らず。」秦王曰く、「山東の建國兼ぬ可きか。」頓子曰く、「韓は天下の咽喉なり。魏は天下の胸腹なり。王、臣に萬金を資せて、遊んで韓・魏に之くを聽さば、其社稷の臣を秦に入れん。即ち韓・魏從はん。韓・魏從はゞ天下圖る可し。」秦王曰く、「寡人の國貧し。給する能はざらんを恐る。」頓子曰く、「天下未だ嘗て事なくんばあらず。從に非ずんば即ち橫也。橫成らば、則ち秦、帝たらん。從成らば、則ち楚、王たらん。秦、帝たらば、即ち天下を以て恭養せん。楚、王たらば、即ち王萬金ありと雖も、私するを得じ、

背而耦。無二禮
粟之實一。此無二
其實一而有二其
名一也。無二其名一
又無二其實一者
王乃是也。已
立爲二萬乘一。無二
孝之名一。以二千
里一養。無二孝之
實一。秦王愕然
而怒。頓弱曰。
山東戰國有レ
六。威不レ掩二於
山東一而掩二於
母一。臣竊爲二大王一不レ取也。秦王曰。山東之建國可レ兼與。頓子曰。韓天下之咽喉。
魏天下之胸腹。王資二臣萬金一而遊。聽レ之二韓魏一。入二其社稷之臣於秦一。卽韓魏從。韓魏從而天
下可レ圖也。秦王曰。寡人之國貧。恐レ不レ能レ給也。頓子曰。天下未二嘗無レ事也。非レ從卽橫也。橫成
則秦帝。從成則楚王。秦帝。卽以二天下一恭養。楚王。卽王雖レ有二萬金一。弗レ得レ私也。亦充二軍國之用一
矣。秦王曰。善。乃資二萬金一。使下東遊二韓魏一。入二其將相一。北遊二燕趙一。而殺中李牧。齊王入朝。四國畢從。

亦軍國の用に充てんのみ。」秦王曰く、「善し」と。乃ち萬金を資せて、東、韓・魏に遊んで其の將相を入れ、北、燕・趙に遊んで李牧を殺さしむ。齊王入朝し、四國畢く從へるは、頓子の說也。(一九)

一 始皇帝。頓弱は秦の處士 二 臣の主義として諸侯に參謁拜禮せず 三 錢はくは、耨はすき、共に田草を刈取る道具 四 氷の厚きもの。冬は氷を破つて耕し、夏は日に背をさらして草を取る 五 萬乘の君 六 千里の國土を以て供養せらるゝも 七 むつとして 八 大王の威光は山東の六國を掩ひ壓する能はずして反りて母后の上にのみ威光を振ふ。始皇の母嫪毐を宮に幽閉す、事史記に詳也 九 先王の建てたる國の基、獨立したる國々の意也、一本「軍國」に作る、衆は衆併の意 一〇 齊に通ず 一一 國家の柱石たる重臣 一二 其萬金を支給する 一三 合從 一四 連衡 一五 供養也、一身の養ひとするをいふ 一六 自ら自由に私用す 一七 趙解 一八 魏韓燕趙 一九 これ皆頓弱遊說の功也

或爲二六國一。說二
秦王一曰。土廣
不レ足二以爲一レ安。
人衆不レ足二以
爲レ强。若土廣
者安。人衆者
强。則桀紂之
後將レ存。昔者
趙氏亦嘗强
矣。曰。趙强何
若。舉レ左案レ齊。
舉レ右案レ魏。厭二
案萬乘之國
二一。國二千乘之
宋一也。築二剛平一。
衞無二東野一。芻
牧薪采。莫三敢
闚二東門一。當二是
時一。衞危二於累
卵一。天下之士

或ひと六國の爲めに秦王に說いて曰く、「土廣きも以て安しとするに足らず、人衆きも以て强しとするに足らず。若し土廣き者安く、人衆き者强くば、則ち桀・紂の後、將に存せんとす。昔者趙氏亦嘗て强かりき。曰く、趙の强きは何若なりしか。左を擧ぐれば齊を案へ、右を擧ぐれば魏を案へ、萬乘の國二を厭案して、千乘の宋を困しめ、剛平に築いて、衞東野なく、芻牧薪採敢て東門を闚ふ莫し。是の時に當つて衞は累卵よりも危ふし。天下の士相從つて謀つて曰く、『吾れ將に其丟質を還して、邯鄲の君に朝せんか』と。是に於てか天下邯鄲を伐たんと稱する者あり。夕に令して朝に行はれざる莫し。魏、邯鄲を伐つ。因て退いて逢澤の遇を爲し、夏車に乘じて、夏王と稱し、一朝にして天子と爲り、天下皆從ふ。齊の宣王之を聞いて、兵を擧げて魏を伐つ。壤地兩分して國家大に危ふし。梁王身ら質を抱き璧を執つて、陳侯の臣たらんと請ふ。天下乃ち梁を釋す。郢の威王之を聞いて、寢て寐ねず、食して飽かず、天下の百姓を帥ゐて、以て申縛と泗水の

相從謀曰。吾將レ還二其委質一。而朝二於邯鄲一之君一乎。於レ是天下有レ稱レ伐二邯鄲一者。莫レ不二夕令朝行一。魏伐二邯鄲一。因退爲二逢澤之遇一。乘二夏車一稱二夏王一。一朝爲二天子一。天下皆從。齊宣王聞レ之。舉レ兵伐レ魏。壞地兩分。國家大危。梁王身抱レ質執レ璧。請レ爲二陳侯臣一。天下乃釋レ梁。鄄威王聞レ之。寢上に遇ひ、而して大いに申縛を敗る。趙人之を聞いて枝桑に至り、燕人之を聞いて格道に至る。格道通ぜず、平際絶え、齊戰ひ敗れて勝たず、謀つて則ち得ず、陳毛をして、劒揮を釋て、南に委して罪を聽かしめ、西、趙に說き、北、燕に說き、內、其百姓を喻して、天下乃ち齊を釋す。是に於て、天下薄を積んで厚と爲し、少を聚めて多と爲し、以て同じく鄄の威王を側牖の間に言へり。臣豈に鄄の威王を以て、政衰へ謀亂れて、以て此に至ると爲さんや。鄄、天下の諸侯に强臨するを爲す。故に天下之を伐つを樂へる也。」

一 夏の桀、殷の紂。共に暴君也　二 左手を　三 卽ち齊と魏、歷は歷也　四 原文の「圖」の字は張居正の說にとりて改め譯す　五 趙の地。こゝに城を築きて衞を攻め、衞は東野の地を失ふ　六 草刈り、牧畜者、木こりも慴れて東門を出てず　七 委は眞、質は贄、還は取り戻す意。臣事する時には贄(二へ)を置きて義を結ぶ、それを取り戻すとは今迄他の國君に事へたるを止めて新に趙に事ふるを欲する也。以上趙王の威力の盛なるをいふ。正解には「乎」を反語の如く見て、「敢て趙に朝せず、天下趙の强きを惡むが故に然り」と解したれど今取らず　九 斯く强威を極めて天下の惡しみを受けたればと也　十 會合　十一 中國の車。安井息軒は「夏車ハ蓋シ夏后氏ノ車ナリ、鷄天子ノ位ニ卽キ國ヲ改メテ夏ト號ス因リテ夏后氏ノ車ニ乘ジ自ラ夏王ト稱スル也」と　十二 二分す。卽ち國の大半は敵に取らる　十三 魏王　十四 齊王也、齊は陳敬仲の後なればいふ　十五 楚の都、卽ち楚の威王也　十六 魏破れて齊の威燄となりしを聞き之を破らんと苦心せる也　十七 寢所に入りても眠らず　十八 秦將也、「轉」一に「縛」に作る　十九 遭遇戰をなし　二十 趙燕も亦齊の强を惡み來りて之を伐たんと欲する也。枝桑・格道共に地名　二十一 遮斷されて通ぜず。齊が孤立無援となりたるをいふ　二十二 齊の臣　二十三 揮は夜警の擊柝也。自ら警衞せずして卑を示し、南、楚の爲す所に委して罪を聽く也。但、此句殊に異說紛々正解には「揮」は履の說にて、劒を釋き又履を釋きて徒跣となり卑服を示す也とす。其他「陳毛をして劒を釋て委し南罪を聽かしむ」と訓じ、陳毛をして劒をときて丸腰となり、進物を獻上し、南方に向つては楚の所斷を仰がしめたりの義とす。蓋し揮委を撫委とし、南聽を下文西說北說の對と解したる也　二十四 次第次第に天下の與論の甚しくなり、楚を惡むといよ〳〵增し行くをいふ　二十五 原文「紂」の字、高誘の說によりて改む。一說には紂も亦履也といふ。堂側のまどの閒で誹議す。室內にて相語るの意にや　二十六 强を以て臨む。以上强の恃むべからざるを縷言して以て秦が六國を攻むるの不可を諷する也

不レ窠。食不レ飽。帥二天下百姓一。以與二申縛一遇二於泗水之上一。而大敗二申縛一。趙人聞レ之至二枝桑一。燕人聞レ之至二格道一。格道不レ通。平際絶。齊戰敗不レ勝。謀則不レ得。使二陳毛釋一劒揮一委レ南聽一。罪。西說レ趙。北說レ燕。內喻二其百姓一。而天下乃釋レ齊。於レ是天下積レ薄而爲レ厚。聚レ少而爲レ多。以同言二鄄威王於側牖之間一。臣豈以二鄄威王一爲下政衰謀亂。以至中於此上哉。鄄爲レ强二臨天下諸侯一。故天下樂レ伐レ之也。

四國爲レ一。將二以攻レ秦。秦王

四國一と爲り、將に以て秦を攻めんとす。秦王、群臣賓客六十人を召して問ひ

召二群臣賓客六十人一而問焉曰。四國爲レ一。將二以圖レ秦。寡人屈二於內一。而百姓靡二於外一。爲レ之奈何。群臣莫レ對。姚賈對曰。願出使二四國一。必絕二其謀一而案二其兵一。乃資二車百乘金千斤一。衣以二其衣冠一。舞以二其劍一。姚賈辭行。絕二其謀一。止二其兵一。與レ之爲レ交。以報レ秦。秦王大說。賈封二千戶一。以爲二上卿一。韓非短レ之曰。賈以二珍珠重寶一。南使二荊吳一。北使二燕代之閒一。三年。四國之交未二必合一也。而珍珠重寶盡二於內一。是賈以二王之權國之寶一。外自交二於諸侯一。願王察レ之。且梁監門子。嘗盜二於梁一。臣二於趙一而逐。取二世監門子。梁之大盜。趙之逐臣。與同知二社稷之計一。非レ所三以厲二群

て曰く、「四國一と爲つて、將に以て秦を圖らんとす。寡人內に屈して、百姓外に靡きん。之を爲す奈何」と。群臣對ふる莫し。姚賈對へて曰く、「賈、願はくは出でて四國に使し、必ず其謀を絕つて其兵を案めん」と。乃ち車百乘金千斤を資し、衣するに其衣冠を以てし、舞ばしむるに其劍を以てす。姚賈辭して行き、其謀を絕ち、其兵を止め、之と交を爲し、以て秦に報ず。秦王大いに說び、賈を千戶に封じて、以て上卿となす。韓非之を短つて曰く、「賈、珍珠重寶を以て、南、荊・吳に使し、北、燕・代の閒に使すること三年、四國の交未だ必ずしも合はず、而して珍珠重寶內に盡く。是れ賈、王の權、國の寶を以て、外自ら諸侯に交はる也。願はくは王之を察せよ。且つ梁の監門の子にして、嘗て梁に盜し、趙に臣として逐はる。世々監門の子、梁の大盜、趙の逐臣を取つて、與に同じく社稷の計を知らしむるは、羣臣を厲ます所以に非ず」と。王、姚賈を召して問うて曰く、「吾聞く、子、寡人の財を以て諸侯に交はると。諸ありや」對へて曰く、「有り。」王曰

く、有らば何の面目か復た寡人を見る。」對へて曰く、「曾參其親に孝なれば、天下以て子となさんを願ひ、子胥君に忠なれば、天下以て臣となさんを願ひ、貞女丁巧なれば、天下以て妃となさんと願ふ。今賈、王に忠にして、而も王知らざる也。賈、四國に歸せずんば、尙ほ焉くにか之かん。賈をして君に不忠ならしめば、四國の王尙ほ焉くんぞ賈の身を用ひん。桀は讒を聽いて其良將を誅し、紂は讒を聽いて其忠臣を殺し、身死し國亡ぶるに至る。今王讒を聽かば、則ち忠臣なけん。」王曰く、「子は監門の子にして、梁の大盜、趙の逐臣なり。」姚賈曰く、「太公望は齊の逐夫、朝歌の廢屠、子良の逐臣、棘津の讎不庸、文王之を用ひて王たり。管仲は其の鄙人の賈人也、南陽の弊幽、魯の免囚、桓公之を用ひて霸たり。百里奚は虞の乞人、傳賓するに五羊の皮を以てせり、穆公之を相として、西戎を朝せしむ。文公は中山の盜を用ひて、城濮に勝てり。此の四士は皆詬醜あり、大いに天下に誹られしを、明主之を用ひたり。其の與に功を立つ可きを知れば也。卞隨・務光・

臣也。王召姚賈而問曰。吾聞子以寡人財交於諸侯。有諸。對曰。有。王曰。何面目復見寡人。對曰。曾參孝其親。天下願以爲子。子胥忠於君。天下願以爲臣。貞女工巧。天下願以爲妃。今賈忠王。而王不知也。賈不歸四國。尙焉之。使賈不忠於君。四國之王。尙焉用賈

申屠狄の若くならしめば、人主豈に其用を得んや。故に明主は其汙(二九)を取らず、其非を聽かずして、其の己の用を爲すを察す。故に以て社稷を存す可き者は、外に誹る(三〇)者ありと雖も聽かず。高世(三一)の名ありと雖も、咫尺(三二)の功なき者は賞せず。是を以て羣臣敢て虛願(三三)を以て上に望む莫し。」秦王曰く、「然り」と。乃ち復た姚賈を使ひて韓非を誅す。

一 荆齊燕代 二 秦四國の兵を受けば、力必ず屈し而して賢士皆震さん 三 魏人 四 止也 五 秦王乃ち也 六 給し 七 帶と同意、一本「帶」に作る 八 彼は魏の都大梁の門番の子 九 代々門番である者の子 一〇 貞淑にして女子のわざに巧みなれば 一一 音配。配偶とすること 一二 關龍逢 一三 比干 一四 其妻に逐出されたる夫 一五 朝歌は地名、肉を賈ひて賣れず故に隱居といふ。不景氣な隱者 一六 人名、但其事蹟未詳 一七 棘津は太公望の出でたる地、彗不庸とは身を賣りて人の僕役たらん事を求めしも誰も顧はざる者の意 一八 「其」は上文を承けて齊を指す、鄙人は地名 一九 商人 二〇 困辱せる隱者 二一 公子糾の難に死せず魯の爲めに束縛せられて齊に歸る、故に免囚といふ 二二 乞食 二三 轉賣也 二四 晉の文公、中山の盜の事蹟未詳 二五 地名、楚の成王に勝ちたる也 二六 詬は辱、醜は恥 二七 共に湯時の人、湯の聘を辭す 二八 紂の時の人、紂の無道を見るに忍びずして自ら淵に沈む 二九 其汚點を問題にせず 三〇 其非行を耳に留めず 三一 世に名高き 三二 咫は八寸、どく僅かの意 三三 其功なくして賞のみを上に望むをいふ

之身。桀聽讒而誅其良將。紂聞讒而殺其忠臣。至身死國亡。今王聽讒。則無忠臣矣。王曰。子監門子。梁之大盜。趙之逐臣。姚賈曰。太公望齊之逐夫。朝歌之廢屠。子良之逐臣。棘津之讎不庸。文王用之而王。管仲其鄙人之賈人也。南陽之弊幽。晉之免囚。桓公用之而霸。百里奚虞之乞人。傳賣以五羊之皮。穆公相之而朝西戎。文公用中山盜。而勝於城濮。此四士者。皆有詬醜。大誹於天下。明主用之。知其可與立功也。使若下隨務光申屠狄。人主豈得其用哉。故明主不取其汙。不聽其非。察其爲己用。故可以存社稷者。雖有外誹者不聽。雖有高世之名。無咫尺之功者不賞。是以群臣莫敢以虛願望於上。秦王曰。然。乃復使姚賈而誅韓非。

李斯爲秦客卿。會韓人鄭國來。間秦。以作注溉渠。已而覺。秦王宗室大臣皆言秦王曰。諸侯人來事秦者。大抵爲其主游間於秦耳。

李斯、秦の客卿と爲る。會〻韓人鄭國來つて秦を間して、注溉渠を作り、已にして覺はる。秦王の宗室大臣皆秦王に言つて曰く、「諸侯の人の來つて秦に事ふる者は、大抵其主の爲めに秦に游間するのみ。請ふ一切、客を逐はん」と。李斯も議せられて亦逐中に在り。斯乃ち上書して曰く、「臣聞く、吏、客を逐ふを議すと。竊かに以て過てりと爲す。昔、穆公は士を求めて、西、由余を戎に取り、東、百里奚を宛に得、蹇叔を宋に迎へ、丕豹・公孫支を晉に求めぬ。此の五子は秦に產せ

請一切逐レ客。李斯議亦在二逐中一。斯乃上書。曰。臣聞吏議レ逐レ客。竊以爲レ過矣。昔穆公求レ士。西取二由余於戎一。東得二百里奚於宛一。迎二蹇叔於宋一。求二丕豹公孫支於晉一。此五子者。不レ產二於秦一。而穆公用レ之。幷レ國二十。遂霸二西戎一。孝公用二商鞅之法一。移レ風易レ俗。民以殷盛。國以富强。百姓樂レ用。諸侯親服。獲二楚魏之師一。舉レ地千里。至レ今治强。惠王用二張儀之計一。拔二三川之地一。西幷二巴蜀一。北收二上郡一。南取二漢中一。包二九夷一。制二鄢郢一。東據二成皐之險一。割二膏腴之壤一。遂敗二六國之從一。使二之西面事レ秦。功施到レ今。昭王得二范雎一。廢二穰侯一。逐二華陽一。彊二公室一。杜二私門一。蠶二食諸侯一。使三秦

ず。而も穆公之を用ひて、國を幷すること二十、遂に西戎に霸たり。孝公は商鞅の法を用ひて、風を移し俗を易へ、民以て殷盛、國以て富强、百姓用ひられんを樂ひ、諸侯親服し、楚・魏の師を獲て、地を舉ぐること千里、今に至つて治强なり。惠王は張儀の計を用ひて、三川の地を拔き、西、巴蜀を幷せ、北、上郡を收め、南、漢中を取り、九夷を包ね、鄢・郢を制し、東、成皐の險に據り、膏腴の壤を割いて、遂ひに六國の從を敗り、之をして西面して秦に事へしめ、功施いて今に到る。昭王は范雎を得て、穰侯を廢し、華陽を逐ひ、公室を彊うし、私門を杜ぎ、諸侯を蠶食して、秦をして帝業を成さしむ。此の四君は皆客の功を以てせり。此に由て之を觀るに、客何ぞ秦に負かん。向に四君をして客を却けて內れず、士を疎んじて用ひざらしめば、是れ國をして富利の實なくして、秦をして强大の名なからしめしならん。今陛下、崑山の玉を致し、隨和の寶を有し、明月の珠を垂れ、太阿の劍を服し、纖離の馬に乘り、翠鳳の旗を建て、靈鼉の鼓を樹つ。此

の數寶は秦一も生ぜず。而も陛下之を說ぶは何ぞや。必ず秦國の生ずる所にして然して後可ならば、則ち是れ夜光の璧は朝廷を飾らず、犀象の器は玩好と爲らず、鄭・衛の女は後宮に充たずして、駿良駃騠は外廐に實たず、江南の金錫は用を爲さず、西蜀の丹青は采を爲さじ。後宮を飾り、下陳に充て、心意を娛しましめ、耳目を說ばしむる者、必ず秦に出でゝ然して後可ならば、則ち是れ宛珠の簪、傅璣の珥、阿縞の衣、錦繡の飾、前に進まずして、俗に隨つて雅化する佳冶窈窕たる趙女は側に立たざらん。夫れ甕を擊ち缶を叩き、箏を彈じ髀を搏つて、歌呼嗚嗚として耳目を快くする者は、眞に秦の聲也。鄭衛・桑閒、韶虞・武象は、異國の樂也。今甕を擊ち缶を叩くを棄てゝ鄭衛に就き、箏を彈ずるを退けて韶虞を取る。是の若きものは何ぞや。意を當前に快くして觀に適へばのみ。今人を取るは則ち然らず。可否を問はず、曲直を論ぜず、秦に非ざる者は去り、客たる者は逐ふ。然らば則ち是れ重んずる所の者は色樂珠玉に在りて、輕んずる所の者は人民

成二帝業一。而四君者。皆以二客之功一。由レ此觀レ之。客何負二於秦一哉。向使二四君卻レ客而不レ內。疎レ士而不レ用。是使下國無二富利之實一。而秦無中強大之名上也。今陛下致二昆山之玉一。有二隨和之寶一。垂二明月之珠一。服二太阿之劍一。乘二纖離之馬一。建二翠鳳之旗一。樹二靈鼉之鼓一。此數寶者。秦不レ生レ一焉。如

に在る也。此れ海内に跨り、諸侯を制する所以の術に非ず。臣聞く、地廣き者は粟多く、國大なる者は人衆く、兵彊ければ則ち士勇むと。是を以て太山は土壤を讓らず、故に能く其大を成す。河海は細流を擇ばず、故に能く其深きを就す。王者は衆庶を卻けず、故に能く其德を明かにす。是を以て地に四方なく、民に異國なく、四時美を充て、鬼神福を降す。此れ五帝三王の敵なき所以也。今乃ち黔首を棄てゝ以て敵國に資し、賓客を卻けて以て諸侯を業け、天下の士をして退いて敢て西に向はず、足を裹んで秦に入らざらしむ。此れ所謂寇に兵を藉し、而して盜に糧を齎らすもの也。夫れ物の秦に產せずして寶とす可き者多く、士の秦に產せずして忠を願ふ者衆し。今客を逐うて以て敵國に資し、民を損して以て讎を益さば、內自ら虛となつて、外怨を諸侯に樹てん。國危ふきこと無きを求むとも、得可らざる也」と。秦王乃ち逐客の令を除き、李斯の官を復す。

一 間隙也、間隙に乘じて事情を探知する意 二 田に水を注ぐ爲めの溝堤、其工事を請負ひて其間に國情を探る

陛下說レ之何也。必秦國之所レ生然後可。則是夜光之璧。不レ飾二朝廷一。犀象之器。不レ爲二玩好一。鄭衛之女。不レ充二後宮一。而駿良馱騾。不レ實二外廐一。江南金錫不レ爲レ用。西蜀丹青不レ爲レ采。所下以飾二後宮一。充二下陳一。娛二心意一。說中耳目上者。必出二於秦一然後可。則是宛珠之簪。傅璣之珥。阿縞之衣。

也 二 秦の王族 三 逐はるべき者の中 四 にぎはひさかん也 五 二國の軍を配下に得 七 地名、險は險 八 肥沃の土 九 合從 一〇 六國 一一 其功が今日に迄及んでゐる 一二 宣太后の弟芈茂 一三 秦の朝家 一四 私門の請 一五 隨侯の珠卞和の璧 一六 珠の光澤明月の如し、故に此名あり 一七 良劍の名 一八 良馬の名 一九 翠羽を鳳形となして飾りたる 二〇 鱷魚の類、其皮で張つた鼓 二一 夜中に光を放つ名珠の名 二二 犀角象牙 二三 玩弄嗜好の具 二四 良馬の名 二五 繪具、采は彩色 二六 後列、侍妾を謂ふ 二七 宛地の珠にて造りしかんざし 二八 傳は附、璣は角（カド）の有る珠、珥は耳に垂れふさぐもの、即ち角玉を附けた耳飾 二九 齊の阿縣より出す純白な帛 三〇 時々の流行につれて閑雅なる姿に變化する、なまゆかしくたをやかに美しい趙の女 三一 甕は汲瓶、缶は酒壺を盛る器、共に土器にて、我古代のミカ・ホトギの類 三二 コト也、竹製にて琴に似たる樂器 三三 自分の股を手で拍つて拍子を取る 三四 秦人の歌ふ聲の形容 三五 音樂 三六 何れも樂の名 三七 目前 三八 目を樂しましむ 三九 兼併統御するをいふ 四〇 他に推し讓らずして如何なる少土にても受け容る 四一 四時の氣候調和して美を充たす 四二 多くの人々を納れ用ふ 四三 地に四方の別なく皆一體に王土なり 四四 皆王臣たり 四五 人民 四六 敵國の用に立て 四七 其功業を成さしめる意 四八 秦也 四九 足がつゝんでゐる樣で前（スゝ）まないのをいふ 五〇 敵に刃物を貸す、反て危害の我身に及ぶ喩 五一 持つて行つて與へる、贈る 五二 秦國の民に損失を來して、以て我が讐に利益を與へば 五三 國內は自然と空虛になりて 五四 客の逐はれたる者は秦を怨みて諸侯の國に入り秦に對して復讐を圖るをいふ

錦繡之飾。不レ進二於前一。而隨レ俗雅化。佳冶窈窕趙女。不レ立二於側一也。夫擊レ甕叩レ缶。彈レ箏搏レ髀。歌呼嗚嗚。快二耳目一者。眞秦之聲也。鄭衛桑閒。韶虞武象者。異國之樂也。今棄二擊レ甕叩レ缶而就二鄭衛一。退レ彈レ箏而取二韶虞一。若レ是者何也。快二意當前一。適レ觀而已矣。今取レ人則不レ然。不レ問二可否一。不レ論二曲直一。非レ秦者去。爲レ客者逐。然則是所レ重者。在二乎色樂珠玉一。而所レ輕者。在二乎人民一也。此非レ所下以跨二海內一。制中諸侯上之術也。臣聞地廣者粟多。國大者人衆。兵彊則士勇。是以太山不レ讓二土壤一。故能成二其大一。河海不レ擇二細流一。故能就二其深一。王者不レ却二衆庶一。故能明二其德一。是以地無二四方一。民無二異國一。四時充レ美。鬼神降レ福。此五帝三王之所二以無レ敵也一。今乃棄二黔首一以資二敵國一。却二賓客一以業二諸侯一。使下天下之士退而不二敢西向一。裹レ足不也入レ秦。此所レ謂藉二寇兵一。而齎二盜糧一者也。夫物不レ產二於秦一。可レ寶者多。士不レ產二於秦一。而願レ忠者衆。今逐レ客以資二敵國一。損レ民以益レ讎。內自虛。而外樹二怨於諸侯一。求二國無レ危。不レ可レ得也。秦王乃除二逐客之令一。復二李斯官一。

卷第四　上

齊　上

威王

濮上の事、贅子死して章子走る。盼子齊王に謂つて曰く、「餘糧を宋に易へんに如かず。宋王必ず說ばん。梁氏敢て宋を過ぎて齊を伐たじ。齊固に弱し。是れ餘糧を以て宋を收むる也。齊國復た强くば、復た之を宋に責むと雖も可ならん。償はずんば、因て以て辭と爲して之を收むるも亦可ならん。」

濮上之事。贅子死。章子走。盼子謂二齊王一曰。不レ如レ易二餘糧於宋一。宋王必說。梁氏不二敢過レ宋伐レ齊。齊固弱。是以二餘糧一收レ宋也。齊國復强。雖三復責二之宋一可。

(一) 濮水の沿岸にて戰ひし時　(二) 贅子は氏未詳、章子は匡章、共に齊の將　(三) 齊の將田盼　(四) 餘糧は兵糧の殘餘。齊の軍敗れて盡く兵糧を收むる能はず、故に之を宋に與へて其歡心を取り置き、後日齊が强勢とならば其償を取らんと也　(五) 梁は魏也。斯くすれば魏は宋が齊を悅ぶを知り、其要擊を恐れて敢て宋を通りて齊を伐たざらん　(六) 國の字の說といふ　(七) 糧に與へたる餘糧を請求す　(八) 口實

不レ償。因以爲レ辭而攻レ之亦可。

邯鄲之難。趙求二救於齊一。田侯召二大臣一而謀曰。救レ趙。孰二與勿レ救。鄒子曰。不レ如レ勿レ救。段干綸曰。弗レ救。則我不レ利。田侯曰。何哉。夫魏氏兼二邯鄲一。其於レ齊何利哉。田侯曰。善。乃起二兵甲一。軍二於邯鄲之郊一。段干綸曰。臣之求レ利。且レ不レ利者。非レ此也。夫救二邯鄲一。

邯鄲の難に、趙救を齊に求む。田侯大臣を召して謀つて曰く、「趙を救ふは救ふ勿きに孰れぞや。」鄒子曰く、「救ふ勿きに若かず。」段干綸曰く、「救はずんば則ち我利ならじ。」田侯曰く、「何ぞや。」「夫れ魏氏の邯鄲を兼ぬる、其れ齊に於て何の利ぞや。」田侯曰く、「善し」と。乃ち兵甲を起して、邯鄲の郊に軍す。段干綸曰く、「臣の利を求むると、且に利ならざらんとするとは此に非ざる也。夫れ邯鄲を救うて其郊に軍するは、是れ趙拔けずして魏全き也。故に、南、襄陵を攻めて以て魏を弊らし、邯鄲拔けて魏の弊を承けんに如かず。是れ趙破れて魏弱まらん。」田侯曰く、「善し」と。乃ち兵を起して、南、襄陵を攻む。七月にして邯鄲拔く。齊因て魏の弊を承けて、大いに之を桂陵に破れり。

㊀ 魏が趙都邯鄲を攻めたる際　㊁ 齊の威王の敬稱　㊂ 鄒忌　㊃ 段干綸の言也　㊄ 併有する　㊅ 陣を張りて屯す　㊆ 邯鄲の郊に軍するの意味に非ず　㊇ 魏の邑　㊈ 齊が趙を救はざれば魏は邯鄲を攻め落す、而して同時に魏は齊に襄陵に攻められて疲弊す、齊は魏の弊に乘じて之を伐たんと也　㊉ 魏の邑

軍二於其郊一。是趙不レ拔而魏全也。故不レ如下南攻二襄陵一以弊上レ魏。邯鄲拔而承中魏之弊。是趙破而魏弱也。田侯曰。善。乃起レ兵南攻二襄陵一。七月邯鄲拔。齊因承二魏之弊一。大破二之桂陵一。

秦假二道韓魏一以攻レ齊。齊威王使二章子將而應レ之。與レ秦交和而舍。使者數相往來。章子爲變二其徵章一。以雜二秦軍一。候者言。章子以レ齊入レ秦。威王不レ聽。頃レ之間候者復言。章子以二齊兵一降レ秦。威王

秦、道を韓・魏に假りて以て齊を攻む。齊の威王、章子をして將として之に應ぜしめ、秦と交和して舍す。使者數〻相往來す。章子爲めに其の徵章を變じて、以て秦軍に雜ふ。候者言ふ、章子、齊を以て秦に入ると。威王應へず。之を頃くして候者復た言ふ、章子齊兵を以ゐて秦に降ると。威王應へず。此の而くするもの三たび。有司請うて曰く、「章子の敗を言ふもの、人を異にして辭を同じうす。王何ぞ將を發して之を擊たざる。」王曰く、「此れ寡人に叛かざるや明かなり。曷爲れぞ之を擊たん」と。頃くありて言ふ、齊兵大いに勝つて秦兵大いに敗ると。是に於いてか、秦王西藩の臣と稱して、齊に謝す。左右曰く、「何を以てか之を知る。」曰く、「章子の母啓罪を其父に得、其父之を殺して、馬棧の下に埋む。吾れ章

不レ應。而レ此者三。有司請曰。言二章子之敗一者。異レ人而同レ辭。王何不二發レ將而擊レ之。王曰。此不レ叛二寡人一明矣。曷爲擊レ之。頃閒言。齊兵大勝。秦軍大敗。於レ是秦王稱二西藩之臣一。而謝二於齊一。左右曰。何以知レ之。曰。章子之母啓得二罪其父一。其父殺レ之。而埋二馬棧之下一。吾使二章子將一也。勉レ之曰。夫子之强。全レ兵而還。必更二葬將軍之母一。對曰。臣非レ不レ能レ更二葬先妾一也。臣之母啓得二罪臣之父一。臣之父未レ教而死。夫不レ得二父之教一而更二葬母一。是欺二死父一也。故不レ敢。夫爲二人子一而不欺二死父一。豈爲二人臣一欺二生君一哉。

子をして將たらしむるや、之を勉まして曰く、『夫れ子の强き、兵を全うして還らば、必ず將軍の母を更め葬むらん』と。對へて曰ふ、『臣先妾を更め葬むる能はざるに非ざる也。臣の母啓罪を臣の父に得、臣の父未だ教へずして死せり。夫れ父の教を得ずして、母を更め葬むるは、是れ死せる父を欺く也。故に敢てせず』と。夫れ人の子として死せる父を欺かず。豈に人の臣として生ける君を欺かんや。」

一 軍門を相對して軍を止む。齊秦兩軍の相對するをいふ　二 旗印を秦の物と同じに變へて秦の軍中に紛れ入る　三 齊軍の偵察者　四 齊の字の下に兵の字を脱したるならん　五 如也　六 西方藩屏の臣と稱して服從する也　七 齊を攻むるの罪を謝す　八 齊王の左右の者齊王に言つて曰く　九 章子の敗かざるを　十 馬舍の牀　十一 章子に對する對稱にて夫子(フウシ)と讀むといふ說もあり　十二 母也　十三 故葬せよと命ぜずして　十四 此れ其敗かざるを知る所以ぞと也

楚將レ伐レ齊。魯親レ之。齊王患レ之。張丐曰。臣請令二魯中立一。乃爲レ齊二見魯君一。魯君曰。齊王懼乎。曰。非二臣所レ知也。臣來弔二足下一。魯君曰。何弔乎。曰。君之謀過矣。君不レ與二勝者一。而與二不レ勝者一。何故也。魯君曰。子以二齊楚一爲二孰勝一哉。對曰。鬼且不レ知也。然則子何以弔二寡人一。曰。齊楚之權

楚將に齊を伐たんとし、魯之に親しむ。齊王之を患ふ。張丐曰く、「臣請ふ魯をして中立せしめん」と。乃ち齊の爲めに魯君に見ゆ。魯君曰く、「齊王懼るゝか。」曰く、「臣の知る所に非ず。臣は來つて足下を弔す。」魯君曰く、「何をか弔する。」曰く、「君の謀過てり。君勝たん者に與せずして、勝たざらん者に與するは何故ぞや。」魯君曰く、「子は齊・楚を以て孰れか勝たんとするや。」對へて曰く、「鬼も且つ知らざる也。」「然らば則ち子は何を以てか寡人を弔する。」曰く、「齊・楚の權敵せり。魯有ると魯無きとを用ひず。足下豈に衆を全うして二國の後に合するに如かんや。楚大いに齊に勝つも、其良士選卒必らず殪れん。其餘兵以て天下を待つに足らんや。齊爲し勝つも、其良士選卒亦殪れん。而して君魯の衆を以て、戰勝の後に合せば、此れ其の德を爲すや亦大にして、其の恩德とせらるゝや亦甚だ大ならん」と。魯君以て然りと爲し、乃ち師を退く。

一 楚に　二 御悔を申しに參りたる也　三 鬼神　四 權衡(つり合ひ)相西敵せり　五 其の强弱には關係なし

敵也。不レ用二有レ魯與レ無レ魯。足下豈如三全レ衆而合二二國之後一哉。楚大勝レ齊。其良士選卒必殪。其餘兵足三以待二天下一。齊爲勝。其良士選卒亦殪。而君以二魯衆一合二戰勝後一。此其爲レ德也亦大矣。其見二恩德一也亦甚大矣。魯君以爲レ然。乃退レ師。

㊀ 中立して衆を全うし、二國の戰後勝ちたる方に合するに如かず ㊁ 天下の大國を引受けて之に相對するに足らず ㊂ 若也 ㊃ 勝つも大に疲弊す、魯が其衆を以て勝つ者に合し、其危を救へば、其德たる大にして ㊄ 楚につく事を止めたる也

成侯鄒忌爲二齊相一。田忌爲レ將。不二相說一。公孫閈謂二鄒忌一曰。公何不二爲レ王謀レ伐レ魏。勝則是君之謀也。君可二以有レ功。戰不レ勝。田忌不レ進。戰而不レ死。曲撓而誅。鄒忌以爲レ然。乃說レ王而使二田忌伐レ魏。田忌三戰三勝。鄒忌以告二公孫閈一。公孫閈乃使下人操二十金一。而往卜中於市。曰。我田忌之人也。吾三戰而三勝。聲威二天下一。欲レ爲大事。亦吉否。卜者出。因令二人捕一。爲レ人卜者。亦驗二其辭於王前一。田忌遂走。

成侯鄒忌、齊の相たり、田忌將たり。相說ばず。公孫閈、鄒忌に謂つて曰く、「公何ぞ王の爲めに謀つて魏を伐たざる。勝たば則ち是れ君の謀也、君以て功有る可し。戰ひ勝たず、田忌進まず、戰つて死せずんば、曲撓して誅せられん」と。鄒忌以て然りと爲し、乃ち王に說いて、田忌をして魏を伐たしむ。田忌三戰三勝す。鄒忌以て公孫閈に告ぐ。公孫閈乃ち人をして十金を操つて、往いて市にトせしめて曰く、『我は田忌の人也。吾れ三戰して三勝し、聲天下を威す。大事を爲さんと欲す、亦吉なりや否や』と。卜する者出づ。因て人をして捕へしむ。人の爲めにトする者亦其辭を王の前に驗す。田忌遂に走る。

㊀ 齊人 ㊁ 軍直前せずして敗れたる罪により。一說に、其理を曲撓して其罪に當て之を誅する義にて下文のト者の事卽ち之れ也と ㊂ 家來 ㊃ 主人田忌の申附けたる言葉の形にして言ふ也 ㊄ 名聲高きて天下を畏れしむ ㊅ 此機を以て一大事——謀叛して自ら國王となちんとするをいふ——を企てんとす、これも亦戰爭に於ける大事也 ㊆ 其卜を賴みに行きたる使者 ㊇ 卜者也 ㊈ 其使者の白狀に相違なき旨證明す ㊉ 固より思ひも寄らざる事なれど如何にも尤もらしく仕組みありて辯解の辭なかり爲め出奔したる也

鄒忌修八尺有餘。而身體昳麗。朝服衣冠。窺レ鏡。謂二其妻一曰。我孰與二城北徐公美一。其妻曰。君美甚。徐公何能

鄒忌、修八尺有餘にして、身體昳麗なり。朝服衣冠して鏡を窺ひ、其妻に謂つて曰く、「我れ城北の徐公の美に孰れぞや。」其妻曰く、「君の美甚だし、徐公何ぞ能く君に及ばんや」と。城北の徐公は齊國の美麗なる者也。忌自ら信ぜずして、復た其妾に問うて曰く、「吾れ徐公の美に孰れぞや。」妾曰く、「徐公何ぞ能く君に及ばんや」と。且日客外より來り、與に坐談す。之に問うて曰く、「吾と徐公と孰れか美

及レ君也。城北徐公。齊國之美麗者也。忌不二自信一。而復問二其妾一曰。吾孰二與徐公美一。妾曰。徐公何能及レ君也。旦日客從レ外來與坐談。問レ之曰。吾與二徐公一孰美。客曰。徐公不レ若二君之美一也。明日徐公來。孰視レ之。自以爲レ不レ如。窺レ鏡而自視。又弗レ如遠甚。暮寢而思レ之曰。吾妻之美レ

なる」。客曰く、「徐公は君の美なるに若かず」と。明日徐公來る。孰〻之を視て、自ら以爲らく如かずと。鏡を窺うて自ら視るに、又如かざること遠く甚だし。暮に寢ねて之を思うて曰く、「吾が妻の我を美とするは、我に私すれば也。妾の我を美とするは、我を畏るれば也。客の我を美とするは、我に求むる有らんと欲すれば也」と。是に於いて、入朝して威王に見えて曰く、「臣誠に徐公の美に如かざるを知れり。臣の妻は臣に私し、臣の妾は臣を畏れ、臣の客は臣に求むる有らんと欲し、皆以て徐公より美なりとす。今齊の地、方六千里、百二十城、宮婦左右王に私せざる莫く、朝廷の臣、王を畏れざる莫く、四境の内、王に求むる有らざるは莫し。此に由て之を觀れば、王の蔽はるゝこと甚だし。」王曰く、「善し」と。乃ち令を下す、『羣臣吏民の、能く寡人の過を面刺する者は上賞を受けん、上書して寡人を諫むる者は中賞を受けん、能く市朝に謗譏して寡人の耳に聞ゆる者は下賞を受けん』と。令初めて下るや、羣臣進諫して、門庭市の若し。數月の後は、時時にして

宣王

我者。私レ我也。妾之美レ我者。畏レ我也。客之美レ我者。欲レ有レ求二於我一也。於レ是入朝見二威王一曰。臣誠知レ不レ如二徐公美一。臣之妻私レ臣。臣之妾畏レ臣。臣之客欲レ有レ求二於臣一。皆以美二於徐公一。今齊地方千里。百二十城。宮婦左右。莫レ不レ私レ王。朝廷之臣。莫レ不レ畏レ王。四境之內。莫レ不レ有レ求二於王一。由レ此觀レ之。王之蔽甚矣。王曰。善。乃下レ令。羣臣吏民。能面二刺寡人之過一者。受二上賞一。上書諫二寡人一者。受二中賞一。能謗二譏於市朝一。聞二寡人之耳一者。受二下賞一。令初下。羣臣進諫。門庭若レ市。數月之後。時時面聞進。朞年之後。雖レ欲レ言。無下可レ進者上。燕趙韓魏聞レ之。皆朝二於齊一。此所レ謂戰二勝於朝廷一。

聞に進み、朞年の後は、言はんと欲すと雖も、進む可きもの無し。燕・趙・韓・魏之を聞いて、皆齊に朝す。之れ所謂朝廷にて戰ひ勝てるなり。

一 長也、身長をいふ　二 身體一本に形類に作る、は貌の古字。眺麗は美好也、みやびにしてうるはし　三 朝廷に出仕する服　四 齊國で名うての　五 明日　六 懲也　七 妻妾等の我を美とする所以を　八 親しみたよれるを以て也　九 後宮の侍女　一〇 領內の者皆　一一 下人の爲めに其明を壅蔽せらるゝこと　一二 まのあたりそしる、面と向つて人目に立つ程にそしる　一三 町中にてそしる　一四 その令の下りたる當初には　一五 王宮の前は市場のごとし　一六 一年　一七 王に過失無きに至れる也　一八 朝貢す　一九 朝廷の內に坐し戰はずして他を服せしむるをいふ

南梁の難に、韓氏救を齊に請ふ。田侯大臣を召して謀つて曰く、「早く之を救ふは、晩く之を救ふの便なるに孰れぞや」と。張丐對へて曰く、「晩く之を救はゞ、韓且に折けて魏に入らん。早く之を救はんに如かず。」田臣思曰く、「不可なり。夫れ韓・魏の兵未だ弊えずして我れ之を救はゞ、我れ韓に代つて魏の兵を受け、顧反つて命を韓に聽かん。且つ夫れ魏は韓を破るの志あり。韓且に亡びんとするを見ば、必ず東、齊に愬へん。我因て陰かに韓の親を結んで、晩く魏の弊を承けば、則ち國重かる可く、利得可く、名尊かる可し。」田侯曰く、「善し」と。乃ち陰かに韓の使者に告げて之を遣る。韓自ら專ら齊國を有すと以ひ、五たび戰つて五たび勝たず。東、齊に愬ふ。齊因て兵を起し魏を擊ち、大いに之を馬陵に破る。魏破れ韓弱まり、魏・韓の君、田嬰に因て、北面して田侯に朝せり。

一 南梁は韓の邑。魏が韓を伐ちたる戰役也　二 齊王　三 分れて　四 史記は田忌に作る。中井履軒は、忌の字誤りて臣思の二字となりしものといへり　五 顧も亦反也。反つて韓の指圖を受くる事となちん　六 從つて戰

之親。而晩承二魏之弊。則國可レ重。利可レ得。名可レ尊矣。田侯曰。善。乃陰告二韓使者一而遣レ之。韓自以三專有二齊國。五戰五不レ勝。東愬二於齊。齊因起レ兵擊レ魏。大破二之馬陵。魏破韓弱。韓魏之君因二田嬰。北面而朝二田侯。

田忌爲二齊將。係二梁太子申。禽二龐涓。孫子謂二田忌一曰。將軍可三以爲二大事一乎。田忌曰。奈何。孫子曰。將軍無レ弊レ兵而入レ齊。使三彼罷弊於老弱守二於主。主者。循軼之途也。鐫擊摩レ車而

六 魏の疲弊せるに乘じて之を伐たば　七 援兵を出すべき筈を也　八 齊の後援を當てにして油斷したる也　九 齊の地　一〇 臣下の禮節を執る也

田忌齊の將となり、梁の太子申を係へ、龐涓を禽にす。孫子田忌に謂つて曰く、「將軍以て大事を爲す可きか」と。田忌曰く、「奈何。」孫子曰く、「將軍、兵を解く無くして齊に入り、彼の罷弊せる老弱をして主を守らしめよ。主は循軼の途也、鐫擊ち車を摩つて相過ぐ。彼の罷弊せる老弱をして主を守らしむるも、必ず一にして十に當り、十にして百に當り、百にして千に當らん。然して後、太山を背にし、濟を左にし、天唐を右にして、軍重高宛に踵り、輕車銳騎雍門を衝く。是の若くせば、則ち齊君正す可くして、成侯走らす可し。然らずんば則ち將軍齊に入るを得じ」と。田忌聽かず。果して齊に入れられず。

相過。使彼罷弊老弱守於主。必一面當百。十面當千。然後背太山。左齊右天唐。軍重踵高宛。輕車銳騎衝雍門。若是。則齊君可正。而成侯可走。不然。則將軍不得入於齊矣。田忌不聽。果不入齊。

田忌亡齊而之楚。鄒忌代之相齊。恐田忌復於齊。杜赫曰。臣請爲君留之楚。謂楚王曰。鄒忌所以不善楚者。田忌齊を亡げて楚に之く。鄒忌之に代つて齊に相たり。田忌の、楚の權を以て齊に復らんを恐る。杜赫曰く、「臣請ふ君の爲に之を楚に留めん」と。楚王に謂つて曰く、「鄒忌の楚に善からざる所以のものは、田忌の、楚の權を以て齊に復らんを恐るれば也。王、田忌を江南に封じて、以て田忌の齊に返らざるを示すに如かず。鄒忌齊を以て厚く楚に事へん。田忌は亡人也。而るに封を得ば、必ず王を德とせん。若し齊に復らば、必ず齊を以て楚に事へん。此れ忌を用ふるの道也」と。楚果して之を江南に封ず。

(一) 魏 (二) 孫武の孫の孫臏。齊人にて田忌の軍師也 (三) 兵を以て君側の姦を清むるをいふ (四) 帥ゐる所の卒を指していふ。原文老弱の上の「於」の字は衍 (五) 齊の地名。險阻の所なりしならん (六) 循はしたがふ。軼は轍に同じ。車のわだち卽ち車跡也。險隘にして車の轍を方(ナラ)ぶるを得ず、前車の後に後車の循ひ行くをいふ (七) 車の轄(クサビ)。行き會ふ車のくさびが擊ち合ひ車と車と磨れ合ふ、路の極めて狹きをいふ (八) 一人 (九) 水の名 (十) 地名、高唐に同じ (十一) 輜重。高宛は地名。雍は至也 (十二) 輕車は軍用の便車。銳騎は精銳の騎士。雍門は齊の都城の西門の名

(一) 前に「鄒忌爲レ相、田忌爲レ將」と云へり、「代レ之相レ齊」の四字は衍なちん (二) 楚にて得たる勢力 (三) 田忌を (四) さすれば鄒忌は (五) 逃亡して來りたる者 (六) 後日田忌が齊に歸らば田忌も亦 (七) 鄒忌と田忌

恐田忌之以楚權復於齊也。王不如封田忌於江南。以示田忌之不返齊也。鄒忌以齊厚事楚。田忌亡人也。而得封。必德王。若復於齊。必以齊事楚。此用忌之道也。楚果封之於江南。

鄒忌事宣王。仕人衆。宣王不說。晏首賢而仕人寡。王說之。鄒忌謂宣王曰。忌聞以爲有一子之孝。不如有五子之孝。今首之所進仕

鄒忌、宣王に事へて、人を仕へしむること衆し。宣王說ばず。晏首賢くして人を仕へしむること寡し、王之を說ぶ。鄒忌宣王に謂つて曰く、「忌聞く、一子の孝あるは五子の孝あるに如かずと。今首の進め仕へしむる所の者、亦幾何人ぞ」と。宣王因て以へらく、晏首之を壅塞すと。

(一) 仕官せしむる (二) 賢の本字。身賢くして顯要の地位にありながら (三) 原文の「以爲」は衍也、譯文に之を削る。但「おもへらく」と訓じ、或は「以て一子の孝ありと爲す」と訓ずるも亦通ずべきか (四) 晏首 (五) 仕へんとする者を止めふさぎて進めず

者。亦幾何人矣。宣王因以晏首壅塞之。

楚威王戰勝於徐州。欲逐嬰子於齊。嬰子恐。張丑謂楚王曰。王戰勝於徐州也。盼子不用也。盼子有功於國。百姓爲之用。嬰子不善而用申縛。申縛者。大臣與百姓弗爲用。故王勝之也。今嬰子逐。盼子必用。復整其士卒。以與王遇。必不便於王也。楚王因弗逐。

權之難。齊燕戰。秦使魏冉

楚の威王戰つて徐州に勝ち、嬰子を齊より逐はんと欲す。嬰子恐る。張丑楚王に謂つて曰く、「王戰つて徐州に勝てるは、盼子用ひられざれば也。盼子は國に功あり、百姓之が用を爲さんとす。嬰子善からずして、申縛を用ふ。申縛は大臣と百姓と用を爲さず。故に王之に勝てるなり。今嬰子逐はれば、盼子必ず用ひられん。復た其士卒を整へ、以て王と遇はゞ、必ず王に便ならざらん」と。楚王因て逐はず。

(一) 或は舒州に作る。是の時齊に屬す　(二) 田嬰也　(三) 齊人　(四) 齊に用ひられず　(五) 齊國に　(六) 盼子と仲惡く　(七) 坊本には大臣の下に「弗」の字ありて「大臣與（クミ）せず百姓用を爲さず」と訓ず　(八) 遇戰せば

(一) 權の難に、齊・燕戰ふ。秦、魏冉をして趙に之き、兵を出して燕を助け齊を擊たしむ。薛公魏處をして趙に之き、李向に謂はしめて曰く、「君燕を助けて齊を擊たば、齊必ず急ならん。急ならば必ず地を以て燕に和し、而して身ら趙と戰はん。然らば則ち是れ君自ら燕の爲めに兵を束ね、燕の爲めに地を取るなり。故に君の爲めに計るに、兵を按へて出す勿からんに如かず。齊必ず緩からん。緩くば必ず復た燕と戰はん。戰つて勝たば、兵罷弊せん。趙は唐・曲逆を取る可し。戰つて勝たずば、命趙に懸らん。然らば則ち、吾中立して、窮齊と疲燕とを割く也。兩國の權、君に懸らん」と。

(一) 楚の地なる權の戰の時に　(二) 齊の相田嬰　(三) 趙の事を用ふる者　(四) 田嬰自ら謂ふ也　(五) 燕が齊の地を取りて和すれば、兵を斂めて戰はず、是れ卽ち趙自ら燕の爲めに兵ををさめ齊の地を取る譯にて何等自分の爲めになるにあらず　(六) 趙の援兵出でずとならばと補ひ見よ　(七) 齊が也　(八) 當時燕に屬したる地名。燕は敗れ、齊は疲る、趙は其虛に乘じて燕の地を取るべしと也　(九) 齊は必ず趙に從つて其命を聽き趙に制せられん　(一〇) 「君」の訛か。一說策士が身を趙の立場に擬していふ也　(一一) 君は齊燕兩國の權を握ちん

蘇秦爲趙合從。說齊宣王曰。齊南有太山。東有琅邪。西有清河。北有渤海。此所謂四塞之國也。齊地方二千里。帶甲數十萬。粟如丘山。齊車之良。五家之兵。疾如錐矢。戰如雷電。解如風雨。即有軍役。未嘗倍泰山。絕清河。涉渤海也。臨淄之中七萬戶。臣竊度之。下戶三男子。三七二十一萬。不待發於遠縣。而臨淄之卒。固已二十一萬矣。臨淄甚富而實。其民無不吹竽鼓瑟。擊筑彈琴。鬬雞走犬。六博蹵鞠者。臨淄之途。車轂擊。人肩摩。連衽成帷。舉袂成幕。揮汗成雨。家敦而富。志高而揚。夫以三天王之賢。與齊之強。天下不能當。今

蘇秦、趙の爲めに合從せんとし、齊の宣王に說いて曰く、「齊は南に太山あり、東に琅邪(一)あり、西に清河あり、北に渤海(二)あり、此れ所謂四塞(三)の國なり。齊の地、方二千里、帶甲(四)數十萬、粟(五)は丘山の如し。齊車(六)の良、五家(七)の兵、疾きこと錐矢(八)の如く、戰ふこと雷電(九)の如く、解くること風雨(一〇)の如し。卽し軍役あるも、未だ嘗て泰山を倍き、清河を絕り、渤海を涉らず。臨淄(一一)の中に七萬戶あり。臣竊かに之を度るに、下戶(一二)も三男子、三七二十一萬。遠縣より發(一三)するを待たずして、臨淄の卒固より已に二十一萬(一四)あり。臨淄は甚だ富みて實てり。其民竽を吹き瑟を鼓し、筑を擊ち琴を彈き、雞を鬬はし犬を走らせ、六博蹵鞠(一六)せざる者なし。臨淄の途、車轂擊ち、人肩摩し、衽を連ねて帷を成し、袂を擧げて幕を成し、汗を揮つて雨を成す。家ごとに敦くして富み、志高うして揚る。夫れ大王の賢と、齊の強とを以て且つ夫れ韓・魏の秦を畏るゝ所以は、秦と界を接すれば也。兵出でゝ相當らば、十

日に至らずして、戰勝存亡の機決せん。韓・魏戰つて秦に勝たば、則ち兵半ば折けて四境守られず。戰つて勝たずば、以て亡其後に隨はん。是の故に韓・魏の秦と戰ふを重つて、輕しく之が臣たる所以也。今秦の齊を攻むるは則ち然らず、韓・魏の地を倍き、衛の陽晉の道を過ぎ、亢父の險を徑、車は軌を方ぶるを得ず、馬は竝び行くを得ず、百人險を守れば、千人過ぐる能はず。秦深く入らんと欲すと雖も、則ち狼顧して韓・魏の其後を議せんを恐る。是の故に恫疑虛猲し、高躍して敢て進まず。則ち秦の齊を害する能はざる、亦已に明かなり。夫れ深く秦の我を奈何ともせざるを料らずして、西面して秦に事へんと欲す。是れ群臣の過計なり。今秦に臣とし事ふるの名なくして、國を强うするの實あり。臣固に大王の少しく留計せられんことを願ふ。」齊王曰く、「寡人不敏なれども、今主君、趙王の教を以て之に詔ぐ。敬んで社稷を奉じて以て從はん。」

(一) 趙が主となりて六國を合はせんとし　(二) 邑の名　(三) 四面皆險阻の固めある國　(四) 兵士　(五) 食糧積みて

乃西面事秦。竊爲大王羞之。且夫韓魏之所以畏秦者。以與秦接界也。兵出而相當。不至三十日。而戰勝存亡之機決矣。韓魏戰而勝秦。則兵半折。四境不守。戰而不勝。以亡隨其後。是故韓魏之所以重與秦戰。而輕爲中之臣也。今秦攻齊。則不然。倍韓魏之地。過衞陽晉之道。徑九父之險。車不得力軌。馬不得奔行。百人守險。千人不能過也。秦雖欲深入。則狼顧恐韓魏之議其後也。是故恫疑虛猲。高躍而不敢進。則秦不能害齊。亦已明矣。夫不深料秦之不奈我何也。而欲西面事秦。是群臣之過計也。今臣無事秦之名。而有強國之實。臣固願大王之少留計。齊王曰。寡人不敏。今主君以趙王之教詔之。敬奉社稷以從。

山の如し　㊀ 車は馬車也。史記には「三軍之良」に作る　㊁ 管仲の立てたる兵制の遺風也、五家を軌とし、十軌を里とし、四里を連とし、十連を鄉とし、三鄉に一帥を置く　㊂ 小矢、矢の輕銳にて疾き者。兵を進むるの迅疾を謂ふ　㊃ 閉合出沒の迅疾を謂ふ　㊄ 解散又は退兵の迅疾なるを謂ふ　㊅ 後ろにし　㊆ まつすぐに渡る　㊇ 齊の都　㊈ 下等の民戶すち。史記には「戶ごとに三男子に下ちず」に作る　㊉ 徼覆する　㊊ 笙に似て三十六簧。以下民の殷富なる形容　㊋ 琴に似て二十五絃　㊌ 瑟に似て五絃　㊍ すごろくの類、六箸を投じ六基を行る　㊎ 蹴鞠に同じ、けまり　㊏ 轂は車のこしき。往來の甚だ繁き形容　㊐ 旁に在るを帷（トバリ）とし、上に在るを幕とす　㊑ 氣位高くして人に下ちず　㊒ 勝ちても強敵秦と懷ひたる事故兵數の半を失ひ、四境を守る能はず　㊓ 後ろにし　㊔ 衞の地。當時魏に屬す　㊕ 縣の名。魏に屬す　㊖ 車轅。兩車並び行かざるをいふ　㊗ 齊に入らんと　㊘ 前述の如くなれば後を顧み用心して、秦の遠征に出でたる後より二國の其虛に乘じて本國に衝き入らん事を恐る　㊙ 痛く疑はしめ虛聲を以ておどす。陽の字坊本「喝」に作る　㊚ 虛勢を張つて　㊛ 過ちたる計策　㊜ 史記に「無臣事秦之名」とあるに從ひ改め譯す　㊝ 意を留めて之を計る　㊞ 先生。蘇秦を指す　㊟ 坊本教詔を「詔告」に作る　㊠ 國家を以て其說に從はん

淳于髡一日而見七人於宣王。王曰。子來。寡人聞之。千里而一士。是比肩而立。百世而一聖。若隨踵而至也。今子一朝而見七士。則士不亦衆乎。淳于髡曰。不然。夫鳥同翼者而聚居。獸同足者而俱行。今求柴胡桔梗於沮澤。

淳于髡一日にして七人を宣王に見えしむ。王曰く、「子來れ、寡人之を聞く、千里にして一士あるも、是れ肩を比べて立ち、百世にして一聖あるも、踵に隨つて至るが若しと。今子は一朝にして七士を見えしむ。則ち士亦衆からずや。」淳于髡曰く、「然らず。夫れ鳥は翼を同じうする者にして聚まり居り、獸は足を同じうする者にして俱に行く。今柴胡・桔梗を沮澤に求むれば、則ち累世にして一も得じ。譬黍・粱粟の陰に之くに及べば、則ち車を郤けて載せん耳。夫れ物各疇あり。今髡は賢者の疇也。王、士を髡に求むるは、譬へば水を河に挹み、火を燧に取るが若し。髡將に復た之を見えしめんとす。豈に特に七士のみならんや。」

㊀ 齊の賢士　㊁ 肩を並べて立つと同じ比例也　㊂ 足を接して至るといふべし、士はめつたに無く、聖人は更に得難しと也　㊃ 凡て同類の相聚まるをいふ　㊄ 共に山生の藥草　㊅ 濕地　㊆ 共に山の名、陰の山の北　㊇ 車に載せきれぬ程あちん。郤車に載て諸說紛々たれども凡て省略す　㊈ 酌也　㊉ 火打石

則累世不得一焉。及之桀紂梁父之陰。則鄧車而載耳。夫物各有嚮。今髡賢者之嚮也。王求士於髡。譬若挹水於河。而取火於燧上也。髡將復見之。豈特七士也。

齊欲伐魏。淳于髡謂齊王曰。韓子盧者。天下之疾犬也。東郭逡者。海內之狡兎也。韓子盧逐東郭逡。環山者三。騰山者五。兎極於前。犬廢於後。犬兎俱罷。各死其處。田父見之。無勞勌之苦。而擅其功。今齊魏久相持。以頓其兵。弊其衆。臣恐秦楚之承其後也。田父之利。在無事。今齊魏之兵。頓於外。而主不收。此臣之所謂也。王曰。善。乃不伐魏。客謂齊王曰。淳于髡言齊欲伐魏。使人謂淳于髡曰。齊欲伐魏。能解魏患。唯先生也。弊邑有寶璧二雙。文馬二駟。請致之先生。淳于髡曰。諾。入說齊王曰。楚齊之仇敵也。魏齊之與國也。夫伐與國。使仇敵制其餘弊。名醜而實危。爲王弗取也。齊王曰。善。乃不伐魏。客謂齊王曰。淳于髡言齊欲伐魏。魏久相持。以頓其兵。弊其衆。臣恐秦楚承其後。有田父之功。齊王懼。謝將休士也。

齊、魏を伐たんと欲す。淳于髡齊王に謂つて曰く、「韓子盧は天下の疾犬也、東郭逡は海內の狡兎也。韓子盧、東郭逡を逐ひ、山を環ること三たび、山に騰ること五たび、兎前に極まり、犬後に廢れ、犬兎俱に罷れて各其處に死す。田父之を見、勞勌の苦なくして其功を擅にせり。今齊・魏久しく相持して、以て其兵を頓らし、其衆を弊さんとす。臣、强秦・大楚の其後を承けて、田父の功あらんを恐る」と。齊王懼れて、將を謝し士を休せり。

(一) 狡兎の名。狡兎はすばしこき兎　(二) 兎も進むべき力盡き　(三) 伏也、倒也。逐ひ立つる力も無くなりてたふれ伏す　(四) 百姓男　(五) 骨折　(六) うまく一犬一兎を手に入れたり　(七) 久しく相敵ふ　(八) 疲弊の後に乘じて　(九) 勞なくして齊魏が二國を取るをいふ　(十) 用ひず

齊、魏を伐たんと欲す。魏、人をして淳于髡に謂はしめて曰く、「齊、魏を伐たんと欲す。能く魏の患を解かんものは、唯り先生あるのみ。弊邑寶璧二雙文馬二駟あり。請ふ之を先生に致さん。」淳于髡曰く、「諾」と。入つて齊王に說いて曰く、「楚は齊の仇敵也。魏は齊の與國也。夫れ與國を伐つて、仇敵をして其の餘弊を制せしむ。名醜にして實危ふし。王の爲に取らざる也。」齊王曰く、「善し」と。乃ち魏を伐たず。客、齊王に謂つて曰く、「淳于髡の魏を伐たざれと言ふは、魏の璧馬を受けたれば也」と。王以て淳于髡に謂つて曰く、「聞く、先生魏の璧馬を受くと。諸ありや。」曰く、「之あり。」「然らば則ち先生の寡人の爲に之を計る如何。」淳于髡曰く、「魏を伐つの事便ならずんば、魏、髡を刺すと雖も、王に於て何ぞ益せん。若し誠に便ならずんば、魏、髡を封ずと雖も、王に於て何ぞ損ぜん。且つ夫れ、王は與國を伐つの誹なく、魏は亡ぼさるゝの危なく、百姓は兵を被むるの患なくして、髡は璧馬の寶あり。王に於て何ぞ傷けんや」と。

不レ伐レ魏者。受二魏之璧馬一也。王以謂二淳于髡一曰。聞先生受二魏之璧馬一。有レ諸。曰。有レ之。然則先生之爲二寡人一計レ之何如。淳于髡曰。伐レ魏之事不レ便。魏雖レ封レ髡。於レ王何損。且夫王無下伐二與國一之誹上。魏無二見レ亡之危一。百姓無二被レ兵之患一。髡有二璧馬之寶一。於レ王何傷乎。

齊宣王見二顏斶一曰。斶前。斶亦曰。王前。宣王不レ說。左右曰。王人君也。斶人臣也。王曰二斶前一。斶亦曰二王前一。可乎。斶對曰。夫斶

(一) 齊より伐たるゝ患　(二) 毛色に文采の有る馬八頭。駟は四馬　(三) 同盟國　(四) 齊が魏を伐つて勝れば、楚は其弊に乘じて齊を伐たんとすべきをいふ　(五) 我が爲めに計る事忠實とは謂ひ難からん如何　(六) 呉注には「不レ便」の「不」を刪るべしといへり「便なちば」也、從ふべきか。便は利と解すべし。こゝの意味は、要するに魏を伐つの利か不利かを研究すべきにして己が魏より如何に遇せらるゝも、そんな事は別段王に報酬する所なしと也　(七) 伐たざるの利を列擧す　(八) 何の損害あらんや

齊の宣王、顏斶を見て曰く、「前め。」斶亦曰く、「王前め」と。宣王說ばず。左右(一)曰く、「王は人君也、斶は人臣也。王『斶前め』と曰ひ、斶亦『王前め』と曰ふ。可ならんや。」斶對へて曰く、「夫れ斶前まば勢を慕ふとなり、王前まば士に趨く(二)とならん。斶をして勢を慕ふものたらしめんよりは、王をして士に趨くものたらしむるに如かじ」と。王忿然(四)として色を作して曰く、「王者貴きか、士貴きか。」對へて曰く、「士貴きのみ、王者貴からず。」王曰く、「說ありや。」斶曰く、「有り。

前爲レ墓。勢。王前爲レ趨レ士。與レ使二斶爲一レ墓。勢。不レ如レ使二王爲一レ趨レ士。王忿然作レ色曰。王者貴乎。士貴乎。對曰。士貴耳。王者不レ貴。王曰。有レ說乎。斶曰。有。昔者秦攻レ齊。令曰。有下敢去二柳下季壟一五十步而樵採者上。死不レ赦。令曰。有下能得二齊王頭一者上。封二萬戶侯一。賜二金千鎰一。由レ是觀レ之。生王之昔者秦、齊を攻む。令して曰く、『敢て柳下季の壟(六)を去る五十步にして樵採する者あらば、死して赦さじ』と。令して曰く、『能く齊王の頭を得る者あらば、萬戶侯に封じ、金千鎰(八)を賜はん』と。是に由て之を觀れば、生王の頭は、曾ち死士の壟に若かざる也」と。宣王默然(九)として說ばず。左右皆曰ふ、「斶來れ、斶來れ。大王千乘の地に據て、千石の鍾萬石の簴を建つ。天下の士、仁義皆來りて役處せられ、辨智(一〇)竝び進んで、來り語らざる莫く、東西南北敢て來り服せざる莫く、萬物備具せざる無く、百姓親附せざる無し。今夫れ士の高き者も、乃ち匹夫徒步(一四)と稱して、農畝に處り、下きは則ち鄙野、閭里(一五)に監門たり。士の賤しきや、亦甚だし」と。

(九) 齊の隱者　(一〇) 王の左右の者　(一一) 下る。林西仲曰く「士勢ヲ慕ヘバ則チ士タル所以ヲ失ヒ、王士ニ趨ケバ則チ王者タル所以ヲ爲ス便チ彼此兩得ヲ覺ユ」　(一二) むつとして怒を顏に出す　(一三) 魯の賢人展禽字は季、采を魯の柳下の地に食む故に柳下季といふ　(一四) 採也。蓋し當時柳下は齊に屬したりしならん　(一五) 薪を取る　(一六) 鎰は二十四兩　(一七) 一石は百二十斤、鍾は鐘の假借字にて釣鐘をいふ。簴は鐘を吊す臺　(一八) 仁者義者。「天下仁義之士」とあるべきなちん　(一九) 婦士智者　(二〇) 天下四方の人　(二一) 行高き者　(二二) 徒步も亦匹夫と同じく卑賤の稱

頭。曾不若二死士之虜一也。宜王默然不レ說。左右皆曰。觸來觸來。大王據二千乘之地。而建二千石鍾萬石簴。天下之士。仁義皆來役處。辨智竝進。莫レ不二來服一。萬物無レ不二備具一。而百姓無レ不二親附一。今夫士之高者。乃稱二匹夫徒步一。而處二農畝一。下則鄙野監門閭里。士之賤也。亦甚矣。

也　史記　更に下等の者は、邊鄙郊外に居り、村里の門番の卒となりて賤命をつなぐ。閭里は閭門里門也

觸對曰。不レ然。觸聞。古大禹之時。諸侯萬國。何則德厚之道得。貴レ士之力也。故舜起二農畝一。出二於野鄙一。而爲二天子一。及二湯之時一。諸侯三千。當二今之世一。南面稱レ寡者。乃二十四。由レ此觀レ之。非二得失之策一與。稍稍誅滅。滅亡無レ族之時。欲レ爲二監門閭里一。安可二得而有一乎哉。是故易傳不レ云乎。居二上位一未レ得二其實一。以喜二其爲レ名者一。必以二驕奢一爲レ行。據慢驕奢。則凶必從レ之。是故無二其實一而喜二其名一者。削。無レ德而望二其福一者。約。無レ功而受二其祿一者。辱。禍必操。故曰。矜レ功不レ

觸對へて曰く、「然らず。觸聞く、古へ大禹の時、諸侯萬國ありきと。何となれば則ち德厚の道得、士を貴べる力也。故に舜は農畝より起り、野鄙より出でゝ、天子となる。湯の時に及んで、諸侯三千。今の世に當つては、南面して寡と稱する者、乃ち二十四なり。此に由て之を觀れば、是れ得失の策に非ずや。稍稍に誅滅せられ、滅亡して族なきの時、監門閭里たらんと欲すとも、安くんぞ得て有す可けんや。是の故に易傳に云はずや、『上位に居て未だ其實を得ず、以て其の名を爲すを喜む者は、必ず驕奢を以て行と爲す。據慢驕奢なれば、則ち凶必らず之に從ふ』と。是の故に其實なくして其名を喜む者は削られ、德なくして其福を望む者は約

し、功なくして其の祿を受くる者は辱禍必ず握し。故に曰く、『功に矜れば立たず、虛願は至らず』と。此れ皆其の名華を幸樂して、其の實德なき者也。是を以て堯に九佐あり、舜に七友あり、禹に五丞あり、湯に三輔あり。古より今に及ぶまで、能く虛しうして名を天下に成す者ある無し。是を以て君王亟問ふを羞づる無く、下に學ぶを愧ぢず。是の故に其道德を成して、功名を後世に揚ぐる者は、堯・舜・禹・湯・周の文王是れ也。故に曰く、『無形は形の君也、無端は事の本也』と。夫れ上其原を見、下其流に通ず。至聖明學何の不吉か之あらんや。老子曰く、『貴と雖も必ず賤を以て本とし、高と雖も必ず下を以て基とす。是を以て侯王孤寡不穀と稱す。是れ賤の本か』と。夫れ孤寡は人の困賤の下位なり。而るに侯王以て自ら謂ふ。豈に人に下つて士を尊貴するにあらずや。夫れ堯は舜に傳へ、舜は禹に傳へ、周の成王は周公旦に任じて、世世稱して明主と曰ふ。是を以て士の貴きを明かにす」と。

立。虛願不レ至。此皆幸二樂其名華一。而無二其實德一者也。是以堯有二九佐一。舜有二七友一。禹有二五丞一。湯有二三輔一。自レ古及レ今。而能虛成二名於天下一者無レ有。是以君王無レ羞二亟問一。不レ愧二下學一。是故成二其道德一。而揚二功名於後世一者。堯舜禹湯周文王是也。故曰。無形者。形之君也。無端者。事之本也。夫上見二其原一。下通二其流一。聖明學。何不吉之有哉。老子曰。雖レ貴必以レ賤爲レ本。雖レ高必以レ下爲レ基。是以侯王稱二孤寡不穀一。是其賤之本與。夫孤寡者。人之困賤下位也。而侯王以自謂。豈非三下レ人而尊二貴士一與。夫堯傳レ舜。舜傳レ禹。周成王任二周公旦一。而世世稱曰二明主一。是以明二乎士之貴一也。

宣王曰。嗟乎。君子爲可レ悔哉。寡人自取レ

(一) 惠澤く天下に及びたる故にて其本は士を貴びたるが爲め也。「士の力を貴べば也」と訓ずるも可なるべきか (二) 諸侯をいふ (三) 策は歌也。國の存亡は士を得ると士を失ふとの相違に外ならずと也 (四) 諸侯も迫々に誅滅せられ。一說に、漸々に士を誅滅し (五) 士を貴ばざるをいふ (六) 倨に通ず、傲也 (七) 地削られて弱くなり (八) 窮し (九) 運に通ず (一〇) 實無く德無く功無くして顧望すれば顧ふ所の者至ちず。士を失ふの害をいふ也 (一一) れがひて (一二) 九人の輔佐官 (一三) 五人の輔相 (一四) 三人の輔佐官 (一五) 其實無くして (一六) 君は本といふ意。無端は無始也、事の未だ始有らざるを謂ふ。有形は無形に出で、有事は無事に生ずる意にて、畢竟實德は功名の本たるを謂ふなるべし (一七) 原は無形無端に應じて亦實德を指し、流は形と事とに應じて功名を指す (一八) 卽ち堯舜禹湯文王是也。至聖明學の者は原を見、流に通ず、いかで前約辱縕の如き不吉の事あらん (一九) 老子下三十九章を見よ (二〇) 困窮賤

宣王曰く、「嗟乎君子爲くんぞ悔る可けんや。寡人自ら病を取るのみ。乃ち今君子の言を聞き、乃ち今細人の行を聞く。顧はくは請ふ弟子と爲らん。且つ顏先生、

病耳。及今聞二君子之言一。乃今聞二細人之行一。願請爲二弟子一。且顏先生與二寡人一遊。食必太牢。出必乘車。妻子衣服麗都。顏斶辭曰。夫玉生二於山一。制取則破焉。非レ弗二寶貴一矣。然大璞不レ完。士生二乎鄙野一。推選則祿焉。非レ不二尊遂一也。然而形神不レ全。斶願得レ歸。晚食以當レ肉。安步以レ

寡人と遊ばゞ、食は必らず太牢、出づるには必ず乘車、妻子は衣服麗都にせん」と。顏斶辭し去つて曰く、「夫れ玉は山に生ず。制取すれば則ち破る。寶貴ならざるに非ず、然れども大璞完からず。士は鄙野に生ず。推選せらるれば則ち祿せらる。尊遂ならざるに非ず、然れども形神全からず。斶願はくは歸るを得て、晚食以て肉に當て、安步以て車に當て、罪無き以て貴に當て、清淨貞正以て自ら虞しまん。言を制する者は王也、志を盡して直言する者は斶也。要道を言ふと已に備れり。願はくは歸を賜ふを得て、安行して臣の邑屋に反らん」と。則ち再拜して辭し去る。斶足るを知る。歸りて璞に反り、則ち終身辱しめられざる也。

(一) 君子を賤しき者と思ひたるは我が心得違ひにて我自ら辱を取る譯也 (二) 原文「及」は「乃」の誤 (三) 小人 (四) 顏斶をいふ對稱 (五) 牛羊豕の具はりたる馳走 (六) 都は美也 (七) 荒玉を割りて名玉とするには割り破る (八) 其製し上げたる玉は也 (九) 自然のあらたまは其自然のまゝに完き能はず (一〇) 尊達卽ち身分の高くなるをいふ (一一) 腹を（ちして食事し以て其美を肉を貪ふに比す (一二) 臣の申上げたる言を取捨制裁せらるゝは王也 (一三) 坊本此上に「君子曰」の三字あり (一四) 歸るは邑に歸るをいひ、璞に反るは其眞を失はざるをいふ

當レ車。無レ罪以當レ貴。清淨貞正以自處。制レ冒者。王也。盡レ忠直言者。臣也。言二要道一已備矣。願得レ賜レ歸。安行而反二臣之邑屋一。則再拜而辭去也。臣知レ足矣。歸反レ璞。則終身不レ辱也。

先生王斗造レ門。而欲レ見二齊宣王一。宣王使二謁者延入一。王斗曰。斗趨見レ王。爲レ好レ勢。王趨見レ斗。爲レ好レ士。於レ王何如。使者復還報。王曰。先生徐レ之。寡人請從。宣王因趨而迎二之於門一。與入曰。寡人奉二先君之宗廟一。守二社稷一。聞先生直言正諫。不レ諱。王斗對曰。王聞レ之過。斗生二於亂世一。事二亂君一。焉敢直言正諫。宣王忿然作レ色不レ說。有レ間。王斗曰。昔先君桓公所レ好者五。九二合諸侯一。一二匡天下一。天子授レ籍。立爲二太伯一。今王有レ四焉。宣王說曰。寡人愚陋守二齊國一。唯恐レ失二抎之一。焉能有レ四焉。王斗曰。否。先君好レ馬。王亦馬。先君好レ狗。王亦狗。先君酒。王亦酒。先君色。王亦色。先君士。王亦士。王斗曰。寡人何敢直言正諫。宣王忿然作レ色不レ說。有レ間。王斗曰。昔先君桓公所レ好者五。九二合諸侯一。一二匡天下一。天子授レ籍。立爲二太伯一。今王有レ四焉。宣王說曰。寡人愚陋守二齊國一。唯恐レ失二抎之一。焉能有レ四焉。王斗曰。否。先君好レ馬。王亦馬。先君狗。王亦狗。先君酒。王亦酒。先君色。王亦色。先君士。王亦士。王斗曰。寡人何敢直言正諫。宣王忿然作レ色不レ說。有レ間。王斗曰。昔先君桓公所レ好者五。九二合諸侯一。一二匡天下一。天子授レ籍。立爲二太伯一。今王有レ四焉。宣王說曰。寡人愚陋守二齊國一。唯恐レ失二抎之一。焉能有レ四焉。王斗曰。否。先君好レ

先生王斗門に造つて、齊の宣王に見えんと欲す。宣王、謁者をして延き入れしむ。王斗曰く、「斗趨つて王に見えば勢を好むものと爲り、王趨つて斗を見ば士を好むものと爲らん。王に於て何如」と。使者復た還り報ず。王曰く、「先生之を徐ろにせよ。寡人請ふ從はん」と。宣王因つて趨つて之れを門に迎へ、與に入つて曰く、「寡人、先君の宗廟を奉じ、社稷を守る。聞く、先生直言正諫して諱まずと。」王斗對へて曰く、「王之を聞くこと過てり。斗、亂世に生れて、亂君に事ふ。焉くんぞ敢て直言正諫せん」と。宣王忿然として色を作して說ばず。間ありて、王斗曰く、「昔先君桓公好む所の者五あり。諸侯を九合し、天下を一匡し、天子籍を授けて、立てゝ太伯となす。今王に四あり」と。宣王說んで曰く、「寡人愚陋にして齊國を守り、唯だ之を失抎せんを恐る。焉くんぞ能く四あらん。」王斗曰く、「否。先君馬を好み、王亦馬を好む。先君狗を好み、王亦狗を好む。先君酒を好み、王亦酒を好む。先君色を好み、王亦色を好む。先君士を好み、王は士を好まず。」宣王曰く、「當今の世士なし。寡人何ぞ好まん。」王斗曰く、「騏驎・騄耳なきも、王の駟已に備はり、世に東郭俊・盧氏の狗なきも、王の走狗已に具はれり、世に毛嬙・西施なきも、王の宮已に充てり。王亦士を好まず。何ぞ士なきを患へん。」王曰く、「寡人國を憂へ民を愛す。固より士を得て以て之を治めんを願ふ。」王斗曰く、「王の國を憂へ民を愛するは、王の尺穀を愛するに若かず。」王曰く、「何の謂ぞや。」王斗曰く、「王、人をして冠を爲らしむるに、左右便辟を使はずして、工を使ふものは何ぞや。之を能くするが爲めなり。今王齊を治むるには、左右便辟に非ざれば使ふ無し。臣故に曰ふ、尺穀を愛するに如かずと。」宣王謝して曰く、「寡人國家に罪あり」と。是に於てか士五人を擧げて官に任じ、齊國大いに治まる。

㊀ 先生は有德者又は學者の稱。姓は王、名は斗、齊の高士　㊁ 官名。他國より來れる使者の接伴及び謁見の事

馬。王亦好レ馬。先君好レ狗。王亦好レ狗。先君好レ酒。王亦好レ酒。先君好レ色。王亦好レ色。先君好レ士。王不レ好レ士。宣王曰。當今之世無レ士。寡人何好。王斗曰。世無二騏驎駬耳一。王駟已備矣。世無二東郭俊盧氏之狗一。王之走狗已具矣。世無二毛嬙西施一。王宮已充矣。王亦不レ好レ士也。何患レ無レ士。王曰。寡人憂レ國愛レ民。固願二得レ士以治レ之一。王斗曰。王之憂レ國愛レ民。不レ若三王愛二尺穀一也。王曰。何謂也。王斗曰。王使二人爲レ冠。不レ使二左右便辟一。而使レ工者。何也。爲レ能レ之也。今王治レ齊。非二左右便辟一無レ使也。臣故曰。不レ如レ愛二尺穀一也。宣王謝曰。寡人有レ罪二國家一。於レ是舉二士五人一任レ官。齊國大治。

齊人見二田駢一曰。聞二先生高議一。設爲不レ宦。而願爲レ役。田駢曰。子何聞レ

齊人、田駢に見えて曰く、「先生の高議を聞く。設爲宦せざるも、願はくは役たらん。」田駢曰く、「子何くよりか之を聞く。」對へて曰く、「臣之を鄒人の女に聞く。」田駢曰く、「何の謂ぞや。」對へて曰く、「臣が鄒人の女、設爲嫁せざるも、行年

を掌る　㊀ 國者也　㊁ そろ〳〵と御出で下され　㊂ 當方より出掛けて御目に掛らん　㊃ むつとして顏色をかへ　㊄ 策命也。周の天子詔命を以て諸侯の長となしたるをいふ　㊅ 桓公好む所五の中王に其四あり　㊆ 拓は隕に同じ。失墜　㊇ 桓公　㊈ 美女　㊉ 共に良馬の名　㊊ 駟馬、車を引く四頭の馬　㊋ 東郭俊は兎の名、既に前に出づ。盧氏の狗は卽ち韓盧也。彼の東郭俊を逐へる盧氏の犬といふ意にて斯く併出せるにや　㊌ 冠を作るに用ふる儘かの紗　㊍ 國家を治むるの道を失ふ、故に斯くいふ也　㊎ 御そばに仕ふる御氣に入りの人　㊏ 毛嬙は越王の嬖妾、西施は吳王の姬、共に有名なる美人　㊐ 左右よりも工人の方が

之。對曰。臣聞二之鄒人之女一。田駢曰。何謂也。對曰。臣鄒人之女。設爲不レ嫁。行年三十而有二七子一。不レ嫁則不レ嫁。然嫁過畢也。今先生設爲不レ宦。訾養千鍾。徒百人。不レ宦則然矣。而富過畢矣。田子辭。

三十にして七子あり、嫁せざるは則ち嫁せず、然れども嫁過ぎて畢れり。今先生設爲宦せざるも、訾養千鍾、徒百人あり、宦せざるは則ち然り、而れども富過ぎて畢れり」と。田子辭す。

㊀ 齊の處士　㊁ 仕官せずと高議するを。一說には議は義の字ならんと　㊂ たとひ先生が任官せざるも、何卒先生に役使せられんを願ふ　㊃ 何を以て之を知るかといふ如き意　㊄ 鄒りの女の事を以て之を知るといふ事實は嫁既に過ぎ畢れりといふべし　㊅ 資する所養ふ所。一鍾は六斛四斗。生活狀態の極めて富饒なるをいふ　㊆ 使役せらるゝ者

管燕得二罪齊王一。謂二其左右一曰。子孰而與レ我赴二諸侯一乎。左右默然莫レ對。管燕連然流レ涕曰。悲夫。

管燕罪を齊王に得たり。其左右に謂つて曰く、「子孰れか我と諸侯に赴くや」と。左右默然として對ふる莫し。管燕連然として涕を流して曰く、「悲しい夫、士何ぞ其れ得易くして用ひ難きや。」田需對へて曰く、「士は三食も饜くを得ずして、君の鴛鴦は餘食あり。下宮は羅紈を糅へ、綺縠を曳けども、士は以て緣にだに爲す

士何其易レ得而難レ用也。田需對曰。士三食不レ得レ鑿。而君驚驚有二餘食一。下宮糅二羅紈一曳二綺縠一。而士不レ得二以爲レ緣。且財者。君之所レ輕。死者。士之所レ重。君不二肯以レ所レ輕與レ士而責二士以レ所レ重事レ君。非二士。易レ得而難レ用也。

を得ず。且つ財は君の輕んずる所、死は士の重んずる所なり。君肯て輕んずる所を以て士に與へずして、士の重んずる所を以て君に事ふるを責む。士の得易くして用ひ難きに非ざる也」と。

(一) 齊人ならん　(二) 我と生死を共にし命懸けにて他國に赴く人は誰かと也。既に驛を得たる事故人の死力を得て共にするに非ざれば他國に達する能はざる也　(三) さめ〳〵と涙を流す形容。平日左右にあり乍ら斯る急場に誰も共にせんと答ふるを無きを愁む也　(四) 一日三度の食も十分ならず　(五) 驚鳥やあひるは食ひ餘る程の食あり　(六) 後宮の美人　(七) 羅はうす織りもの、紈は白の絹、共に美服をいふ。縠は雜也　(八) 綺は文繻、縠は紗、斯る立派なるうすものを長く曳くと也　(九) 財也　(十) 死也

昭陽爲レ楚伐レ魏。覆レ軍殺レ將。得二八城一。移レ兵

閔王上

(一)昭陽楚の爲めに魏を伐ち、軍を覆へし將を殺して、八城を得、兵を移して齊を攻む。陳軫、齊王の爲めに使して、昭陽に見え、再拜して戰勝を賀し、起つて問

而攻レ齊。陳軫爲二齊王一使。見二昭陽一再拜賀二戰勝一。起而問。楚之法。覆レ軍殺レ將。其官爵何也。昭陽曰。官爲二上柱國一。爵爲二上執珪一。陳軫曰。異貴二於此者一。何也。曰。唯令尹耳。陳軫曰。令尹貴矣。王非レ置二兩令尹一也。臣竊爲レ公譬。可乎。楚有二祠者一。賜二其舍人巵酒一。舍人相謂曰。數人飲レ之

ふ、楚の法、軍を覆へし將を殺さば、其の官爵何ぞや。」昭陽曰く、「官は上柱國と爲り、爵は上執珪と爲らん。」陳軫曰く、「異に此より貴き者は何ぞや。」曰く、「唯だ令尹あるのみ。」陳軫曰く、「令尹は貴し。王兩令尹を置くに非ず。臣竊かに公の爲めに譬へん、可ならんか。楚に祠者あり。其舍人に巵酒を賜ふ。舍人相謂つて曰く、『數人之を飲めば足らず、一人之を飲めば餘あり。請ふ地に畫いて蛇を爲り、先づ成らん者酒を飲まん』と。一人蛇先づ成る。酒を引いて且に飲まんとし、乃ち左手に巵を持ち、右手に蛇を畫いて曰く、『吾能く之が足を爲さん』と。未だ成らざるに、一人蛇成る。其巵を奪ひて曰く、『蛇固より足なし。子安くんぞ能く之が足を爲さん』と。遂に其酒を飲む。蛇足を爲す者、遂に其酒を亡へり。今君、楚に相として魏を攻め、軍を破り將を殺し、八城を得て、兵を弱しとせず、齊を攻めんと欲す。齊の公を畏るゝこと甚だし。公是を以て名とする亦足れり。官の上に重かる可きに非ず。戰勝たざる無くして、止まるを知らざる者は、身且に死せん

不レ足。一人飲レ之有レ餘。請畫レ地爲レ蛇。先成者飲レ酒。一人蛇先成。引レ酒且レ飲レ之。乃左手持レ巵。右手畫レ蛇曰。吾能爲二之足一。未レ成。一人之蛇成。奪二其巵一曰。蛇固無レ足。子安能爲二之足一。遂飲二其酒一。爲二蛇足一者。終亡二其酒一。今君相レ楚而攻レ魏。破レ軍殺レ將。得二八城一。不レ弱レ兵。欲レ攻レ齊。齊畏レ公甚。公以レ是爲レ名亦足矣。官之上非レ可レ重也。戰無レ不レ勝。而不レ知レ止者。身且レ死。爵且二後歸一。猶レ爲二蛇足一也。昭陽以爲レ然。解レ軍而去。

秦攻レ趙。趙令下樓緩以二九城一求中講二於秦一。而與レ之伐レ齊。齊王恐。因使下人以二十城一求中講

とし、爵且に後に歸せんとす。(一三)猶ほ蛇足を爲すがごとし」と。昭陽以て然りとし、軍を解いて去る。

(一) 楚の相　(二) 轉じて　(三) 德道調の註に「楚功臣ヲ爵シ賜フニ圭ヲ以テス、之ヲ執圭トイヒ、附庸ノ君ニ比ス」　(四) 殊に也　(五) 楚の最上の階也　(六) 祭者也　(七) 近侍の臣下　(八) 巵は酒器也、さかづき　(九) 正解の訓點は「吾能爲レ之。足未レ成」に作れども、一說に從ひ改め譯す　(一〇) 其兵の强きを恃み　(一一) 魏を伐ちて大勝したるのみにて勇名を輝かすには十分也　(一二) これ以上戰勝すともこれ以上官爵きを加ふべきにあらず　(一三) 身死して爵は後任の大將の手に歸せん

秦、趙を攻む。趙、樓緩をして五城を以て秦に講し、之と與に齊を伐たんことを求めしむ。齊王恐れ、因て人をして十城を以て講を秦に求めしむ。樓子恐る。因て上黨の二十四縣を以て秦王に許す。趙足齊に之き、齊王に謂つて曰く、「王、秦・趙の解くるを欲せんか、趙に從合せんに如かず。趙必ず秦に倍かん、秦に倍かば、則ち齊患なけん。

(一) 講和し　(二) 趙の使者　(三) 合の反對にて　(四) さすればと福ひ見よ

於秦。樓子恐。因以二上黨二十四縣一許二秦王一。趙足之レ齊。謂二齊王一曰。王欲二秦趙之解一乎。不レ如レ從二合於趙一。趙必倍レ秦。倍レ秦。則齊無レ患矣。

齊將に田嬰を薛に封ぜんとす。楚王之を聞いて大いに怒り、將に齊を伐たんとす。齊王輟めん志あり。公孫閈曰く、「封の成ると不らざるとは、齊に在るに非ず。又將に楚に在らんとす。閈楚王に說いて、其をして公を封ぜんと欲する、又齊より甚だしからしめん。」嬰子曰く、願はくは之を子に委せん」と。公孫閈爲めに楚王に謂つて曰く、「魯・宋、楚に事へて、齊の事へざるは、齊大にして魯・宋小なればなり。王獨り魯・宋の小を利として、齊の大を惡まざるは何ぞや。夫れ齊の地を削つて田嬰を封ずるは、是れ其の弱まる所以也。願はくば止むる勿れ。」楚

齊將レ封二田嬰一於薛一。楚王聞レ之大怒。將レ伐レ齊。齊王有二輟志一。公孫閈曰。封之成與レ不。非レ在レ齊也。又將レ在レ楚。閈說二楚王一。令二其欲レ封レ公也。又甚二於齊一。嬰子曰。願委二之於子一。

公孫閈爲謂二楚王一曰。魯宋事レ楚。而齊不レ事者。齊大而魯宋小。王獨利二魯宋之小一。不レ惡二齊大一何也。夫齊之削地而封二田嬰一。是其所二以弱一也。願勿レ止。楚王曰。善。因不レ止。

王曰く、「善し」と。因て止めず。

一 誠は「恐」の誤といふ 二 止也、田嬰を封ずるを止めんとする意 三 田嬰に向ひて

靖郭君將レ城レ薛。客多以諫。靖郭君謂二謁者一。無二爲レ客通一。齊人有二請者一。曰。臣請三言而已矣。益二一言一。臣請烹。靖郭君因見レ之。客趨而進曰。海大魚。因反走。君曰。客有二於此一。客曰。鄙臣不二敢以レ死爲レ戲。君曰。亡。更言レ之。對曰。君不レ聞二大魚一乎。網不レ能レ止。鈎不レ能レ牽。蕩而失レ水。則螻蟻得レ意焉。今夫齊。亦君之水也。君長有レ齊。奚以レ薛爲。夫レ齊。雖下隆二薛之城一到中於天上。猶之無レ益也。君曰。善。乃輟レ城レ薛。

靖郭君將に薛に城かんとす。客多く以て諫む。靖郭君謁者に謂へらく、客の爲めに通ずる無かれと。齊人請ふ者あり、曰く、「臣請ふ三言せんのみ。一言を益さば、臣請ふ烹られん」と。靖郭君因て之を見る。客趨つて進んで曰く、「海大魚」と。因て反り走る。君曰く、「客此に有らん。」客曰く、「鄙臣敢て死を以て戲とせず。」君曰く、「亡し。更に之を言へ。」對へて曰く、「君大魚を聞かずや。網も止むる能はず、鈎も牽く能はず。蕩して水を失はゞ、則ち螻蟻意を得ん。今夫れ齊は亦君の水也。君長く齊を有たば、奚ぞ薛を以て爲ん。齊を失はゞ、薛の城を隆くして、天に到ると雖も、猶ほ之れ益なからん。」君曰く、「善し」と。乃ち薛に城くを輟む。

一 田嬰 二 城を築かんとす 三 取次ぎの役人 四 取次ぐべからず 五 一言にても餘分に申さば 六 即ち三言也 七 此三言の中に誤あらん其辯を聞かんと也 八 此上一言にても增さば死を賜はらんと豫ねて申上げたる事故、說はあれども敢て述べずと也 九 決して誅することなし 一〇 されど大波にゆり上げられて水の無い所に出れば 一一 けちや蟻の思ふまゝになる 一二 何ぞ薛に城を築くの要あらん 一三 原文夫は「失」の誤

靖郭君謂二齊王一曰。五官之計。不レ可レ不二日聽也。而數覽一王曰。說。五而厭レ之。令與二靖郭君一。靖郭君善二齊貌辨一。齊貌辨之爲レ人也多レ疵。門人不レ說。

靖郭君、齊王に謂つて曰く、「五官の計は、日に聽いて、數〻覽ざる可らず。」王曰く、「諾」と。已にして之を厭ひ、令して靖郭君に與ふ。

一 事を見る所の五大夫の事務會計を日々よく聽き又しば〳〵其計簿を見る。蓋し田嬰齊の權を收めんと欲し、先づ王に類勢せしめしなちん 二 原文「說」は「諾」の誤 三 原文「五」は「已」の誤 四 委任したる也

靖郭君、齊貌辨に善し。齊貌辨の人と爲りや疵多し。門人說ばず。士尉以て靖郭君を証む。靖郭君聽かず。士尉辭して去る。孟嘗君又竊かに以て諫む。靖郭君大いに怒つて曰く、「而の類を剝り、吾が家を破るも、苟くも齊貌辨に慊かる可

士尉以証二靖郭君一。靖郭君不レ聽。士尉辭而去。孟嘗君又竊以諫。靖郭君大怒曰。刻二而類一。破二吾家一。苟可レ慊二齊貌辨一者。吾無レ辭爲レ之。於レ是舍二之上舍一。令二長子御レ之。旦暮進レ食。數年威王薨。宣王立。靖郭君之交。大不レ善二於宣王一。辭而之レ薛。與二齊貌辨一俱。留無二幾何一。齊貌辨辭而

き者は、吾辭する無くして之を爲ん」と。是に於て之を上舍に舍き、長子をして之に御し、旦暮に食を進めしむ。數年にして威王薨じ、宣王立つ。靖郭君の交、大いに宣王に善からず、辭して薛に之く。齊貌辨と俱にす。留まること幾何も無くして、齊貌辨辭して行き、宣王に見えんと請ふ。靖郭君曰く、「王の嬰を說ばざるや甚だし。公往かば必ず死を得ん。」齊貌辨曰く、「固より生を求めず。請ふ必ず行かん」と。靖郭君止むる能はず。齊貌辨行いて齊に至る。宣王之を聞き、怒を藏めて以て之を待つ。齊貌辨宣王に見ゆ。曰く、「子は靖郭君の聽愛する所か。」齊貌辨曰く、「愛は則ち之あり。聽は則ち有るなし。王の方に太子たりし時、辨靖郭君に謂つて曰く、『太子の相は不仁なり、過頤豕視す。是の若き者は倍反す。太子を廢して、更に衞姬の嬰兒郊師を立てんに若かず』と。靖郭君泣いて曰く、『不可なり、吾忍びず』と。若し辨に聽いて之を爲したらんか、必ず今日の患なからん。此れ一たり。薛に至るや、昭陽數倍の地を以て薛に易へんと請ふ。辨又曰く、『必ず之を

行。請レ見二宣王一。靖郭君曰。王之不レ說レ嬰甚。公往必得レ死焉。齊貌辨曰。固不レ求レ生也。請必行。靖郭君不レ能レ止。齊貌辨行至レ齊。宣王聞レ之。藏レ怒以待レ之。齊貌辨見二宣王一。王曰。子靖郭君之所二聽愛一夫。齊貌辨曰。愛則有レ之。聽則無レ有。王之方爲二太子一之時。辨謂二靖郭君一曰。太子相

け』と。靖郭君曰く、『薛を先王に受けたり。後王に惡まると雖も、吾獨り先王に何とか謂はん。且つ先王の廟、薛に在り。吾豈に先王の廟を以て楚に與ふ可けんや』と。又辨に聽くを肯んぜず。此れ二たり」と。宣王太息し、顏色を動かして曰く、「靖郭君の寡人に於ける、一に此に至るか。寡人少うして殊に此を知らず。客寡人の爲めに靖郭君を來らしむるを肯んぜんか。」齊貌辨對へて曰く、「敬んで諾す」と。靖郭君、威王の衣冠を衣、其劍を舞ぶ。宣王自ら靖郭君を郊に迎へ、之を望んで泣く。靖郭君至る。因て之を相とせんと請ふ。靖郭君辭す。已むを得ずして之を受け、七日にして病を謝し强ひて辭せしも得ず、三日にして聽さる。是の時に當つて、靖郭君能く自ら人を知ると謂ふ可し。能く自ら人を知る。故に人之を非れども、沮むるを爲さず。此れ齊貌辨の生を外にして患を樂ひ、難に趣きし所以のもの也。

㊀ 寡人　㊁ 靖郭君の門人　㊂ 寡人　㊃ 諫也　㊄ 靖郭君田嬰の子田文也　㊅ 面社反、類は類、刻は類也

不仁。過頤豕
觀。若是者信
反。不若廢太
子。更立衛姬
嬰兒郊師。靖
郭君泣而曰。
不可。吾不忍
也。若聽辨而
爲之。必無今
日之患也。此爲一。王於薛。昭陽請以數倍之地易薛。辨又曰。必聽之。靖郭君曰。受薛於先王。雖惡於後王。吾獨謂先王何乎。且先王之廟在薛。吾豈可以與楚乎。又不肯聽辨。此爲二。宣王太息。動於顏色。曰。靖郭君之於寡人。一至此乎。寡人少殊不知此。客肯爲寡人來靖郭君衣威王之衣冠。舞其劍。宣王自迎靖郭君於郊。望之而泣。靖郭君至。因請相之。靖郭君辭。不得已而受之。七日謝病強辭。不得。三日而聽。當是時。靖郭君可謂能自知人矣。能自知人。故人非之不爲沮。此齊貌辨之所以外生樂患趣難者也。

一族を亡ぼしの禍　㊀ あきたると謂ずるも可、快也、足也、心に滿足を與ふるをいふ　㊁ 甲第也、第一番の館　㊂ 近侍し　㊃ 朝夕　㊄ 坊本は「威」を「宣」に作り「宣」を「閔」に作れり　㊅ 田嬰卽ち靖郭君の自稱　㊆ 大切にして萬事其意見を聽く　㊇ 寡人辨の自稱　㊈ おとがひが人並みすぐれて大きく、豕の如く反轉する習はしあり　㊉ 原文「信」は「倍」の誤といふ說に從ふ、始めは人を信用するも後には反すと也、「倍反す」と讀むも通ずべきか　㊋ 衛姬の腹に出來た子、宣王の庶弟　㊌ 余の此意見を聽きて　㊍ 今日新く君と不和になりて遠はるゝ患る也　㊎ 其父の容貌に似たるを認見して泣く也　㊏ 病氣なりと申立てゝ　㊐ 止也　㊑ 生命を棄てて顧みず

秦伐ㇾ魏。陳軫合三晉而東。

秦、魏を伐つ。陳軫三晉を合して東し、齊王に謂つて曰く、「古の王者の伐つや

謂二齊王一曰。古之王者之伐也。欲下以正二天下一。而立二功名一。以爲中後世上也。今齊楚燕趙韓梁六國之遞甚也。不ㇾ足三以立二功名一。適足二以強ㇾ秦而自弱一也。非二山東之上計一也。能危二山東一者。強秦也。不ㇾ憂二強秦一。而遞相罷弱。而兩歸二其國於秦一。此臣之所三以爲二山東之患一。天下爲ㇾ秦相割。

以て天下を正して功名を立て、以て後世の爲めにせんと欲する也。今齊・楚・燕・趙・韓・梁六國の遞ひに甚だしきや、以て功名を立つるに足らずして、適く以て秦を強うして自ら弱むるに足る。山東の上計に非ず。能く山東を危ふくせん者は強秦也。強秦を憂へずして、遞ひに相罷弱し、而して兩つながら其國を秦に歸す。此れ臣の山東の患と爲す所以なり。天下秦の爲に相割きて、秦曾て刀を出さず。天下秦の爲めに相烹て、秦曾て薪を出さず。何ぞ秦の智あつて、山東の愚なるや。願はくは大王の察せられんことを。古の五帝・三王・五霸の伐つや、不道の者を伐つ。今秦の天下を伐つは然らず、必らず之に反せんと欲す。主は必ず辱に死し、民は必ず虜に死す。今韓・梁の目未だ嘗て乾かざるに、齊の民獨り不らず。齊親しうして韓・梁疏きに非ず。齊は秦に遠くして、韓・梁は近ければなり。今や齊將に近からんとす。今秦、梁の絳・安邑を攻めんと欲す。秦、絳・安邑を得ば、以て東、河を下り、必ず河を表裏にして、東齊を攻めん。齊を舉げて之を海に屬

秦曾不レ出レ刀。天下爲レ秦相烹。秦曾不レ出レ薪。何秦之智。而山東之愚邪。願大王之察也。古之五帝三王五霸之伐也。伐二不道者一。今秦之伐二天下一不レ然。必欲レ反レ之。主必死レ辱。民必死レ虜。今韓梁之目未二嘗乾一。而齊民獨不也。非二齊親而韓梁疏一也。齊遠レ秦而韓梁近。今齊將レ近

け、南面して楚・韓・梁を孤とし、北向して燕・趙を孤とせば、齊は其計を出す所なからん。願はくは王之を熟慮せよ。今三晉已に合せり。復た兄弟の約を爲して銳師を出し、以て梁の絳・安邑を戍るは、此れ萬世の計也。齊急に銳師を以て三晉に合するに非ずんば、必ず後の憂あらん。三晉合せば、秦必ず敢て梁を攻めず、必ず南楚を攻めん。楚・秦難を構へて、三晉、齊の己に與せざるを怒らんか、必ず東齊を攻めん。此れ臣の所謂齊必ず大憂あるなり。急に兵を以て三晉に合せんに如かず」と。齊王敬んで諾す。果して兵を以て三晉に合せり。

一 軫は此時魏に仕ふ、故に三晉を合して東せる也　二 韓魏趙　三 梁は魏　四 かはるゝ〜相伐つの甚しきや　五 山東六國の計として宜しき所にあらず　六 彼此共に　七 相割きといひ相煮るといひ、刀といひ薪といふ、皆肉を以て譬ふる也、秦は刀薪を出さゞるに、六國はお互に肉を割きて之を煮るごとく互に相攻伐罷弱して其結果は皆秦の爲めとなると也　八 一說には薪と叶韻にて「刃」に作るべしといふ　九 五帝三王五霸の如き古の伐に反し虎狼の心を難にして以て諸侯を呑まんと欲す　一〇 故に諸侯の主は　一一 秦の攻伐に遽ひて多く戰死し之を怨しみて涙の乾く暇もなきに　一二 秦に也　一三 秦が韓梁を兼併すれば秦と齊と境を接する事となるを以て也　一四 擾りて害害とし　一五 惡く齊の地を取り　一六 孤立して相合はざらしめ　一七 戰端を啓く　一八 三晉が齊の師を出して已に合せざるを怒る時は秦楚の相戰ふ間に乘じて齊を攻めん、前に後の憂といふは卽ち是也

矣。今秦欲レ攻二梁絳安邑一。秦得二絳安邑一。以東下レ河。必表二裏河一而東攻レ齊。齊屬二之海一。南面而孤二楚韓梁一。北向而孤二燕趙一。齊無レ所レ出二其計一矣。願王熟二慮之一。今三晉已合矣。復爲二兄弟約一。而出二銳師一以戍二梁絳安邑一。此萬世之計也。齊非下急以二銳師一合中三晉。必有二後憂一。三晉合。秦必不二敢攻一梁。必南攻レ楚。楚秦搆レ難。三晉怒二齊不レ與レ己也。必東攻レ齊。此臣之所レ謂齊必有二大憂一。不レ如三急以レ兵合二於三晉一。齊王敬諾。果以レ兵合二於三晉一。

韓齊爲二與國一。張儀以二秦魏一伐レ韓。齊王曰。韓吾與國也。秦伐レ之。吾將レ救レ之。田臣思曰。王之謀過矣。不レ如レ聽レ之。子噲與二子之國一。百姓不レ戴。諸侯弗レ與。秦

韓・齊與國たり。張儀、秦魏を以て韓を伐つ。齊王曰く、「韓は吾が與國也。秦之を伐つ。吾將に之を救はんとす。」田臣思曰く、「王の謀過てり。之を聽すに如かず。子噲、子之に國を與へて、百姓戴かず、諸侯與せず。秦、韓を伐つ。楚・趙必ず之を救はん。是れ天、燕を以て我に賜ふ也。」王曰く、「善し」と。乃ち韓の使者に許して之を還す。韓自ら以へらく交を齊に得たりと。遂に秦と戰ふ。楚・趙果して遽かに兵を起して韓を救ふ。齊因て兵を起して燕を攻め、三十日にして燕の國を舉げぬ。

伐レ韓。楚趙必救レ之。是天以レ燕賜レ我也。王曰。善。乃許二韓使者一而遣レ之。韓自以得二交於齊一。遂與レ秦戰。楚趙果遽起レ兵而救レ韓。齊因起レ兵攻レ燕。三十日而舉二燕國一。

❶同盟國　❷口だけで救ふ事を許して實際は救はず、正解には「聽之」の下に「勿レ救」の二字を脱せるなちんといへり　❸今々燕の王子噲は其相子之に國を讓り與へたるゝ　❹今秦は韓を伐ち、楚趙韓を救へば燕は孤立無援也、其間に乘じて之を伐たば必ずや燕の國、我なちんとれ天が燕を我に賜ふ譯也　❺救ふ事を許して　❻悉く攻め取りたり

張儀爲レ秦連横。說二齊王一曰。天下强國。無二過レ齊者一。大臣父兄。殷衆富樂。無二過レ齊者一。然而爲二大王一計者。皆爲二一時說一。而不レ顧二萬世之利一。從人說二大王一者。必謂齊四有二强趙一。南有二韓魏一。負レ海之國也。地廣人衆。兵强士勇。雖レ有二百秦一。將レ無二奈レ我何一。大王覽二其說一。而不レ察二其至實一。夫從人朋黨比周。莫レ不二以レ從爲レ可。臣聞レ之。齊與レ魯三勝。國而魯三勝。國以危。亡隨二其後一。雖レ有二勝名一。而有二亡之實一。是何故也。齊大而魯小。今趙之與レ秦也。猶二齊之於レ魯一。

張儀、秦の爲めに連横せんとして、齊王に說いて曰く、「天下の强國、齊に過ぐる者なく、大臣父兄の殷衆(一)富樂なる、齊に過ぐる者なし。然り而して大王の爲めに計る者、皆一時の說を爲して、萬世の利を顧みず。從人(二)の大王に說く者は、必らず謂はん、『齊は西に强趙あり、南に韓・魏あり、海を負ふの國也。地廣く人衆(三)く、兵强く士勇めり。百秦ありと雖も、將に我を奈何ともする無からんとす』と。大王其說を覽(四)て、其至實を察せず。夫れ從人は朋黨比周(五)して、從を以て可とせざるもの莫し。臣之を聞く、齊、魯と三たび戰つて、魯三たび勝ち、國以て危ふく亡(七)其後に隨へりと。勝名ありと雖も、而も亡の實あり。是れ何の故ぞや。齊は大にして魯小なればなり。今趙と秦とは、猶ほ齊の魯に於けるがごとし。秦・趙河漳(八)の上に戰ひ、再び戰つて再び秦に勝ち、番吾の下に戰ひ、再び戰つて再び秦に勝ち、四戰の後、趙は卒數十萬を亡ひ、邯鄲(九)僅かに存せり。秦に勝つの名ありと雖も、而も國破る。是れ何の故ぞや。秦强くして趙弱ければ也。今秦・楚、子を嫁し婦を取つて昆弟(一一)の國たり。韓は宜陽を獻じ、魏は河外を效し、趙は眴池(一二)に入朝し、河間を割いて以て秦に事ふ。大王秦に事へずんば、秦は韓・魏を驅つて齊の南地を攻め、趙を悉して河關(一四)を涉り、博關(一五)を指さん。臨菑(一六)・卽墨は、王の有に非ざるべし。國一日(一七)攻められば、秦に事へんと欲すと雖も、得可らざる也。是の故に願はくは大王之を熟計せよ。」齊王曰く、「齊は僻陋隱居(一八)して、東海の上に託す。未だ嘗て社稷(一九)の長利を聞かず。今大客(二〇)幸ひにして之に教ふ。請ふ社稷を奉じて以て秦に事へん」と。魚鹽(二一)の地三百里を秦に獻ず。

也。秦趙戰二於河漳之上一。再戰而再勝レ秦。戰二於番吾之下一。再戰而再勝レ秦。四戰之後。趙亡二卒數十萬一。邯鄲僅存。雖レ有二勝レ秦之名一。而國破矣。是何故也。秦強而趙弱也。今秦楚嫁レ子取レ婦。爲二昆弟之國一。韓獻二宜陽一。魏效二河外一。趙入二朝黽池一。割二河間一以事レ秦。大王不レ事レ秦。秦驅二韓魏一攻二齊之南地一。悉レ趙涉二河關一。指二博關一。臨菑卽墨。非二王之有一也。國一日被レ攻。雖レ欲レ事レ秦。不レ可レ得也。是故願大王熟二計之一。齊王曰。齊僻陋隱居。託二於東海之上一。未三嘗聞二社稷之長利一。今大客幸而教レ之。請奉二社稷一以事レ秦。獻二魚鹽之地三百里於秦一。

一 王の同族　二 殷は多也　三 合從を說く者　四 說に進ず、其說に心を引かれて　五 黨を組みてぐるになり心を合はせ　六 而も國それが爲めに危ふく　七 ついで國の滅亡を來さんとするに至れりと　八 趙の秦に於けるは　九 趙の首都　一〇 取は奪也、互に緣組をなすをいふ　一一 兄弟　一二 邯鄲の國を入りて秦に朝の義か　一三 眞先に駈り立て、　一四 趙の全軍を出して　一五 指して攻め向はん、さすれば。一說には指は脂の誤とす　一六 齊の首都と出城との名　一七 一旦敵となりて秦より攻めらる、時は　一八 中國に遠ざかりたる僻遠鄙陋の國にて　一九 かたよりて國を成す　二〇 國家永久の利計　二一 張儀をいふ敬稱　二二 魚を漁し鹽を製する地の義にて財源豐かなる地をいふ

張儀事二秦惠王一。惠王死。武王立。左右惡二張儀一曰。儀事二先王一不忠。言未レ已。齊讓又至。張儀聞レ之。謂二武王一曰。儀有二愚計一。願效二之王一。王曰。奈何。曰。爲二社稷一計者。東方有二大變一。然後王可二以多割一地。今齊王甚憎二張儀一。儀之所レ在。必舉レ兵而伐レ之。故儀願乞二不肖身一。而之レ梁。齊必舉レ兵而伐レ之。齊梁之兵。連二於城下一。不レ能二相去一。王以二其閒一伐レ韓。入二三川一。

張儀、秦の惠王に事ふ。惠王死して、武王立つ。左右、張儀を惡(一)して曰く、「儀先王に事へて不忠なり」と。言未だ已らざるに、齊の讓(二)又至る。張儀、武王に謂つて曰く、「儀に愚計(三)あり。願はくは之を王に效(四)さん。」王曰く、「奈何(五)。」曰く、「社稷(六)の爲めに計るに、東方に大變(七)ありて、然して後、王以て多く地を割(八)く可し。今齊王甚だ張儀を憎(九)む。儀の在る所、必ず兵を擧げて之を伐(一〇)たん。故に儀願はくは不肖(一一)の身を乞ひて梁に之(一二)かん。齊必ず兵を擧げて之を伐たん。齊・梁の兵城下に連(一三)つて、相去る能はざらん。王其閒(一四)を以て韓を伐つて三川に入り、兵を函(一五)谷に出して伐つ無く、以て周に臨(一六)まば、祭器必ず出でん。天子を挾(一七)さんで、圖籍(一八)を案(一九)ず、此れ王業也。」王曰く、「善し」と。乃ち革車(二〇)三十乘を具して之を梁に納(二一)る。齊果して兵を擧げて之を伐つ。梁王大いに恐る。張儀曰く、「王患(二二)ふる勿れ。請ふ齊の兵を罷(二三)めしめん」と。乃ち其の舍人馮喜(二四)をして楚に之(二五)かしめ、使(二六)を藉りて齊に之かしむ。齊楚の事已に畢(二七)る。因て齊王に謂ふ、「王甚だ張儀を憎(二八)む。然りと雖も、厚いかな王の儀を秦王に託(二九)するや」と。齊王曰く、「寡人甚だ儀を憎(三〇)む。儀の在る所必ず兵を擧げて之を伐たんとす。何を以てか儀を託(三一)せんや。」對へて曰く、「是乃ち王の儀を託する也。儀の秦を出づるや、因て秦王と約して曰く、『王の爲めに計るに、

出二兵函谷一。而無レ伐以臨レ周。祭器必出。挾二天子一。案二圖籍一。此王業也。王曰。善。乃具二革車三十乘一。納二之梁一。齊果舉レ兵而伐レ之。梁王大恐。張儀曰。王勿レ患。請令レ罷二齊兵一。乃使二其舍人馮喜一之レ楚。藉レ使之レ齊。齊楚之事已畢。因謂二齊王一。王甚憎二張儀一。雖レ然。厚矣王之託二儀於秦王一也。齊王曰。寡人甚憎レ儀。儀之所レ在。必舉レ兵而伐レ之。何以託レ儀也。對曰。是乃王之託レ儀也。儀之出レ秦。因與二秦王一約曰。爲レ王計者。東方有二大變一。然後王可二以多割レ地。齊王甚憎レ儀。儀之所レ在。必舉レ兵而伐レ之。故儀願乞二不肖之身一而之レ梁。齊必舉レ兵而伐レ梁。梁齊之兵。連二於城下一。不レ能レ去。王以二其閒一伐レ韓。入二三川一。出二兵函谷一。而無レ伐以臨レ周。祭器必出。挾二天子一。案二圖籍一。是王業也。秦王以爲レ然。與二革車三十乘一。而納二儀於梁一。而果伐レ之。是王內自罷而伐二與國一。廣二鄰敵一。以自臨而信二儀於秦王一也。此臣之所レ謂託レ儀也。王曰。善。乃止。

東方に大變ありて、然して後、王以て多く地を割く可し。齊王甚だ儀を憎む。儀の在る所、必ず兵を擧げて之を伐たん。故に儀願はくは不肖の身を乞ひて梁に之かん。齊必ず兵を擧げて梁を伐たん。梁・齊の兵城下に連つて、去る能はざらん。王其閒を以て韓を伐つて三川に入り、兵を函谷に出して伐つ無く、以て周に臨まば、祭器必ず出でん。天子を挾さんで、圖籍を案ず、是れ王業也』と。秦王以て然りと爲し、革車三十乘を具して、儀を梁に納れたり。而るに果して之を伐つ。是れ王、內自ら罷れ、而して與國を伐つて、鄰敵を廣め、以て自ら臨んで儀を秦王に信ぜしむ。此れ臣の所謂儀を託する也。」王曰く、「善し」と。乃ち止む。

(一) 惡しざまに申して曰く　(二) 齊王甚だ儀を憎む、故に秦の儀に任ずるを責むる使者至りたる也　(三) 東方に攻撃ありて而して後秦以て多く諸侯の地を割取るべし　(四) 身の暇を賜ひてといふ謙辭し　(五) 魏　(六) 結んで解けず互に引き去る能はじ　(七) 函谷關より東に出してわざと伐つなくして　(八) 周の宗社の祭器を賄として秦に呈せん　(九) 地圖や名籍の記錄をしらべ之に據りて以て天下に命令を發す　(一〇) 兵車　(一一) 張儀を　(一二) 楚の使事を借り、楚の使として齊に入らしむ、張儀が自分の使といふ事を齊に覺られないやうにせんが爲め也　(一三) 齊王に對する楚の使者としての用件は眞に畢り、さていよ〳〵本音を吹く也　(一四) 附託する。張儀を愛用する樣に秦王によろしく御願みするといふ意　(一五) 罷は多也。罷國に敵國を多く作り　(一六) 己自ら兵を以て梁に臨み、以て儀が前に秦王と約したる言の如何にも間違なき事を實證し、以て張儀を秦王に信ぜしむと也正解には「以自」を「外自」の誤かといふ　(一七) 梁を伐たず

犀首以レ梁與レ齊戰二於承匡一。而不レ勝。張儀謂二梁王一。不レ用二臣言一。以危レ國。梁王因相レ儀。儀以二秦梁一之レ齊合二橫親一。犀首敗レ儀。儀許諾。因之衛君前參坐。犀首跪行。

犀首、梁を以て齊と承匡に戰つて勝たず。張儀梁王に謂ふ、「臣の言を用ひず、以て國を危ふくす」と。王因て儀を相とす。儀、秦・梁を以て齊に之き黃親を合せんとす。犀首敗らんと欲し、衛君に謂つて曰く、「衍、儀に怨あるに非ず。値〻國を爲むる所以のもの同じからざるのみ。君必ず衍を解け」と。衛君爲めに儀に告ぐ。儀許諾す。因て之と衛君の前に參坐す。犀首跪行して儀が千秋の祝を爲す。明日

首欲レ敗。謂二衛君一曰。衍非レ有レ怨二於儀一。値所二以爲レ國者不レ同耳。君必解レ衍。衛君爲レ告レ儀。儀許諾。因與レ之參二坐於衛君之前一。犀首跪行。爲二儀千秋之觀一。明日張子行。犀首送レ之至二於齊一。齊王聞レ之。怒二於儀一曰。衍也吾讎。而儀與レ之俱。是必與レ衍禦二吾國一矣。遂不レ聽。

張子行く。犀首之を送つて、齊の疆に至る。齊王之を聞き、儀を怒つて曰く、「衍は吾が讎なり。而るを儀之と俱にす。是れ必ず衍と與に吾が國を禦ぐならん」と。遂に聽かず。

一 公孫衍、魏人也。儀は即ち張 二 犀首なり也 三 連横の親を結ばんとす 四 其策を也 五 時に張儀衛を過ぐるを以て犀首衛君の許にゆきて斯く計りたる也 六 治政の方針が異なるのみ 七 自分の心持を張儀に說きあかして彼の怨を解いて下されと也 八 三人並び坐す 九 萬論を祝すといふに同じ 十 前に齊と敵ふ故に禦といふ也 十一 齊ちんといふに同じ 十二 境界 十三 衍は

楚王死。太子在レ齊質。蘇子謂二薛公一曰。君何不レ留二楚太子一。以市二其下東國一。薛公曰。

楚王死す。太子、齊に在つて質たり。蘇子、薛公に謂つて曰く、「君何ぞ楚の太子を留めて、以て其下東國に市へざる。」薛公曰く、「不可なり。我れ太子を留めば、郢中、王を立てん。然らば則ち是れ我れ空質を抱いて、不義を天下に行ふ也。」蘇子曰く、「然らず。郢中、王を立てば、君因て新王に謂つて曰へ、『我に下東國を與

不可。我留二太子一。郢中立レ王。然則是我抱二空質一。而行二不義一於天下一也。蘇子曰。不レ然。郢中立レ王。君因謂二其新王一曰。與二我下東國一。吾爲レ王殺二太子一。不レ然。吾將下與二三國一共立上之。然則下東國必可レ得也。蘇子之事可二以請行一。可二以令三楚王亟入二下東國一。可三以益割二於楚一。可下以忠二太子一。使中之亟去上。可三以惡二蘇子於薛公一。可下以忠二太子一。而使中楚益入地。可下以爲二楚王一走中太子上。善蘇子。可四以使三蘇子自解二於薛公一。

へよ。吾れ王の爲に太子を殺さん。然らずんば、我れ將に三國と共に之を立てんとす』と。然せば則ち下東國必ず得可き也」と。蘇子の事、以て請うて行く可く、以て楚王をして亟かに下東國を入れしむ可く、以て益ゝ楚に割かしむ可く、以て太子に忠あつて、楚をして益ゝ地を入れしむ可く、以て楚王の爲めに太子を走らす可く、以て太子に忠あり、之をして亟かに去らしむ可く、以て蘇子を薛公に惡ましむ可く、以て蘇子の爲めに封を楚に請ふ可く、以て人をして薛公に說いて、以て蘇子を善せしむ可く、以て蘇子をして自ら薛公に解かしむ可し。

一 懷王秦に客死す 二 頃襄王 三 田文 四 楚の國都の東、下流に位する故下東國といふ也。其地を交換條件として得よと也 五 楚の都 六 太子を留めて地を求むるは不義也 七 以下此節の末文までは記者擬說の辭にて、乃ち其條目を擧ぐるもの、下文各條の「故曰」は一々此節の各條目に照應せり 八 地を 九 親好

蘇子謂二薛公一曰。臣聞謀泄者。事無レ功。計不レ決者。名不レ成。今君留二楚太子一者。以市二下東國一也。非三亟得二下東國一者。則楚之計變。變則是君抱二空質一而負二名於天下一也。薛公曰。善。爲レ之奈何。對曰。臣請爲レ君之レ楚。使三亟入二下東國之地一。楚得レ成。則君無レ敗矣。薛公曰。善。因遣レ之。故

蘇子、薛公に謂つて曰く、「臣聞く、謀泄るれば事功なく、計決せざれば名成らずと。今ま君の楚の太子を留むる者は、以て下東國に市へんとて也。亟かに下東國を得るに非ずんば、則ち楚の計變ぜん。變ぜば則ち是れ君、空質を抱いて、名を天下に負はん。」薛公曰く、「善し。之を爲す奈何。」對へて曰く、「臣請ふ君の爲に楚に之き、亟かに下東國の地を入れしめん。楚成すを得ば、則ち君敗るゝ無けん。」薛公曰く、「善し」と。因て之を遣る。故に曰く、『以て請うて行く可し』と。楚王に謂つて曰く、「齊、太子を奉じて立てん欲す。臣薛公の太子を留むる者を觀るに以て下東國に市へんとする也。今王亟かに下東國を入れずんば、則ち太子且に王の割に倍して、齊をして己を奉ぜしめんとす。」楚王曰く、「謹んで命を受く」と。因て下東國を獻ず。故に曰く、『以て楚をして亟かに地を入れしむ可し』と。薛公に謂つて曰く、「楚の勢多く割く可き也。」薛公曰く、「奈何。」「請ふ太子に其故を告げて、太子をして之を謁はしめん。君以て太子に忠あり。楚王をして之を聞

曰。可二以請行一也。謂二楚王一曰。齊欲下奉二太子一而立上之。臣觀下薛公之留二太子一者。以市二下東國一也。今王不三亟入二下東國一。則太子且倍二王之割一。而使齊奉己。楚王曰。謹受レ命。因獻二下東國一。故曰。可三以使二楚亟入レ地也。謂二薛公一曰。楚之勢可二多割一也。薛公曰。奈何。請告二太子其故一。使二太子謁レ之。君以忠二太子一。使二楚王聞レ之。可二以益入レ地。故曰。可三以益割二於楚一。

かしめば、以て益地を入る可し」と。故に曰く、『以て益楚に割かしむ可し』と。

一 不義の名を　二 前に所謂郢中立つる所の新王也　三 楚の事成すを得ば也。卽ち楚地を入れ太子を立つるをいふ　四 王の割く所の地に倍して齊に割讓し　五 楚の形勢を觀るに土地多く割き取るべし　六 齊が太子を留むる理由　七 太子をして地を多く齊に入れ因て己を推立てて國王となすを請はしむ。一說「之」は楚王、「謁」は告ぐと解し「太子をして之に君の以て太子に忠あるを謁げしめん」と訓ず

太子に謂つて曰く、「齊、太子を奉じて之を立てんとせしに、楚王、地を割いて以て太子を留めんと請ふ。齊、其地を少しとす。太子何ぞ楚の割地を倍にして齊に資せざる。齊必ず太子を奉ぜん。」太子曰く、「善し」と。楚の割に倍して齊を延く。楚王之を聞いて恐れ、益〻地を割いて之に獻じ、尙ほ事の成らざらんを恐る。故に曰く、『以て楚をして益〻地を入れしむ可し』と。楚王に謂つて曰く、「齊の敢て多

子。太子曰。善。倍二楚之割一而延レ齊。楚王聞レ之恐。益割レ地而獻レ之。尙恐二事不レ成。故曰。可三以使二楚益入レ地也。謂二楚王一曰。齊之所二以敢多割レ地者。挾二太子一也。今已得レ地。而求不レ止者。以二太子一權レ王也。故臣能去二太子。太子去。齊無レ辭。必不レ倍二於王一也。王因驕二强齊一而爲レ交。齊劉必聽レ

く地を割く所以の者は、太子を挾めば也。今已に地を得、而して求めて止まざる者は、太子を以て王を權れば也。故に臣能く太子を去らん。太子去らば、齊、辭なく、必ず王に倍かざらん。王因て强齊に驕せて交を爲さば、齊必ず王に聽かん。然らば則ち是れ王讎を去つて、齊の交を得る也」と。楚王大いに說んで曰く、「請ふ國を以て因らん」と。故に曰く、『以て楚王の爲に太子をして亟かに去らしむ可し』と。太子に謂つて曰く、「夫れ楚を劉する者は王也、空名を以て市ふ者は太子也。齊未だ必ずしも太子の言を信ぜざるに、楚の功は見はる。楚の交成らば、太子必ず危からん。太子其れ之を圖れ。」太子曰く、「謹んで命を受く」と。乃ち車を約へて暮に去る。故に曰く、『以て太子をして急ぎ去らしむ可し』と。

一 蘇子が　二 其地を齊に入れ以て齊を己の助と爲す　三 引也。齊を引いて己に附くるを謂ふ　四 蘇子が　五 太子と王との地を割くの輕重を比較するに依る　六 地を求むるの口實なく　七 齊辭の辭は衍なんとの正解の說に從ひ削り譯す　八 齊に依賴せむと也　九 楚子が　十 劉也。楚の實權を攝り楚を制裁するものは楚の王也　十一 遠ば外にありて實權なく、而して地を割きて以て己を奉ぜんことを求むるをいふ　十二 楚王は實權

王。然則是王去レ讎。而得二齊交一也。楚王大說曰。請以レ國因。故曰。可下以爲二楚王一使中太子亟去上也。謂二太子一曰。夫劉レ楚者王也。以二空名一市者。太子也。齊未三必信二太子之言一也。而楚功見矣。楚交成。太子必危矣。太子其圖レ之。太子曰。謹受レ命。乃約レ車而暮去。故曰。可三以使二太子急去一也。

を攝る、故に地を入るといふ事を信ずべく其實功見はる　十三 楚の齊に對する親交　十四 明朝を待たずして急に去る

蘇子使三人請二薛公一曰。夫勸レ留二太子一者。蘇子也。蘇子非二誠以爲レ君也。且二以便レ楚也。蘇子恐二君之知レ之。故多割レ楚以滅レ跡也。今勸二太子一去者。又蘇子也。而君弗レ知也。

蘇子、人をして薛公に請はしめて曰く、「夫れ太子を留めよと勸めし者は蘇子なり。蘇子誠に以て君の爲めにせるに非ず。且に以て楚に便せんとせし也。蘇子、君の之を知らんを恐る。故に多く楚を割いて以て跡を滅せし也。今太子を勸めて去らしむる者、又蘇子なれども、而も君知らず。臣竊かに君の爲めに之を疑ふ」と。薛公大いに蘇子を怒る。故に曰く、『以て人をして蘇子を薛公に惡せしむ可し』と。又人をして楚王に謂はしめて曰く、「夫れ薛公をして太子を留めしめし者は蘇子也。王を奉じて楚の太子に代り立たしめし者又蘇子也。地を割いて約を固くせし者又蘇子也。王に忠にして太子を走らしめし者又蘇子也。今人、蘇子を薛公に

臣竊爲君疑之。薛公大怒。於蘇子。故曰。可以使人惡蘇子於薛公也。又使人謂楚王曰。夫使薛公留太子者。蘇子也。今人惡蘇子於薛公。以其爲齊薄。而爲楚厚也。願王之知之。楚王曰。謹受命。因封蘇子爲武貞君。故曰。可以爲蘇子請封於楚也。

惡す。其の齊の爲にする薄うして、楚の爲にする厚ければ也。願はくは王の之を知らんことを」と。楚王曰く、「謹んで命を受く」と。因て蘇子を封じて武貞君と爲す。故に曰く、『以て蘇子の爲めに封を楚に請ふ可し』と。

(一) 請は「謂」の誤ならん　(二) 楚の爲めに疎りたる罪跡をくらます　(三) 假に美名を以て言へるにて實情に非ずと

又使景鯉請薛公曰。君之所以重於天下者。以能得天下之士也。而有齊權也。今蘇子。天下之辨士也。世與少有。君因不善蘇子。則是圍塞天下之士。而不利說途也。夫不善君者。且奉蘇子。而於君之事殆矣。今蘇子善於楚王。而君不蚤親。則是身與楚爲讎也。故君不如因而親之。貴而重之。是君有楚也。薛公因善蘇子。故曰。可以爲蘇子請封於楚也。

又景鯉をして薛公に請はしめて曰く、「君の天下に重んぜらるゝ所以の者は、能く天下の士を得て、齊の權を有つを以て也。今蘇子は天下の辨士也。世に有る少なり。君因て蘇子を善せざれば、則ち是れ天下の士を圍塞して、說途に利ならざるなり。夫れ君に善からざる者、且に蘇子を奉ぜんとす。而らば君の事に於て殆からん。今蘇子、楚王に善し。而るに君蚤く親しまずんば、則ち是れ楚と讎たらん。故に君因て之を親しみ、貴んで之を重んぜんに如かず。是れ君楚を有つ也」と。薛公因て蘇子を善す。故に曰く『以て蘇子の爲めに薛公に說いて、以て蘇子を善せしむ可し』と。

(一) 請の誤か　(二) 辯士、雄辯の人　(三) 與は語辭也、振ひて擧出するに及ぶと　(四) 一本圍(マコトニ)に作る　(五) 天下の士を遮ぎて至ちざらしめ以て說士の道に通ぜざる也　(六) 蘇子既

齊王夫人死。有七孺子者。皆近。薛公欲知王所欲立。乃獻七珥。美其一。明日視美珥所在。勸王立爲夫人。

齊王の夫人死す。七孺子者あり、皆近けらる。薛公、王の立てんと欲する所を知らんと欲す。乃ち七珥を獻じ、其一を美にす。明日美珥の在る所を視、王に勸めて、立てゝ夫人となす。

● 年若き美人。妾也　● 寵幸せらる　● 後の夫人として　● 耳飾りの玉　● 特に一個美にしたる珥を與へし者が即ち王の最も寵する所なるを知る也

孟嘗君將入秦。止者千數。而弗聽。蘇代欲止之。孟嘗君曰。人事者。吾已盡知之矣。吾所未聞者。獨鬼事耳。蘇代曰。臣之來也。固不敢言人事也。今且以鬼事見君。孟嘗君見之。謂孟嘗君曰。今者臣來。過於淄上。有土偶人與桃梗相與語。桃梗謂土偶人曰。子西岸之土也。埏子以爲人。至歲八月。降雨下。淄水至。則汝殘矣。土偶曰。不然。吾西岸之土也。土則復西岸耳。今子東國之桃梗也。刻削子以爲人。降雨下。淄水至。流子而去。則子漂漂者。將如何耳。今秦四塞之國。譬若虎口。而君入之。則臣不知君所止矣。孟嘗君乃止。

孟嘗君(一)將に秦に入らんとす。止むる者千數、而も聞かず。蘇代之を止めんと欲す。孟嘗君曰く、「人事は吾已に盡く之を知る。吾が未だ聞かざる所は、獨り鬼事(二)耳。」蘇代曰く、「臣の來るや、固より敢て人事を言はじ。今且に鬼事を以て君に見えんとす」と。孟嘗君之を見る。孟嘗君に謂つて曰く、「今臣來るとき、淄上を過ぐ。(三)土偶人と桃梗と有り、相與に語る。桃梗、土偶人に謂つて曰く、『子は西岸の土也。子を埏ねて以て人に爲る。歲の八月に至つて、降雨下り淄水至らば、則ち汝殘はれん』と。土偶曰く、『然らず。吾は西岸の土也。土は則ち西岸に復らん耳。今子は東國の桃梗也。子を刻削して以て人に爲る。降雨下り、淄水至つて、子を流して去らば、則ち子は漂漂たる者、將に如何せんとするや』と。今秦は四塞の國、譬へば虎口の若し。而るに君之に入らんとす。則ち臣、君の出づる所を知ず」と。孟嘗君乃ち止む。

(一) 薛公田文也　(二) 鬼神に關する話　(三) 淄水のほとり　(四) 土人形と桃の木にて造りたる木人形　(五) ねやすとも訓ず、土を和して製する也　(六) きざみけづる　(七) たゞよふ貌　(八) 四面山圍の固めある國

孟嘗君在薛。荊人攻之。淳于髡爲齊使於荊。還反過薛。而孟嘗君令人禮貌而親郊迎之。謂淳于髡曰。荊人攻薛。夫子弗憂。文無以復侍矣。淳于髡曰。敬聞命。至於齊畢報。

孟嘗君薛(一)に在り。荊人(二)之を攻む。淳于髡、齊の爲めに荊に使し、還反つて薛に過る。孟嘗君、人をして禮貌(三)せしめ、而して親しく之を郊迎す。淳于髡に謂つて曰く、「荊人薛を攻む。夫子憂へずんば、文以て復た侍する無けん」と。淳于髡曰く「敬んで命を聞く」と。齊に至つて畢く報ず。王曰く、「何をか荊に見たる。」對へて曰く、「荊甚だ固にして、薛亦其力を量らずして、先王の爲めに淸廟を立てたり。荊固にして之を攻む。淸廟必ず危ふからん。故に曰く、薛は力を量らず、荊亦甚だ固なり」と。齊王其顏色を和らげて曰く、「諾、先君の廟在り」と。疾く兵を興して之を救へり。顓蹶の請

王曰。何見於荊。對曰。荊甚固。而薛亦不量其力。王曰何謂也。對曰。薛不量其力。而爲先王立清廟。荊固而攻之。清廟必危。故曰。薛不量力。而荊亦甚固。齊王和其顏色。曰。諾。先君之廟在焉。疾興兵救之。顏蹶之請。望拜之謁。難得則薄矣。善說者。陳其勢。言其方。人之急也。若自在隘窘之中。豈用強力哉。

望拜の謁、得と雖も則ち薄し。善く說く者は、其勢を陳べ、其方を言ひて、人の急なるや、自ら隘窘の中に在るが若し。豈に強力を用ひんや。

孟嘗君奉夏侯章。以四馬百人之食。遇之甚歡。夏侯章每言。未嘗毀孟嘗君。夏侯章言毎に、未だ嘗て孟嘗君を毀らずんばあらず。或ひと以て孟嘗君に告ぐ。孟嘗君曰。「文以夏侯公事我。有以事夏侯公矣。勿言。董之蘩菁。以問夏侯公。夏侯公曰。孟嘗君重非諸侯也。而奉我四馬百人之食。我無分寸之功而得此。然吾毀之。以爲之也。君所以得爲長者。以吾毀之也。吾以身爲孟嘗君。豈得持言也。

孟嘗君、夏侯章に奉ずるに、四馬百人の食を以てし、之を遇する甚だ歡ぶ。夏侯章言ふ毎に、未だ嘗て孟嘗君を毀らずんばあらず。或ひと以て孟嘗君に告ぐ。孟嘗君曰く、「文以て夏侯公に事ふる有り。言ふ勿れ」と。董之蘩菁、以て夏侯公に問ふ。夏侯公曰く、「孟嘗君は重きこと諸侯に非ず、而るに我に四馬百人の食を奉ず。我れ分寸の功なくして此を得たり。然して吾が之を毀るは以て之を爲す也。君の長者たるを得る所以は、吾が之を毀るを以て也。吾れ身を以て孟嘗君の爲めにす、豈に言を持するを得んや。」

❶ 孟嘗君の私邑の名 ❷ 楚人 ❸ 禮容を以て之に接せしめ ❹ 先生 ❺ 文は孟嘗君田文の自稱。以後文脈を絶たんといふ敬辭の辭なるべし。陽傾曰く「兒ノ楚ニ使スルヤ、文因ヨリ其ノ楚ノ怨ヲ解クヲ謀ム、而ルニ攻ムルコト益々甚シ、故ニ絶ヲ請ヒテ以テ之ヲ激ス」 ❻ 頑固、固陋の意 ❼ 清明の德ある者の宮、先王の廟をいふ敬辭也 ❽ 以下記者の辭也。顧蹶は奔走して救を請ふにて、急遽の狀をいふ、望拜の謁は遙かに拜謁して救を求むるにて、慇懃遜恭なるを言ふ ❾ よく人を動して救を得るも、救ふ者の情意薄し ❿ 形勢 ⓫ 方略 ⓬ 救ふ者が之に應ずるの疾きこと ⓭ 隘窘困窘 ⓮ 顧蹶望拜の謁謁を指す

孟嘗君、讌坐して三先生に謂つて曰く、「願はくは先生の、以て文の闕を補ふ有る者を聞かん」と。一人曰く、「天下の主、君を侵す者あらば、臣請ふ臣の血を以て其衽に濺がんを訾ふ」と。田瞀曰く、「車軼の能く至る所、請ふ足下の短を掩ひ、足

孟嘗君王讌坐。謂三先生曰。願聞先生有中以補文之闕

者。一人曰。警下天下之主有二侵レ君者一。臣請以二臣之血一濺中其衽。田・嘗曰。車軼之所二能至一。請掩二足下之短一。師二足下之長一。千乘之君。與二萬乘之君一。相。其欲レ有レ君也。如使レ而レ弗レ及也。勝嘗曰。臣願以二足下之府庫財物一。敢二天下之士一。能爲レ君決レ疑應レ卒。若三魏文侯之有二田子方段干木一也。此臣之所二爲レ君取一矣。

下の長を誦せん。千乘の君、萬乘の相と、其の君を有せんと欲すれども、而も及ばざるが如くならしめん」と。勝嘗曰く、「臣願はくは足下の府庫財物を以て、天下の士を收め、能く君が爲めに疑を決し卒に應ずること、魏の文侯の田子方・段干木あるが若くせん。此れ臣が君の爲めに取らんとする所なり」と。

(一) 安坐　(二) 余の缺點　(三) 身を殺して以て其侵す者を殺すをいふ　(四) 車轍　(五) 短所をかくし　(六) 長所を稱揚せん　(七) 君の交歡を得んと欲して及ばざるを恐るるが如くならしめん。原文「而」と「如」とは字の錯誤か又は字の互用か　(八) にはか、匆卒なる事件

孟嘗君舍人。有下與二君之夫人一相愛者。或以聞二孟嘗君一曰。爲二君舍人一。而內與二夫人一相愛。亦甚不義矣。君其殺レ之。君曰。睹レ貌而相說者。人之情也。其錯レ

卷第四下

齊下

閔王下

孟嘗君の舍人、君の夫人と相愛する者あり。或ひと以て孟嘗君に聞して曰く、「君の舍人と爲つて、內夫人と相愛するは、亦甚だ不義なり。君其れ之を殺せ」君曰く、「貌を睹て相說ぶは人の情なり。其れ之を錯け、言ふ勿れ」と。居ること朞年、君、夫人を愛する者を召して、之に謂つて曰く、「子、文と游ぶこと久し。大官は未だ得可らず、小官は公又欲せじ。衛君は文と布衣の交なり。請ふ車馬皮弊を具へん。願はくは君此を以て衛君に從つて遊べ」と。衛に於て甚だ重んぜらる。齊・衛の交惡しきや、衛君甚だ天下の兵を約して以て齊を攻めんと欲す。

之勿レ言也。居葬年。君召下愛二夫人一者上而謂レ之曰。子與レ文游久矣。大官未レ可レ得。小官公又弗レ欲。衛君與レ文布衣交。請具二車馬皮幣一。願君以レ此從二衛君一遊。於レ衛甚重。齊衛之交惡。衛君甚欲下約二天下之兵一以攻上齊。是人謂二衛君一曰。孟嘗君不レ知二臣不肖一。以レ臣欺レ君。且臣聞齊衛先君。刑レ馬壓レ羊盟曰。齊衛後世無二相攻伐一。有二相攻伐者一。令二其命如レ此。今君約二天下之兵一以攻レ齊。是足下背二先君盟一。而欺二孟嘗君一也。願君勿二以レ齊爲レ心。君聽レ臣則可。不レ聽レ臣若。臣不肖也。臣輒以二頸血一濺二足下衿一。衛君乃止。齊人聞レ之曰。孟嘗君可レ謂二善爲レ事矣。轉レ禍爲レ功。

孟嘗君有二舍人一而弗レ說。欲レ逐レ之。魯連謂二孟嘗君一曰。猿獼猴錯レ木據レ水。則不レ若二魚鼈一。騏驥歷レ險乘レ危。則不レ如二狐狸一。曹沫之奮二三尺之劍一。一軍不レ能レ當。使下曹沫釋二其三尺之劍一。而操二銚鐏一。與二農人一居中壠畝之

是人衛君に謂つて曰く、「孟嘗君、臣の不肖を知らず、臣を以て君を欺けり。且つ臣聞く、齊・衛の先君、馬を刑し羊を壓して盟つて曰く、『齊・衛の後世相攻伐する無からん、相攻伐する者あらば、其命をして此の如くならしめん』と。今君天下の兵を約して、以て齊を攻めんとす。是れ足下先君の盟約に背いて、孟嘗君を欺く也。願はくは君齊を以て心と爲す勿れ。君、臣に聽かば則ち可、若し臣に聽かずんば、臣不肖也、臣輒ち頸血を以て足下の衿に濺がん」と。衛君乃ち止む。齊人之を聞いて曰く、『孟嘗君は善く事を爲すと謂ふ可し。禍を轉じて功と爲せり』と。

一 寨來　二 妾也。婢婦の通稱にて必ちずしも其妻をいふに非ず　三 告げて　四 誤也。すておけ　五 一年　六 田文卽ち孟嘗君の名の自稱　七 平民的の交際。官位の上下に拘ちずして平等の交際を爲すこと　八 皮は鹿皮、幣は幣に通ず束帛、初對面の進物也、一本幣を幣に作る　九 坊本「舍人遊於衛甚重」に作る　一〇 其時に此舍人が　一一 臣を賢也として君に薦めたるは君を欺く者也　一二 馬羊を殺して其血をすゝり以て相盟ふ也。壓は壓殺　一三 此馬羊の如く　一四 衛君孟嘗君と交り厚し、然るに今齊を攻むるは此れ孟嘗君を欺く也　一五 原文「不應臣若」は「若不應臣」の誤。一說には「若」を下に附けて、「臣に聽かずんば、臣の若（ゴト）きは不肖也」と讀む　一六 臣不肖にして爲すべき方法を知らず徒ち死を以て之を止めん

孟嘗君、舍人ありて說ばず、之を逐はんと欲す。魯連孟嘗君に謂つて曰く、猿獼猴も木を錯いて水に據らば、則ち魚鼈に若かず、騏驥も險を歷、危に乘らば、則ち狐狸に如かじ。曹沫が三尺の劍を奮へば、一軍當る能はざるも、曹沫をして其三尺の劍を釋てゝ、銚鐏を操り、農人と壠畝の中に居らしめば、則ち農夫に若かじ。故に物其の長ずる所を舍てゝ、其の短とする所に之かば、堯も亦及ばざる所あらん。今人を使うて能くせざれば、則ち之を不肖と謂ひ、人を敎へて能くせざれば、則ち之を拙と謂ひ、拙なればとて則ち之を罷め、不肖なればとて則ち之を棄て、人をして棄逐せられて、相與に處らずして、來り害して相報ぜしめば、豈に世の敎を立つるの首に非ざらんや。」嘗孟君曰く、「善し」と。乃ち逐はず。

一 猿獼猴　二 錯　三 騏驥　四 險を歷　五 銚鐏　六 壠畝　七 罷め　八 相報ぜしめば　九 豈に世の敎を立つるの首に非ざらんや

中。則不レ若二農夫一。故物舍二其所レ長。之二其所レ短。堯亦有レ所レ不レ及矣。今使レ人而不レ能。則謂二之不肖一。教レ人而不レ能。則謂二之拙一。拙則罷レ之。不肖則棄レ之。使下人有二棄逐一不二相與處一。而來害相報上者。豈非二世之立教首一也哉。孟嘗君曰。善。乃弗レ逐。

㊀ 巻仲連　㊁ 普通獨線に作る、さるの屬也　㊂ 千里の名馬　㊃ 巻の眞士、沫一に昧に作る　㊄ すきくは　㊅ 田畝　㊆ 其人が其事を能くやらざれば　㊇ 其棄逐されたる仇を返す　㊈ 世の人を容れざるの教へを立つるはじめと爲すに非ずや。安井息軒曰く、「不肖ヲ棄逐スレバ或ハ乘テ相害ス、故ニ古人ノ教ヲ立ツル、此等ヲ救恤スルヲ以テ旨ト爲ス也」

孟嘗君出行レ國。至レ楚。獻二象牀一。鄢之登徒直二使送レ之。不レ欲レ行。見二孟嘗君門人公孫戌一曰。臣鄢之登徒也。直レ送二象牀一。象牀之直千金。傷レ此若二髮漂一。賣二妻子一。不レ足レ償レ之。足下能使二僕無レ行。先人有二寶劍一。願得レ獻レ之。公孫戌曰。諾。入見二孟嘗君一曰。君豈受二楚象牀一哉。孟嘗君曰。然。公孫戌曰。臣願君勿レ受。孟嘗君曰。何哉。公孫戌曰。小國所三以皆致二相印於君一者。聞下君於レ齊。能振二達貧窮一。存中亡繼レ絶之義上。小國英傑之士。皆以二國事一

孟嘗君出でゝ國を行る。楚に至りしに、象牀を獻ず。鄢の登徒、使して之を送るに直り、行くを欲せず。孟嘗君の門人公孫戌に見えて曰く、「臣は鄢の登徒也。象牀を送るに直る。象床の直千金なり。此を傷くる髮漂の若くならば、妻子を賣るも之を償ふに足らじ。足下能く僕をして行く無からしめば、先人寶劍あり、願はくは之を獻ずるを得ん。」公孫戌曰く、「諾」と。入つて孟嘗君に見えて曰く、「君豈に楚の象牀を受けんか。」孟嘗君曰く、「然り。」公孫戌曰く、「臣願はくは君受くる勿れ。」孟嘗君曰く、「何ぞや。」公孫戌曰く、「小國の皆相印を致す所以は、君が

齊に於て、能く貧窮を振達し、亡を存し絶を繼ぐの義あるを聞けば也、小國英傑の士の、皆國事を以て君を累はすは、誠に君の義を說び、君の旅を慕へば也。今君楚に到つて象牀を受けば、未だ至らざる所の國、將た何を以てか君を待たんとする。臣戌願はくは君の受くる勿からんを。」孟嘗君曰く、「諾」と。公孫戌趨つて去り、未だ出でず、中閨に至る。君召して之を返して曰く、「子、文をして象牀を受くる無からしむるは、甚だ善し。今何ぞ足を擧ぐるの高く、志の揚れるや。」公孫戌曰く、「臣大喜三あり。之に重ぬるに寶劍一。」孟嘗君曰く、「何の謂ぞや。」公孫戌曰く、「門下百數あるも、敢て入つて諫むる莫く、臣獨り入つて諫む。臣の一喜也。諫めて聽かるゝを得たり。臣の二喜なり。諫めて君の過を止む。臣の三喜なり。象牀を輸すべき鄢の登徒行くを欲せず。戌に許すに先人の寶劍を以てせり。」孟嘗君曰く、「善し。之を受けたるか。」公孫戌曰く、「未だ敢てせず。」曰く、「急に之を受けよ」と。因て門版に書して曰く、「能く文の名を揚げ、文の過を止めて、

累レ君。誠説二君之義一。慕二君之廉一也。今君到レ楚而受二象牀一。所レ未レ至之國。將二何以待レ君。臣戍願君勿レ受。孟嘗君曰。諾。公孫戍趨而去。未レ出。至二中閨一。君召而返レ之曰。子教二文無レ受二象牀一。甚善。今何齊レ足之高。志之揭也。公孫戍曰。臣有二大喜三一。重レ之寶劒一。孟嘗君曰。何謂也。公孫戍曰。門下百數。莫二敢入諫一。臣獨入諫。臣一喜。諫而得レ聽。臣二喜。諫而止二君之過一。臣三喜。輸二象牀一。鄢之登徒不レ欲レ行。許レ戍以二先人之寶劒一。孟嘗君曰。善。受レ之乎。公孫戍曰。未レ敢。曰。急受レ之。因書二門版一曰。有下能揚二文之名一。止二文之過一。私得二寶於外一者上。疾入諫。

齊人有二馮諼一者。貧乏不レ能二自存一。使二人屬二孟嘗君一。願レ寄二食門下一。孟嘗曰。客何好。君。客無レ好也。曰。客何能。曰。客無レ能也。孟嘗君笑而受レ之曰。諾。左右以二君賤レ之也。食以二草具一。居有レ頃。倚レ柱彈二其劒一。歌曰。長鋏歸來乎。食無レ魚。左右以告。孟嘗君曰。食レ之。比二門下之魚客一。居有レ頃。復彈二其鋏一。歌曰。長鋏歸來乎。出無レ車。

私かに寶を外に得る者あらば、疾く入つて諫めよ」と。

❶ 孟嘗君他國に聚ね相たり、故に其國を遍行する也 ❷ 楚王象牙の箸子を獻ず ❸ 楚の都、宣徒は賤官の名正解に人名となすは不可なちん ❹ 象牀を孟嘗君に送る ❺ 漂一本標に作る、蓋し通用なちん、髮の毛の末卽ち微小の意 ❻ 亡父 ❼ 小國が何れも宰相の印を君に致したる譯は。一説には小國は大國に作らるべしといひ又一説には七雄の時秦楚以外は皆齊より小也、卽ち孟嘗君が今茲に巡遊し來りし國々を指して小國といふ也と ❽ 救ひにぎはして生計を立つべからしめ ❾ 廉潔、清廉 ❿ 宮中の小門 ⓫ 田文卽ち孟嘗君の名の自稱 ⓬ 意氣揚々として濶步して去る、得意の狀をいふ也 ⓭ 之に加ふるに ⓮ 闒君長曰く「戍ヲシテ愈ニ劒ヲ受ケシメ、而シテ門版ニ書スル者ハ後患ヲ長レザルヲ欲スル也」 ⓯ 田文卽ち孟嘗君の名の自稱

齊人馮諼といふ者あり、貧乏にして自存する能はず、人をして孟嘗君に屬せしめ、門下に寄食せんことを願ふ。孟嘗君曰く、「客何をか好む。」曰く、「客能くするなし。」孟嘗君笑つて之を受けて曰く、「諾」と。左右、君の之を賤しむを以て、食はしむるに草具を以てす。居ること頃くありて、柱に倚つて其劒を彈じて歌うて曰く、「長鋏歸來らんか、食ふに魚なし」と。左右以て告ぐ。孟嘗君曰く、「之に食せしむること、門下の魚客に比せよ」と。居ること頃くありて、復た其鋏を彈じて歌うて曰く、「長鋏歸來らんか。出づるに車なし」と。左右皆之を笑ひ、以て告ぐ。孟嘗君曰く、「之が爲めに駕すること、門下の車客に比せよ」と。是に於て其車に乘り其劒を揭げて、其友に過つて曰く、「孟嘗君我を客とす」と。後頃くありて、復た其劒鋏を彈じて歌うて曰く、「長鋏歸來らんか。以て家を爲むる無し」と。左右皆之を惡み、以爲らく貪りて足るを知らずと。孟嘗君問ふ、「馮公親ありや」と。對へて曰く、「老母あり」と。孟嘗君、人をして其の食を給せしめ、用乏しからしむる無し。是に於て馮諼復た歌はず。

❶ 諼は一に諠・喧に作る ❷ 自治 ❸ 囑也 ❹ 食客となる、仕へずして食するを謂ふ ❺ 中介する人に

左右皆笑之。以告孟嘗君曰。爲之駕。比門下之車客。於是乘其車。揭其劍。過其友曰。孟嘗君客我。後有頃。復彈其劍鋏而歌曰。長鋏歸來乎。無以爲家。安右皆惡之。以爲貪而不知足。孟嘗君問馮公有親乎。對曰。有老母。孟嘗君使人給其食用無使乏。於是馮諼不復歌。

馮諼の事を聞く也 ❸ 孟嘗君の侍臣 ❹ 笑つて受けたるをいふ ❺ 野菜の食膳、孟嘗君の厨には三列ありて、上客は肉を食し、中客は魚を食し、下客は菜を食す、今下客の待遇をせる也 ❻ 長劍、長鋏に託して自己の意をいふ也 ❼ 魚を食ふ客 ❽ 劍のつか、鋏の字は劍と劍把と兩義あり、彈ずるは劍把にて歌中の長鋏は長劍の義なちん ❾ 車を持ち之に乘る待遇の客に ❿ ずつと高く上の方に出してといふ意なちん ⓫ 客らしく待遇す

後孟嘗君出記。問門下諸客。誰習計會。能爲文收責於薛者乎。馮諼署曰。能。孟嘗君惟之曰。此誰也。左右曰。乃歌夫長鋏歸來者也。孟嘗君笑曰。客果有能也。吾負之未嘗見也。請而見之。謝曰。文倦於事。憒於憂。而性愚。沈於國家之事。閑於先生。先生不羞。乃有意欲爲收責於薛乎。馮諼曰。願之。於是約車治裝。載券契而行。辭曰。責畢收。以何市而反。孟嘗君曰。視吾家所寡有者。驅而之薛。

後、孟嘗君、記を出して門下の諸客に問ふ、誰か計會に習ひ、能く文の爲めに責を薛に收むる者ぞやと。馮諼署して曰く、「能くす」と。孟嘗君之れを怪しんで曰く、「此れ誰ぞや」と。左右曰く、「乃ち夫の長鋏歸來らんを歌ひし者也」。孟嘗君笑つて曰く、「客果して能あり。吾之に負きて未だ嘗て見ず」と。請うて之を見、謝して、曰く、「文、事に倦み憂に憒れ、而して性愚、國家の事に沈んで、罪を先生に開く。先生羞ぢず、乃ち爲めに責を薛に收めんと欲するに意あるか」。馮諼曰く、「之を願ふ」と。是に於て車を約へ裝を治め、券契を載せて行く。辭して曰く、「責畢く收めば、以て何を市うて反らん。」孟嘗君曰く、「吾が家に有ること寡ぞ所の者を視よ」と。驅りて薛に之き、吏をして諸民の當に償ふべき者を召さしむ。悉く來つて券を合す。券偏く合ふ。起ちて命を矯め、責を以て諸民に賜ひ、因て其券を燒く。民、萬歲を稱す。長驅して齊に到り、晨にして見えんを求む。孟嘗君其疾きを怪しむ。衣冠して之を見て曰く、「責畢く收めたりや。來ること何ぞ疾き。」曰く、「收め畢れり。」「以て何をか市つて反れる。」馮諼曰く、「君云へり、『吾が家に有る寡き所の者を視よ』と。臣竊かに計るに、君の宮中、珍寶を積み、狗馬外廐に實ち、美人下陳に充てり。君が家に有る寡き所の者は、以へらく義耳。竊かに以て君の爲めに義を市へり。」孟嘗君曰く、「義を市ふとは奈何。」「今君、區區の薛を有ち、愛撫して其民を子とせず、因て之に賈利す。臣竊かに君の命を矯め、責を以て諸民に賜ひ、因て其券を燒きしに、民、萬歲を稱せり。乃ち臣、君

使三吏召二諸民當レ償者一悉來合レ券。券徧合。起燔レ命以レ責賜二諸民一。因燒二其券一。民稱二萬歲一。長驅到レ齊。長而求レ見。孟嘘君怪二其疾一也。衣冠而見レ之曰。責畢收乎。來何疾也。曰。收畢矣。以何市而反。馮諼曰。君云。視二吾家所レ寡レ有者一。臣竊計。君宮中積二珍寶一。狗馬實二外廐一。美人充二下陳一。君家所レ寡レ有者。以義耳。竊以爲レ君市レ義。孟嘘君曰。市レ義奈何。曰。今君有二區區之薛一。不二拊愛子二其民一。因而賈二利之一。臣竊矯二君命一。以レ責賜二諸民一。因燒二其券一。民稱二萬歲一。乃臣所二以爲レ君市レ義也。孟嘘君不レ說曰。諾。先生休矣。

後朞年。齊王謂二孟嘘君一曰。

(一)後朞年、齊王孟嘘君に謂つて曰く、「寡人敢て先王の臣を以て臣とせじ」と。孟嘘君說ばずして曰く、「諾。先生休せよ」と。

● 疑也、嘘附 ● 會計、計算 ● 債也、領地訴に往きて年來人民に貸付けたる債務の返濟を遲(ノガ)れ居る者より之を取立つる者は誰かと也 ● 記に書する也 ● 自分の推測通り ● 職事に勞れ前途の心配に心亂れて ● 僕は驅 ● 後驅して ● 今日まで對面せざりしをいよ 〔一〕 わりよ。債權の證也 〔二〕 いよ〳〵 出發せんとするに際して嘘乞ひして曰く 〔三〕 其取立てたる財にて何を土產に買ひ求めて歸らんかと也 〔四〕 債券を負へる者 〔五〕 わりよ卽ち木札にて造れる契約書を刀にて割き、彼此各々一を收め、債務を督促する場合に之を照し合はする也 〔六〕 わりよの引合せがすつかりすみたる後 〔七〕 孟嘘君の命也と稱し 〔八〕 孟嘘君を祝する也 〔九〕 重復愛行、行いて留まらざるをいよ 〔一〇〕 早朝 〔一一〕 大切なる使の事故特に正裝にて對面する也 〔一二〕 後宮 〔一三〕 小さき 〔一四〕 拊は撫也 〔一五〕 富を求むること賈人の利を貪るが如し

寡人不レ敢以二先生之臣一爲レ臣。孟嘘君就二國於薛一。未レ至百里。民扶レ老攜レ幼。迎二君道中一。孟嘘君顧謂二馮諼一。先生所二爲レ文市レ義者一。乃今日見レ之。馮諼曰。狡兎有二三窟一。僅得レ免二其死一耳。今君有二一窟一。未レ得二高レ枕而臥一也。請爲レ君復鑿二二窟一。孟嘘君予二車五十乘一。金五百斤一。西遊二於梁一。嘘君、國に薛に就く。未だ至らざる百里、民、老を扶け幼を攜へて、君を道中に迎ふ。孟嘘君、顧みて馮諼に謂ふ、「先生が文の爲めに義を市へる所のもの、乃ち今日之を見る」と。馮諼曰く、「狡兎三窟あり、僅かに其死を免かるゝを得る耳。今君一窟あるのみ、未だ枕を高うして臥するを得ず。請ふ君の爲めに復た二窟を鑿たん」と。孟嘘君、車五十乘金五百斤を予ふ。西、梁に遊んで、惠王に謂つて曰く、「齊、其の大臣孟嘘君を諸侯に放つ。諸侯の先づ之を迎へん者は、富みて兵强からん」と。是に於いてか、梁王上位を虛しうし、故の相を以て上將軍とし、使者を遣はし、黃金千斤、車百乘もて、往いて孟嘘君を聘せしむ。馮諼先づ驅せて、孟嘘君を誡めて曰く、「千斤は重幣なり、百乘は顯使なり。齊其れ之を聞かん」と。梁の使三たび反る。孟嘘君固く辭して往かず。齊王之を聞いて、君臣恐懼し、太傅を遣はし、黃金千斤、文車二駟、服劍一を賫らさしめ、封書して孟嘘君に謝して曰く、「寡人不祥にして宗廟の祟を被むり、諂諛の臣に沈み、罪を君に開く。寡人は

謂二惠王一曰。齊放二其大臣孟嘘君於諸侯一。諸侯先迎レ之者。富而兵強。於レ是梁王虛二上位一。以二故相一爲二上將軍一。遣二使者一。黃金千斤。車百乘。往聘二孟嘘君一。馮諼先馳。誡二孟嘘君一曰。千金重幣也。百乘顯使也。齊其聞レ之矣。梁使三反。孟嘘君固辭不レ往也。齊王聞レ之。王臣恐懼。遣二太傅一。賫二黃金千斤。文車二駟。服劍一。封書謝二孟嘘君一曰。寡人不祥。被二於宗廟之祟一。沈二於諂諛之臣一。開二罪於君一。寡人不レ足レ爲也。願君顧二先王之宗廟一。姑反レ國統二萬人一乎。馮諼誡二孟嘘君一曰。願請二先王之祭器一。立二宗廟於薛一。廟成。還報二孟嘘君一曰。三窟已就。君姑高レ枕爲レ樂矣。孟嘘君爲レ相數十年。無二纖介之禍一者。馮諼之計也。

爲すに足らず。願はくは君、先王の宗廟を顧み、姑く國に反つて萬人を統べんか」と。馮諼、孟嘘君を誡めて曰く、「願はくは先王の祭器を請うて、宗廟を薛に立てよ」と。廟成る。還つて孟嘘君に報じて曰く、「三窟已に就る。君姑く枕を高うして樂を爲せ」と。孟嘘君相たること數十年、纖介の禍なきものは、馮諼の計也。

㊀ 一年 ㊁ 孟嘘君の相たるを免じて國に就かしめんとて斯くいふ也 ㊂ 先日は悅ばざりしが成程今日よく相分りたり ㊃ 此所の文出典となり身を藏するの固き喩にいふ ㊄ 其使者よりも先に ㊅ 聞知して之を止めんと也 ㊆ 往復す。使者の度々來りたるをいふ ㊇ 彩色を施したる車二乘 ㊈ 王自ら佩ぶる所の劍。寶也 ㊉ 「封書一」に作り、上に掛りて「封書一を賫さしめ」と訓ず ㊋ 不吉、不幸 ㊌ 謹めて國に就かしめしをいふ。蓋し此時既に孟嘘君は齊王に召されて都の臨淄に在りし也 ㊍ 薛の民親戚すこれ一、齊王敬懼して其位に復すこれ二、宗廟を薛に立つるこれ三 ㊎ 微少

孟嘘君、齊に逐はれて復た反る。譚拾子之を境に迎へ、孟嘘君に謂つて曰く、「君、齊の士大夫を怨むる所ある無きを得んや。」孟嘘君曰く、「有り。」「君、滿意せば之を殺さんか。」孟嘘君曰く、「然り。」譚拾子曰く、「事必ず至る有り、理固より然る有り。君之を知るか。」孟嘘君曰く、「知らず。」譚拾子曰く、「事の必ず至る者は死也。理の固より然る者は、富貴なれば則ち之に就き、貧賤なれば則ち之を去る。此れ事の必ず至り、理の固より然る者なり。請ふ市を以て譬へん。市は朝には則ち滿ち、夕には則ち虛し。朝に市を愛して、夕に之を憎むに非ず。求むるもの存するが故に往き、亡きが故に去るなり。願はくは君怨むる勿れ」と。孟嘘君、乃ち怨むる所の五百牒を取り、之を削り去りて敢て以て言を爲さざりき。

㊀ 譚に ㊁ 齊人ならん ㊂ 意を得ば ㊃ 人多く就き從ひ ㊄ 市場 ㊅ 人多く集まり ㊆ 人も居らず ㊇ 札也。怨む所の人名を書きたるもの

孟嘘君逐二於齊一而復反。譚拾子迎二之於境一。謂二孟嘘君一曰。君得レ無レ有レ所レ怨二於齊士大夫一。孟嘘君曰。有。君滿意殺レ之乎。孟嘘君曰。然。譚拾子曰。事有二必至一。理有二固然一。君知レ之乎。孟嘘君曰。不レ知。譚拾子曰。事之必至者死也。理之固然者。富貴則就レ之。貧賤則去レ之。此事之必至。理之固然者。請以レ市譬。市朝則滿。夕則虛。非二朝愛レ市而夕憎レ

之也。求存故往。亡故去。願君勿怨。孟嘗君乃取二所怨五百牒一削二去之。不二敢以爲一言。

蘇秦自燕之齊。見二於華章南門。齊王曰。喜。子之來也。秦使二魏冉致一帝。子以爲何如。對曰。王之問臣也卒。而患之所二從生一者微。今不聽。是恨秦也。聽之。是恨二天下一也。不如聽之以卒秦。勿二庸稱一也。以爲中天下。秦稱之。天下聽之。王亦稱之。先後之事。帝名爲無傷也。秦稱之。而天下不聽。王因勿稱。其於以收二天下一。此大資也。

蘇秦、燕より齊に之き、華章の南門に見ゆ。齊王曰く、「嘻、子の來ることや。秦、魏冉をして帝を致さしむ。子以て何如と爲す。」對へて曰く、「王の臣に問ふや卒かなり、而も患の從て生ずる所は微なり。今聽かずんば、是れ秦に恨まれ、之を聽かば、是れ天下に恨まれん。之を聽いて以て秦を卒へ、庸て稱する勿くして、以て天下の爲めにせんに如かず。秦之を稱して天下之を聽かば、王亦之を稱せよ。先後の事は帝名に傷ふなしと爲す。秦之を稱して天下聽かずんば、王因て稱する勿れ。其の以て天下を收むるに於て、此れ大資也。」

(一) 門の名　(二) 嘻は痛嘆の辭。蘇秦の來遊の晚きを傷んでいふ也と　(三) 帝號を齊王に贈り帝と稱せしむ。史記に據するに、秦王西帝と稱し、齊王東帝と稱す　(四) 急遽輕卒にて思慮を用ひず　(五) 隱微にして見難し　(六) 秦の帝事を達せしめ帝號を受けてその間の關係を終へ　(七) 用に適ず。其帝號を用ひ稱する事なく　(八) 天下は齊の帝と稱するを欲せず、而して今以て稱する無きは是れ天下の爲めにする也　(九) 帝號を　(一〇) ゆるす　(一一) 稱する

に先後ありとも帝たる上には差支無しと也　(一二) 天下の欲する所に從ふのが天下を收合する一番のもとでぞと也

蘇子謂二齊王一曰。齊秦立爲二兩帝一。王以天下爲尊秦乎。且尊齊乎。王曰。尊秦。釋帝。則天下愛齊乎。且愛秦乎。王曰。愛齊而憎秦。兩帝立。約伐趙。孰與伐宋之利一也。王曰。不如伐宋。對曰。夫約與秦爲帝。而

蘇子、齊王に謂つて曰く、「齊・秦立つて兩帝と爲らば、王以て天下秦を尊ぶと爲すか、且た齊を尊ばんか。」王曰く、「秦を尊ばん。」「帝を釋てば、則ち天下齊を愛せんか、且た秦を愛せんか。」王曰く、「齊を愛して秦を憎まん。」「兩帝立つて、約して趙を伐つは、宋を伐つの利に孰れぞ。」王曰く、「宋を伐つに如かず。」對へて曰く、「夫れ約して秦と與に帝と爲らば、天下獨り秦を尊んで齊を輕んじ、齊、帝を釋てば、則ち天下齊を愛して秦を憎まん。趙を伐つは宋を伐つの利なるに如かず。故に臣願はくは、王明かに帝を釋てゝ以て天下に就き、約に倍き秦を儐け、重を爭はしむる勿くして、王其の間を以て宋を舉げられんことを。夫れ宋を有たば、則ち衛の陽城危く、淮北を有たば、則ち楚の東國危ふく、濟西を有たば、則ち

天下獨尊レ秦而輕レ齊。齊釋レ帝。則天下愛レ齊。而憎レ秦。伐レ趙不レ如二伐レ宋之利一。故臣願王明釋レ帝以就二天下一。倍レ約擯レ秦。勿レ使レ爭レ重。而王以二其閒一舉レ宋。夫有レ宋。則衛之陽城危。有二淮北一。則楚之東國危。有二濟西一。則趙之河東危。有二陰平陸一。則梁門不レ啓。故釋レ帝而貳レ之以二伐レ宋之事一。則國重而名尊。燕楚以レ形服。天下不二敢不レ聽。此湯武之舉也。敬レ秦以爲レ名。而後使二天下一憎レ之。此所レ謂以レ卑易レ尊者也。願王之熟二慮之一也。

趙の河東危く、陰・平陸を有たば、則ち梁門啓けじ。故に帝を釋てゝ之れに貳ふるに宋を伐つの事を以てせば、則ち國重くして名尊く、燕・楚は形を以て服し、天下敢て聽かずんばあらじ。此れ湯・武の舉也。秦を敬うて以て名を爲し、而して後天下をして之を憎ましむ。此れ所謂卑を以て尊に易ふる者也。願はくは王の之を熟慮せられんことを。」

一 帝號を捨てて稱せず　二 對の字は衍ならん　三 天下の欲する所に就き　四 秦の約に背き、天下と俱に秦を攻くる時は、秦は孤立して齊と重きを爭ふ能はず、齊は其間隙を以て來を取るべき也　五 大梁の門　六 加也　七 其形勢　八 殷の湯王、周の武王　九 名義を立て。卽ち秦をして獨り帝號を稱せしむるをいふ　一〇 卑をすゝて以て自ら卑しくし、反つて天下の爲めに尊ばるゝを謂ふ

蘇子說二齊閔王一曰。臣聞用レ兵而喜レ先二天下一者憂。約結而喜レ主レ怨者孤。夫後起者。藉也。而遠レ怨者。時也。是以聖人從レ事。必藉二於權一。而務興二於時一。夫權藉者。萬物之率也。而時勢者。百事之長也。故無二權藉一。倍二時勢一。而能事成者寡矣。今雖三干將莫邪一。非レ得二人力一。則不レ能二割斷一矣。堅箭利金。不レ得二弦機之

蘇子、齊の閔王に說いて曰く、「臣聞く、兵を用ひて天下に先だつを喜む者は憂へ、約結んで怨を主どるを喜む者は孤なりと。夫れ後に起る者は藉る也、怨に遠ざかる者は時也。是を以て聖人の事に從ふや、必らず權を藉り、務めて時に興る。夫れ權の藉るは萬物の率にして、時の勢は百事の長也。故に權の藉る無く、時の勢に倍きて、能く事成る者は寡し。今干將・莫邪と雖も、人力を得るに非ずんば、則ち割斷する能はず、堅箭利金も、弦機の利を得ずんば、則ち遠く殺す能はじ。矢銛からざるに非ず、而して劍利からざるに非ず。何となれば則ち權の藉る在らざればなり。何を以てか其然るを知るや。昔は趙氏、衛を襲ひ、車舍して傳を休めず。衛の國城割き平げられ、衛の八門は土がれ、而して二門は墮らる。此れ亡國の形也。衛君跣行して、魏に告溯し。魏王身ら甲を被むり劍を底ぎ、趙に挑んで戰を索む。邯鄲の中驚せ、河山の閒亂る。衛、是の藉を得るや、亦餘甲を收めて、北面して剛平を殘ひ、中牟の郭を墮つ。衛、趙より强かりしに非ず。之を譬へば、衛は弦機也。力を魏に藉りて、河東の地を有ち、趙

利。則不能遠殺矣。矢非不銛。而劍非不利也。何則權藉不在焉。何以知其然也。昔者趙氏襲衛。車舍人不休傳。衛國城割平。衛八門土。而二門墮矣。此亡國之形也。衛君跣行。告急於魏。魏王身被甲底劍。挑趙索戰。邯鄲之中驚。河山之閒亂。衛得是藉也。亦收餘甲。

氏懼る。楚人趙を救うて魏を伐ち、州の西に戰つて、梁門に出で、軍、林中に舍し、馬、大河に飲ふ。趙、是の藉を得るや、亦魏の河北を襲ひ、棘蒲を燒き、黃城を隊せり。故に剛平の殘はれ、中牟の墮たれ、黃城の隊され、棘蒲の燒かるゝ、此れ皆趙・魏の欲せるに非ず。然れども二國勸めて之を行ひしものは何ぞや。衛、時に明かに、權を藉りたれば也。

(一)約を爲して與國と結び人を伐てば人必ず怨む、固るに其約の主となりて怨みの衛に當る者は遂に孤立無援となる　(二)權を藉る　(三)時の來會に應じて興る　(四)天下の權力を藉り、湯めて時節を待ちて起る　(五)權を藉るの倒語也　(六)帥に同じ。權を藉りて事を爲すは高物に長たる所以にて　(七)時の來るに應じて其勢に乘ず　(八)二つの良劍の名　(九)さきやぶる　(一〇)鋭きやじり　(一一)弓弦　(一二)遠く迄射て人を殺す　(一三)利也　(一四)原文の「人」は「而」の誤なちん。車中に舍して傳馬を休めず、趙軍急行して須臾も止まらざるをいふ。其他數說あれど今一に正解に從ふ　(一五)土は社也。門社がれて通ぜざる也　(一六)大急ぎではだして行く　(一七)遁は隱也。告げ訴ふ、卽ち救を乞ふ　(一八)よろひ　(一九)延に同じ、延也　(二〇)趙の都　(二一)亂れ亂す。驚きさわぐ也　(二二)魏の力を藉る　(二三)殘兵を收集して更に趙を攻む　(二四)次の中牟と共に趙の邑　(二五)勝利を得て堂々と陣舍したる形容なちん　(二六)楚の力を藉る　(二七)隱に通ず　(二八)力めて之を決行したる所以は　(二九)時を見るに　(三〇)原文「權之藉」は「藉於權」と同じ、「權をこれ藉り」と訓ず

而北面殘二剛平。墮二中牟之郭。衛非強二於趙一也。譬之。衛矢而魏弦機也。藉二力於魏一。而有二河東之地一。趙氏懼。楚人救趙而伐二魏一。戰二於州西一。出二於梁門一。軍舍二林中一。馬飲二於大河一。趙得二是藉一也。亦襲二魏之河北一。燒二棘蒲一。隊二黃城一。故剛平之殘也。中牟之墮也。黃城之隊也。棘蒲之燒也。此皆非二趙魏之欲一也。然二國勸行之者。何也。衛明二於時一。權之藉也。

今世之爲國者不然矣。兵弱而好敵强。國罷而好衆怨。事敗而好鞠之。兵弱而好敵大。事敗而好長詐。行二此六者一。而求霸則遠矣。臣聞善爲國

今世の國を爲むる者は然らず。兵弱きに而も敵の强きを好み、國罷れたるに而も衆の怨を好み、事敗るゝに而も之れを鞠むるを好み、兵弱きに而も人に下るを憎み、地狹きに而も大に敵するを好み、事敗るゝに而も詐を長すを好む。此の六者を行うて、霸たるを求む、則ち遠し。臣聞く、善く國を爲むる者は、民の意に順ひて、兵の能を料り、然して後天下に從ふと。故に約して人の爲めに怨を主らず、伐つて人の爲めに强を挫かず。此の如くなれば、則ち兵費えず、權輕からず、地廣む可く、欲成す可し。昔は齊の韓・魏と楚を伐つや、戰甚だ疾きに非ず、分

者。順二民之意一。而料二兵之能一。然後從二於天下一。故約不二爲レ人主レ怨。伐不二爲レ人挫レ强。如レ此。則兵不レ費。權不レ輕。地可レ廣。欲可レ成也。昔者齊之與二韓魏一伐レ楚也。戰非二甚疾一也。分地又非レ多二韓魏一也。然而天下獨歸二咎於齊一者。何也。以下其爲二韓魏一主也怨也。且天下徧用レ兵矣。齊燕戰。而趙氏「中山。秦楚韓魏不レ休。而宋越專用二其兵一。此十國者。皆以二相敵一爲レ意。而獨舉二心於齊一者。何也。約而好レ主レ怨。伐而好レ挫レ强也。且夫强大之禍。常以レ王レ人爲レ意也。夫弱小之殃。常以レ謀レ人爲レ利也。是以大國危。小國滅也。大國之計。莫レ若三後起而重伐二不義一。夫後起之藉。

地又韓・魏より多かりしに非ず。然り而して天下獨り咎を齊に歸せしものは何ぞや。其の韓・魏の爲に怨を主りたるを以て也。且つ天下徧ねく兵を用ふ。齊・燕戰つて、趙氏は中山を兼ね、秦・楚戰ひ、韓・魏休せずして、宋・越專ら其兵を用ふ。此の十國は、皆相敵するを以て意となす、而も獨り心を齊に擧ぐるものは何ぞや。約して怨を主るを好み、伐つて强を挫くを好めば也。且つ夫れ强大の禍は、常に人に王たるを以て意とするにあり。夫れ弱小の殃は、常に人を謀るを以て利とするにあり。是れを以て大國は危く、小國は滅ぶ。大國の計は、後に起つて重く不義を伐つに若くは莫し。夫れ後に起るの藉は、與多くして兵勁し。則ち是れ衆强を以て寡に敵する也。兵必ず立たん。天下の心を塞がざるを事めば、則ち利必ず附かん。大國此を行はゞ、則ち名號裏らずして至り、霸王爲さずして立たん。小國の情は、謹靜にして諸侯を信むこと寡きに如くは莫し、謹靜なれば、則ち四鄰反かず、諸侯を信むこと寡くば、則ち天下賣らざらん。外賣

らず、內反かずんば、則ち稸積朽腐して用ひられず、幣帛燒蠹して服せられじ。小國此に道らば、則ち祠らずとも福あり、貸らずとも足るを見ん。故に曰く、仁を祖とする者は王たり、義を立つる者は霸たり、兵を用ひて窮むる者は亡ぶと。何を以てか其然るを知るや。昔し吳王夫差は、强大を以て天下の先と爲り、郢を襲ひ、而して越を棲ましめ、身諸侯の君を從へしも、而も卒に身死し國亡びて、天下の戮と爲れるものは何ぞや。此れ夫差平居して王たらんを謀り、强大にして天下に先だたんを喜めるの禍なり。昔は萊・莒謀を好み、陳・蔡詐を好み、莒は越を恃んで滅び、蔡は晉を恃んで亡びたり。此れ皆內詐を長し、外諸侯を信めるの殃也。此に由て之を觀れば、則ち强弱大小の禍、前事に見る可し。語に曰く、騏驥の衰ふるや、駑馬之に先ち、孟賁の倦るゝや、女子之に勝つと。夫れ駑馬女子は、筋骨力勁、騏驥孟賁に賢れるに非ず。何となれば則ち後に起るの藉なれば也。

與多而兵勁。則是以二衆強一敵二罷寡一也。兵必立也。事レ不レ塞二天下之心一。則利必附矣。大國行レ此。則名號不レ攘而至。霸王不レ爲而立矣。小國之情。莫レ如二謹靜而寡一信二諸侯一。謹靜。則四鄰不レ反。寡レ信二諸侯一。則天下不レ實。外不レ實內不レ反。則稽積朽腐而不レ用。幣帛燔蠹而不レ服矣。小國道レ此。則不レ祠而福矣。不レ貸而見レ足矣。故曰。祖レ仁者王。立レ義者霸。用レ兵窮者亡。何以知二其然一也。昔吳王夫差以二強大一爲二天下先一。襲レ郢而棲レ越。身從二諸侯之君一。而卒身死國亡。爲二天下戮一者。何也。此夫差平居而謀レ王。強大而寡レ先二天下之禍一也。昔者萊莒好レ謀。陳蔡好レ詐。莒恃レ越而滅。蔡恃レ晉而亡。此皆內長レ詐。外信二諸侯一之殃也。由レ此觀レ之。則強弱大小之禍。可レ見二於前事一矣。語曰。騏驥之衰也。駑馬先レ之。孟賁之倦也。女子勝レ之。夫駕駑女子筋骨力勁。非レ賢於騏驥孟賁一也。何則後起之藉也。

一 妄りに他と戰ひ人を苦しめて也　二 必ず成し遂げんとす　三 益也、事敗れながら益々詐謀を好み用ふと也　四 及びも付かぬ事也　五 天下を經略する事に從事す　六 韓魏よりも疾く進み攻めし譯にあらず、地を分割するにも等分したり　七 鬭若長曰く「疑フラクハ越マサニ衞ニ作ルベシ、宋衞ハ四國ノ威無シ、故ニ能ク專ラ其兵ヲ用フルヲ得ルヲ言フ」　八 吾に對つてのみ攻擊する　九 强大なる者　一〇 正解には「上」に作るべしといふ　一一 輕々しくせぬをいふ、不義をば伐つべしと雖も亦輕易すべからずと也　一二 後に起るに藉れば　一三 與國　一四 つかれたる少歌　一五 兵權必ず立つ　一六 事は勸といふ意、天下歸往の心を塞がざるを以て勸めとする也　一七 取也　一八 武力など用ひて自ら之を爲さんとせずとも自然に　一九 心用ひ　二〇 欺かざらん　二一 蓄（積みたる糧食は腐る程多くたつて用ひきれず　二二 燔は燔に同じ氣の鬱する也、帛は蠹れて虫ばむ程多くありて用ひきれざらん　二三 由也、此の如きを國是として守る時は　二四 本　二五 楚の都　二六 又越王を會稽山に棲ましめ　二七 平然として居て仁に本づかず義を立てず只々　二八 國の名　二九 國の名　三〇 千里の名馬　三一 古への勇士の名

今天下之相與也。不二並滅一有。而案レ兵而後起。寄レ怨而誅二不直一。微用レ兵而寄二於義一。則翻二天下一。可二蹋足而須一也。明二於諸侯之故一。察二於地形之理一者。不二約親一不二相質一而固。不レ趨而疾。衆事而不レ反。交割而不二相憎一。俱强而加以レ親。何則形

今天下の相與けるや、(一)竝びに滅し有たず。(二)而し兵を案じて後に起り、怨を寄せて不直を誅し、(三)微に兵を用ひて義に寄るときは、則ち天下に霸たらんこと、(四)蹋足して須つ可きなり。諸侯の故に明かに、(五)地形の理を察する者は、(六)約親せず相質せず(七)して固く、(八)趨さずして疾く、(九)衆事にして反かず、(一〇)交〻割いて相憎まず、(一一)俱に强くして加ふるに親を以てす。何となれば則ち形ひ憂を同じうして、(一二)兵、利に趨けば也。何を以てか其然るを知るや。昔は燕・齊、(一三)桓の曲に戰つて、燕勝たず、十萬の衆盡き、胡人燕の樓煩の數縣を襲ひて、其牛馬を取れり。夫れ胡の齊に與ける、素より親しきに非ず。而れども兵を用ふ。又約質して燕を謀れるにも非ず。然りして相趨るより甚だしかりしものは何ぞや。(一四)形ひ憂を同じうして、(一五)兵、利に趨けばなり。此に由て之を觀れば、同形に約せば、則ち利長く、(一六)後に起らば、則ち

同レ憂。而兵趨レ利也。何以知二其然一也。昔者燕齊戰二於桓之曲一。燕不レ勝。十萬之衆盡。胡人襲二燕樓煩數縣一。取二其牛馬一。夫胡之與レ齊。非二素親一也。而用レ兵。又非二約質一。而謀レ燕也。然而甚二於相趨一者。何也。何則形同レ憂。而兵趨レ利也。由レ此觀レ之。約二於同形一。則利長。後相。則諸侯可レ趨レ役

諸侯役に趨る可し。故に明主察相、誠に霸王を以て志を爲さんと欲せば、則ち戰功は先とする所に非じ。戰は國の殘にして都縣の費なり。殘費已に先だつて、能く諸侯を從ふる者は寡し。彼の戰なる者の殘たるや、士、戰を聞けば、則ち私財を輸して軍市を富し、飲食を輸して死士を待ち、轅を折つて之に炊ぎ、牛を殺して士に觴せしむ。則ち是れ君を路らすの道也。中人は禱祝し、君翳釀し、通都小縣は社を置き、市あるの邑、事を止めて王に奉ぜざる莫し。則ち此れ中を虛しうするの計也。

一 與は如也、相類するをいふ　二 彼此竝びに之を滅して以て其地を有たず　三 正解によりて「而」を「知」と讀む、若也一本「能」に作り上文を「不二幷滅一」にて句とし、次の「有」は下文の「寄二於義一」に掛ると爲す　四 怨を人に託して自ら怨を主ちず　五 隱微に、卒暴ならず　六 蹈は伸さゞる也、みながらにして待つべきを謂ふ　七 事故事變　八 互に人質を取りかはす　九 促也、督促せずとも事は迅速に運ぶ　一〇 衆人多事なれども一致でし相反かず　一一 彼此互に地を割きて　一二 相互の形勢上　一三 相山の山曲　一四 約親相質　一五 蕪を伐つの迅速なりしをいふ　一六 此上にある原文「何則」は衍として削る　一七 長久也　一八 後に起る苦は天下の罪に從ふ故に諸侯趨りて我使役たちん　一九 明相　二〇 そこなひとつひえと　二一 者の字は衍と云ふ　二二 正解には衍也。故明主察相。誠欲下以二霸王一爲ㇾ志。則戰攻非ㇾ所ㇾ先。戰者。國之殘也。而都縣之費也。殘費已先。而能從二諸侯一者寡矣。彼戰者之爲ㇾ殘也。士聞ㇾ戰。則輸二私財一而富二軍市一。輸二飲食一而待二死士一。令二折ㇾ轅而炊ㇾ之。殺ㇾ牛而觴ㇾ士。則是路ㇾ君之道也。中人禱祝。君翳釀。通都小縣置ㇾ社。有ㇾ市之邑。莫ㇾ不二止ㇾ事而奉ㇾ王。則此虛ㇾ中之計也。

二三 疲勞の義也　二四 國の中に止まる人　二五 行く者の爲めに祈る　二六 開君長は當に祭懷に作るべし亦翳說の事也といひ、安井息軒は翳は舞者の持つ所、君酒を釀し舞を奏し以て戰勝を祈る也といへり　二七 通都は大都、舉國一致して戰勝を祈るをいふ　二八 皆其職事を止めて王事に奉ず　二九 國中を盡耗疲弊せしむる論といひ一說には上の誤といふ、姑く疑を存す　三〇 軍卒の誤ならんといふ　三一 士の爲めに　三二 酒を飲ましむ　三三 疲勞の義也　三四 國の中に止まる人　三五 行く者の爲めに祈る　三六 開君長は當に祭懷に作るべし亦翳說の事也といひ、安井息軒は翳は舞者の持つ所、君酒を釀し舞を奏し以て戰勝を祈る也といへり　三七 通都は大都、舉國一致して戰勝を祈るをいふ　三八 皆其職事を止めて王事に奉ず　三九 國中を盡耗疲弊せしむる論

夫戰之明日。屍レ死扶レ傷。雖レ若レ有レ功也。軍出費レ中。哭泣則傷二主心一矣。死者破レ家而葬。夷傷者空レ財而共レ藥。完者內酺而華樂。故其費與二

夫れ戰の明日、死を屍め傷を扶く、功あるが若しと雖も、軍出でゝ中を費す、哭泣すれば則ち主の心を傷る。死せる者は家を破つて葬むり、夷傷せる者は財を空しうして藥を共し、完き者は內に餔して華樂す。故に其費と死傷者と鈞し。故に民の費す所、十年の田にして償はず。軍の出づる所、矛戟折れ、鐶弦絕え、弩を傷ふ車を破り、馬を罷らし、之を亡失する大半なり。甲兵の具は、官の私出する所也、士大夫の置す所、厮養の士の竊む所、十年の田にして償はざる也。天下

死傷者一鈞。故民之所レ費也。十年之田而不レ償也。軍之所レ出。矛戟折。纛弦絕。傷レ弩破レ車罷レ馬。亡二失之一太半。甲兵之具。官之所二私出一也。士大夫之所レ匿。斷養士之所レ竊。十年之田而不レ償也。天下有二此再費一者。而能從二諸侯一者寡矣。攻レ城之費。百姓理二禮蔽一。舉二衝櫓一。家雜總。身此の再費ある者にして、能く諸侯を從へし者寡し。攻城の費、百姓禮蔽を理め、衝櫓を舉げ、家雜總して、身穴に屈し、吏は刀金に罷れて、士は士功に困しみ、將は甲を釋かず、弩數にして能く城を拔くものを亟かなりと爲す耳。上は敎に倦み、士は兵を斷つ。故に三たび城を下して、而も能く敵に勝てる者寡し。故に曰く、彼の戰攻なる者は、先とする所に非ずと。何を以てか其然るを知るや。昔し智伯瑤は范・中行氏を攻めて、其君を殺し、其國を滅ぼし、又西、晉陽を圍み、二國を呑併して、一主を憂へしむ、此れ兵を用ふるの盛なる也。然り而して伯智卒に身死し國亡びて、天下の笑と爲れるものは何の謂ぞや。兵、戰攻を先として、二子を滅ぼせるの患也。昔は中山悉く起つて燕・趙を迎へ、南、長子に戰つて、趙氏を敗り、北、中山に戰つて、燕軍に克ち、其將を殺せり。夫れ中山は千乘の國也。而れども萬乘の國二に敵し、再戰して比りに勝つ。此れ兵を用ふるの上節也。然り而して國遂に亡び、君齊に臣となりしものは何ぞや。戰攻を齊まざりしの患也。此に由て之れを觀れば、則ち戰攻の敗、前事に見る可し。

一 死者の屍を取かたづける　二 國家の財政を震撼せしむ　三 家産を傾けて　四 爽も亦傷也。負傷　五 供也　六 飲宴を張りてもてり樂む　七 田作。力耕して得たる米　八 ほこ　九 弓弦　一〇 正解には給出の誤かといふ。一說には下の二つと相對し、係官の私かに出して私用に供する所と解す　一一 斯は薪を折く者、養は馬を養ふ者。士は恐らく書の誤ならん　一二 者の字衍といふ　一三 櫓は矢を禦ぐ幕を掛けた車、蔽は楯　一四 衝は敵城を衝きこはす大車、櫓は高巢車　一五 家人總出にて　一六 塹壕。正解は屈を掘に通ずとす、卽ち「身穴を屈す」と訓ずる也　一七 原文「中」は「吏」の誤　一八 刀は錢也。軍用金の調達に疲るるをいふ　一九 土木の工事　二〇 ひと月又は數月　二一 敎に倦みて爲さざる故民道を知らず　二二 武器をすてて用ひず。一說に士たる者一に兵事に斷決して禮を問はず所謂武斷の義とす　二三 窮極の勝利を得たる者　二四 范氏と中行氏と趙　二五 趙の居城　二六 趙襄子をいふ　二七 調の字衍か　二八 一手に引受けて戰ひ　二九 地名　三〇 上等　三一 戰功の力を用ひ盡したる

屈レ穴。中・罷二於刀金一。而士困二於士功一。將不レ釋レ甲。弩數而能拔レ城者爲レ亟耳。上倦二於敎一。士斷二於兵一。故三下レ城而能勝レ敵者寡矣。故曰。彼戰攻者。非レ所レ先也。何以知二其然一也。昔智伯瑤攻二范中行氏一。殺二其君一。滅二其國一。又圍二晉陽一。呑二併二國一。而憂二一主一。此用レ兵之盛也。然而智伯卒身死國亡。爲二天下笑一者。何謂也。兵先二戰攻一。而滅二二子一之患也。昔者中山悉起而迎二燕趙一。南戰二於長子一。敗二趙氏一。北戰二於中山一。克二燕軍一。殺二其將一。夫中山千乘之國也。而敵二萬乘之國二一。再戰比勝。此用レ兵之上節也。然而國遂亡。君臣二於齊一者何也。不レ齊二於戰攻一之患也。由レ此觀レ之。則戰攻之敗可レ見二於前事一矣。

今世之所謂善用兵者。終戰比勝。而守不可拔。天下稱爲善。一國得而保之。則非國之利也。臣聞戰大勝者。其士多死。而兵益弱。守而不可拔者。其百姓罷。而城郭露。夫士死於外。民殘於內。而城郭露於境。則非王之樂也。今夫鵠的。非弩弓引弩而射之。中者則喜。不中則愧。少長貴賤。則同心於貫之者。何也。惡其示人以難也。今窮戰比勝。而守必不拔。則是非徒示人以難也。又且害人者也。然則天下仇之必矣。夫罷士露國。而多與天下爲仇。則明君不居也。素用強兵而弱之。則察相不事。彼明君察相者。則五

今世の所謂善く兵を用ふる者は、終戰して比りに勝ち、而して守つて拔く可らざれば、天下稱して善と爲す。一國得て之を保つも、則ち國の利に非ず。臣聞く、戰ひて大いに勝つ者は、其士多く死して、兵益〻弱く、守つて拔く可らざる者は、其百姓罷れて、城郭露るると。夫れ士は外に死し、民は內に殘はれて、城郭境に露はるゝは、則ち王の樂に非ざる也。今夫れ鵠的は人に咎罪あるに非ず。弓を便き弩を引いて之を射、中れば則ち喜び、中らざれば則ち愧ぢ、少長貴賤、則ち心を之を貫くに同じうするものは何ぞや。其の、人に示すに難きを以てするを惡めばなり。今窮戰して比りに勝ち、而して守つて必ず拔けずんば、則ち是れ徒に人に示すに難きを以てするのみに非ず、又且に人を害せんとする者也。然らば則ち是れ天下の之を仇とするや必せり。夫れ士を罷らし國を露はして、多く天下と仇と爲るは、則ち明君居らず、素に強兵を用ひて之を弱むるは、則ち察相事とせず。彼の明君察相は、則ち五兵動かさずして諸侯從ひ、辭讓すれども重賂至る。

故に明君の攻戰は、甲兵軍に出でずして敵國に勝ち、衝櫓施さずして邊城降り、士民知らずして、王業至る。彼の明君の事に從ふや、財を用ふる少く、日を曠しうする遠くして、利たる長きものなり。故に曰く、兵後に起らば、則ち諸侯役に趨る可しと。臣が聞く所、攻戰の道は、百萬の軍ありと雖も、之を堂上に北り、闔閭・吳起の將ありと雖も、之を戶內に擒にし、千丈の城も之を尊俎の間に拔き、百尺の衝も之を衽席の上に折くにあり。故に鍾鼓竽瑟の音絕えずして、地廣む可く、欲成す可く、和樂倡優、侏儒の笑乏しからずして、諸侯日を同じうして致す可し。故に名は天地に配して尊しとせず、利は海內を制して厚しとせず。

㊀ 飽く迄も戰ふ、いよ〳〵のどんづめ迄戰ふ。正解には「終」當に「窮」に作るべしといへり　㊁ 一國は大丈夫に保ち得るものと侍めども　㊂ 居人なくして暴露す。又は、壁壘毀壞し其中靈くあらはるるをいふ　㊃ 國境のといふ　㊄ 鵠的を　㊅ 鵠的が　㊆ 中つるに難き　㊇ 飽く迄も戰ひつめて　㊈ 城郭あらはるるの謂也。一說には疲勞の義にて「ツカラシ」と訓ず　㊉ 其策を行はず　㊊ 平素の素也。正解

兵不ㇾ動。而諸侯從。辭讓而重賂至矣。故明君之攻戰也。甲兵不ㇾ出二於軍一。而敵國勝。衝櫓不ㇾ施。而邊城降。士民不ㇾ知。而王業至矣。彼明君之從ㇾ事也。用ㇾ財少。嚙ㇾ日遠。而爲ㇾ利長者。故曰。兵後起。則諸侯可ㇾ趨ㇾ役也。臣之所ㇾ聞攻戰之道。非師者。雖ㇾ有二百萬之軍一。比二之堂上一。雖ㇾ有二闔閭吳起之將一。禽二之戶內一。千丈之城。拔二之尊俎之間一。百尺之衝。折二之衽席之上一。故鐘鼓竽瑟之音不ㇾ絕。地可ㇾ廣。而欲可ㇾ成。和樂倡優。侏儒之笑不ㇾ乏。諸侯可二同ㇾ日而致一也。故名配二天地一。不ㇾ爲ㇾ尊。利制二海內一。不ㇾ爲ㇾ厚。故夫善爲二王業一者。在下勞二天下一。而自佚。亂二天下一。而自安。諸侯無成謀。故夫の善く王業を爲す者は、天下を勞らして自らは逸し、天下を亂して自らは安ずるに在り。佚治我に在り、勞亂天下に在るは、則ち王の道也。銳兵來らば則ち之を拒ぎ、患至らば則ち之に趨き、諸侯をして謀を成す無からしめば、則

には空（ムナシク）也と解す　㊀㊁ 名相はかゝる事を行はず　㊀㊂ 五種の兵器、刀・劍・矛・戟・矢　㊀㊃ 「於軍」の二字衍か　㊀㊄ 國境の敵城　㊀㊅ 安井息軒曰く「兵後ニ起リ機ヲ見テ動ク、故ニ空日還シ、怨ヲ寄セテ不直ヲ誅ス、故ニ利タル長シ」　㊀㊆ 此語の次なる原文「非師」の二字は衍として削り譯す　㊀㊇ 原文「比」は「北」の誤。敗北せしむの謂也　㊀㊈ 鮑註に「隨閭ガ將孫武也、此レ君臣ヲ以テ互ニ之ヲ言フ」と。要するに孫吳の如き謀將の義と見て可ならん　㊀㊉ 王侯の享禮の席の意　㊁㊀ 攻城車　㊁㊁ 臥席。以上何れも兵を用ひずして勝つを謂ふ　㊁㊂ 共に樂器　㊁㊃ わざをぎ、役者　㊁㊄ 短小人、一寸坊師　㊁㊅ 一時に服從せしむべし　㊁㊆ 西歐　㊁㊇ 當然の事にて別段尊しとするに足らず。次の原しとせずも亦斯く解すべし

則其國無宿憂也。何以知其然也。佚治在ㇾ我。勞亂在二天下一。則王之道也。銳兵來則拒ㇾ之。患至則趨ㇾ之。使二諸侯無ㇾ成ㇾ謀。則其國無二宿憂一矣。何以知二其然一也。昔者魏王擁ㇾ土千里。帶甲三十六萬。恃二其強一。而拔二邯鄲一。西圍二定陽一。又從二十二諸侯一。朝二天子一。以西謀ㇾ秦。秦王恐ㇾ之。寢ち其國宿憂無げん。何を以てか其然るを知るや。昔は魏王土を擁する千里、帶甲三十六萬あり。其強を恃みて邯鄲を拔き、西、定陽を圍み、又十二諸侯を從へて、天子に朝し、以て西、秦を謀る。秦王之を恐れ、寢ぬるに席を安しとせず、食ふに味を甘しとせず。境內に令し、堞中を盡くして戰具を爲り、竟に守備を爲し、死士の爲めに將を置き、以て魏氏を待つ。衛鞅、秦王に謀つて曰く、『夫れ魏氏は其功大にして、令天下に行はれ、十二諸侯を有して天子に朝す。其與必ず衆し。故に一秦を以てして大魏に敵す、恐らくは如かざらん。王何ぞ臣をして魏王に見えしめざる。則ち臣請ふ必ず魏を北らん』と。秦王許諾す。衛鞅、魏王に見えて曰く、『大王の功大なり。令天下に行はる。今大王の從ふる所の十二諸侯、宋・衛に非ずんば、則ち鄒・魯・陳・蔡、此れ固より大王の鞭箠して使ふ所以也。以て天下に王たるに足らじ。大王若かず、北、燕を取り、東、齊を伐たば、則ち趙必ず從はん。西、秦を取り、南、楚を伐たば、則ち韓必ず從はん。大王齊・楚を伐つの心ありて、

不レ安レ席。食不レ甘レ味。令二於境内一。盡二壥中一爲二戰具一。竟爲二守備一。爲二死士一置レ將。以待二魏氏一。衛鞅謀二於秦王一曰。夫魏氏其功大。而令行二於天下一。有二十二諸侯一而朝二天子一。其與必衆。故以二一秦一而敵二大魏一。恐不レ如。王何不レ使三臣見二魏王一。則臣請必北レ魏矣。秦王許諾。衛鞅見二魏王一曰。大王

天下の志に従はゞ、則ち王業見はれん。大王先づ王服を行ひ、然る後、齊・楚を圖らんに如かず」と。魏王、衛鞅の言を説ぶ。故に身ら公宮を廣くし、丹を制し柱に衣せ、九斿を建て、七星の旟を従ふ。此れ天子の位也。而して魏王之に處る。是に於てか齊・楚怒り、諸侯齊に奔る。齊人魏を伐ち、其太子を殺し、其十萬の軍を覆す。魏王大いに恐れ、跳行し兵を國に按じて、東、齊に次る。然して後、天下乃ち之を舍す。是の時に當つて、秦王垂拱して、西河の外を受けて、而も以て魏王を德とせざりき。故に衛鞅の始めて秦王と計るや、謀約席を下らず、尊俎の間に言つて、謀堂上に成り、而して魏將已に齊に禽となり、衝檣未だ施さずして、西河の外、已に秦に入れり。此れ臣の所謂之を堂上に北り、將を戶内に禽にし、城を尊俎の間に拔き、衝を席上に折く者也。」

一 逸居、逸樂　二 佚樂治平。此前なる十八字は衍として削り除す　三 王者の行ふ道　四 往きて之に應ずる也。我主となちずして受身となるをいふ　五 宿は留也。永く妻を留むるをいふ　六 軍勢　七 趙の都　八 國

之功大矣。今行二於天下一矣。今大王之所レ從十二諸侯。非二宋衛一也。則鄭魯陳蔡。此固大王之所二以鞭箠使一也。不レ足三以王二天下一。大王不レ若北取レ燕。東伐レ齊。則趙必從矣。西取レ秦。南伐レ楚。則韓必從矣。大王有下伐二齊楚一心上。而從二天下之志一。則王業見矣。大王不レ如下先行二王服一。然後圖中齊楚。魏王說二於衛鞅之言一也。故身廣二公宮一。制レ丹衣レ柱。建二九斿一。從二七星之旟一。此天子之位也。而魏王處レ之。於レ是齊楚怒。諸侯奔レ齊。齊人伐レ魏。殺二其太子一。覆二其十萬之軍一。魏王大恐。跳行按二兵於國一。而東次二於齊一。然後天下乃舍レ之。當二是時一。秦王垂拱。而受二西河之外一。而不三以德二魏王一。故衛鞅之始與二秦王一計也。謀約不レ下レ席。言二於尊俎之間一。謀成二於堂上一。而魏將已禽二於齊一矣。衝檣未レ施而西河之外。已入二於秦一矣。此臣之所レ謂比二之堂上一。禽二將戶内一。拔二城於尊俎之間一。折二衝席上一者也。

内 ㊀ 埘は城上のひめがき。城といふ城に墨く軍器を充しの義ならん　二 壥に同じ　三 正解に「墓(ツノル)の誤かといへり　四 驚興又は興國の義　五 鞭うちて　六 而も未だ以て　七 諸侯が齊楚を伐たんと欲する其志に從はゞ　八 王者の服飾を用ひ王者の事を行ひて　九 丹塗の檀(タルキ)を作り柱に錦繡をきせ　一〇 はた。旌旗の末の垂るゝ者　一一 朱雀七星を畫きしはた　一二 奔走して齊を援ふ　一三 履をもはきあへずはだしにて行く　一四 止めて已に從はしめず　一五 手をこまぬきて何も爲さずに傍觀し　一六 別段魏王のおかげとも思はず　一七 居ながらにして謀を廟ちし　一八 攻城の大車

齊負郭之民。有二孤狐喧者一。正議。閔王斷二

齊の負郭の民に、孤狐喧といふ者あり、正議す、閔王之を檀衝に斷る、百姓附かず。齊の孫室子陳臯直言す、之を東閭に殺す、宗室心を離す。司馬穰苴は政を

之檀臺。百姓不附。齊孫室子陳臯直言。殺之東閭。宗族離心。司馬穰苴爲政者也。殺之。大臣不親。以故燕襲兵。使昌國君將而擊之。齊使向子將而應之。齊軍破。向子以輿一乘亡。遂子敢餘卒復振。與燕戰。求所以賞者。閔王不肯與。軍破走。王奔莒。淖齒數之曰。夫爲人者也。之殺。大臣親しまず。故を以て、燕、兵を擧げ、昌國君をして將として之を擊たしむ。齊、向子をして將とし之に應ぜしむ。齊の軍破れ、向子以て一乘に輿して亡ぐ。遂子、餘卒を收めて復た振ひ、燕と戰ひ、賞する所以の者を求む。閔王與ふるを肯んぜず。軍破れ走り、王莒に奔る。淖齒之を數めて曰く、「夫れ千乘・博昌の閒、方數百里、血を雨らし衣を霑ほす。王之を知るか。」王曰く、「知らず。」「嬴・博の閒、地坼けて泉に至る。王之を知るか。」王曰く、「知らず。」淖齒曰く、「天血を雨らし衣を霑ほすは、天以て告ぐるなり。地坼けて泉に至るは、地以て告ぐるなり。人闘に當つて哭する者有るは、人以て告ぐるなり。天地人皆以て告ぐ。而るに王戒むるを知らず。何ぞ誅なきを得んや」と。是に於て閔王を鼓里に殺す。太子乃ち衣を解き服を免ぎ、太史の家に逃れて、爲めに園に漑ぐ。君王后は太史氏の女なり。其の貴人なるを知

千乘博昌之閒。方數百里。雨血霑衣。王曰。知之乎。王曰。不知。嬴博之閒。地坼至泉。王知之乎。王曰。不知。人有當闘而哭者。求之則不得。去之則聞其聲。王知之乎。王曰。不知。淖齒曰。天雨血霑衣者。天以告也。地坼至泉者。地以告也。人有當闘而哭者。人以告也。天地人皆以告矣。而王不知戒焉。何得無誅乎。於是殺閔王於鼓里。太子乃解衣免服。逃太史之家。爲漑園。君王后。太史氏女。知其貴人。善事之。田單以即墨之城。破亡餘卒。破燕兵。紿騎劫。遂以復齊。遂迎太子於莒。立之以爲王。襄王即立。君王后以爲后。生齊王建。

王孫賈年十

王孫賈、年十五にして閔王に事ふ。王出で走る。王の處を失ふ。其母曰く、「女

(一) 王孫賈　(二) 城外　(三) 齊の市の名　(四) これより人民の齊王に服せざるもの出て來りぬ　(五) 公孫家の子即ち王族の子の謂　(六) 東門　(七) 樂毅　(八) 將士の功を賞する所以の者を王に求む　(九) 齊の出城の地　(一〇) 惹人、兵に將として齊を救ひ、因て閔王に將たり。歇は一々其罪を歇（立てて責むるをいふ　(一一) 二つの縣の名　(一二) 齊の二つの地名　(一三) 黃泉、墟の庭　(一四) 宮門　(一五) 園に水をそゝぐ傭人となつて紛れ匿たれる也　(一六) 鮑註に「后ハ姓也、其姓名后后ト曰フ可カラザルヲ以テ故ニ君王后トイフ也」　(一七) 即墨の城は籠城囚くして繩に縛王の手に歸せざりしなり　(一八) 燕の將、樂毅に代りたる者　(一九) 欺く也。だまし討ちにして殺す　(二〇) 即ち襄王也。坊本によればこの下は「襄王即位立君王后」也

りて善く之に事ふ。田單、即墨の城、破亡の餘卒を以て、燕の兵を破り、騎劫を紿いて、遂に以て齊を復し、遽に太子を莒より迎へ、之を立てゝ以て王となす。襄王即ち君王后を立てゝ以て后とし、齊王建を生めり。

五事二閔王一。王出走。失二王之處一。其母曰。女朝出而晚來。則吾倚レ門而望。女暮出而不レ還。則吾倚レ閭而望。女今事レ王。王出走。女不レ知二其處一。女尙何歸。王孫賈乃入二市中一曰。淖齒亂二齊國一。殺二閔王一。欲二與レ我誅一者袒レ右。市人從者四百人。與レ之誅二淖齒一。刺而殺レ之。

朝に出でゝ晚に來れば、則ち吾れ門に倚つて望み、女暮に出でゝ還らざれば、則ち吾れ閭に倚つて望む。女今王に事へ、王出で走つて、女其處を知らず。女尙ほ何ぞ歸れりや」と。王孫賈乃ち市中に入つて曰く、「淖齒齊國を亂して、閔王を殺せり。我と與に誅せんと欲する者は、右を袒げ」と。市人の從ふ者四百人あり、之と淖齒を誅し、刺して之を殺しぬ。

㊀ 蓋し本と齊王の一族　㊁ 王の行先を知らずして空しく家に歸りたる出　㊂ 茲の文より出でて「倚門の望」といふ熟語となり、母が外に在る子の歸るを待ちわぶる情の喩に用ひらる　㊃ 里門　㊄ 王の行衛をさがし、其淖齒に殺されたる事をつきとめて後に也　㊅ 淖齒を　㊆ 右肩をぬいてはだをあらはせ

襄王

燕攻レ齊。取二七十餘城一。唯莒卽墨未レ下。齊田單以二卽墨一破レ燕。殺二騎劫一。初燕將攻二下聊城一。人或讒レ之。燕將懼レ誅。遂保二守聊城一。不二敢歸一。田單攻レ之歲餘。士卒多死。而聊城不レ下。魯連乃爲レ書約二之矢一。以射二城中一。遺二燕將一。曰。吾聞レ之。智者不二倍レ時而棄レ利。勇士不二怯レ死而滅レ名。忠臣不二先レ身而後レ

燕、齊を攻めて、七十餘城を取る。唯だ莒と卽墨とのみ未だ下らず。齊の田單、卽墨を以て燕を破り、騎劫を殺す。初め燕將、聊城を攻め下すや、人或は之れを讒す。燕將誅を懼れ、遂に聊城を保守して敢て歸らず。田單之を攻むる歲餘、士卒多く死して、聊城下らず。魯連乃ち書を爲りて之を矢に約び、以て城中に射、燕將に遺つて曰く、「吾之を聞く、智者は時に倍いて利を棄つるをせず、勇士は死を怯れて名を滅ぼすをせず、忠臣は身を先にして君を後にするをせずと。今公、一朝の忿を行うて、燕王の臣を無くするを顧みざるは、忠に非ざる也。身を殺し聊城を亡うて、威、齊に信びざるは勇に非ざる也。功廢れ名滅びて、後世稱する無きは、智に非ざる也。故に智者は再び計らず、勇士は再び劫かさず。今死生榮辱、尊卑貴賤、此れ其一時也。願はくは公の詳かに計つて、俗と同じうする無からんを。且つ楚、南陽を攻め、魏、平陸を攻むるも、齊は南面の心なし。以爲らく、南陽を亡ふの害は、濟北を得るの利に若かじと。故に計を定めて堅く之れを守る。今秦人、兵を下さば、魏敢て東面せじ。橫秦の勢合はゞ、則ち楚國の

君。今公行二一朝之忿一。不レ顧二燕王之無レ臣。非レ忠也。殺レ身亡二聊城一。而威不レ信二於齊一。非レ勇也。功廢名滅。後世無レ稱。非レ智也。故智者不二再計一。勇士不二再劫一。今死生榮辱。繇卑賤。此其一時也。願公之詳計。而無二與レ俗同一也。且楚攻二南陽一。魏攻二平陸一。齊無二南面之心一。以爲亡二南陽一之害。不レ若下得二濟北一之利上。故定レ計而堅守レ之。今秦人下レ兵。魏不二敢東面一。横秦之勢合。則楚國之形危。且棄二南陽一。斷二右壤一。存二濟北一。計必爲レ之。今楚魏交退。燕救不レ至。齊無二天下之規一。與二聊城一共據二莽年之弊一。卽臣見二公之不レ能レ得也。齊必決二之於聊城一。公無二再計一。彼燕國大亂。君形危からん。且つ南陽を棄て、右壤を斷つとも、濟北を存せば、計必ず之を爲さん。今楚・魏交〻退いて、燕の救至らざれば、齊は天下の規なくして、聊城と共は莽年の弊に據る。卽ち臣、公の得る能はざるを見る也。齊必ず之を聊城に決すとせば、公再計するなけん。彼の燕國の大いに亂れ、君臣計を過つて、上下迷惑するや、栗腹十萬の衆を以るて、五たび外に折かれ、萬乘の國趙に圍まれ、壤削られ主困しみて、天下の戮と爲れり。公之を聞けりや。今燕王方に寒心獨立して、大臣恃むに足らず、國弊え既多くして、民心歸する所なし。今公又弊聊の民を以て、全齊の兵を距ぎ、莽年解けず。是れ墨翟の守也。人を食ひ骨を炊ぎて、士反北の心なし。是れ孫臏・吳起の兵也。能已に天下に見はる。故に公の爲めに計るに、兵を罷め士を休め、車甲を全うして、歸つて燕王に報ぜんに如かず。燕王必ず喜ばん。士民の公を見ること父母を見るが如く、交游臂を攘げて世に議せん。功業明はす可し。上は孤主を輔けて以て群臣を制し、下は百姓を養うて以て說士

を資け、國を矯し俗を革む。天下に於て功名立つ可き也。意ふに亦燕を損て世を棄て、東、齊に旁ばんか、請ふ地を裂き封を定め、富陶・衞に比し、世世孤寡と稱して、齊とともに久しく存せん。此れ亦一計也。二つの者、名を顯はし、實を厚うする也。願はくは公熟計して審かに一に處れ。

一 燕の將、前々章に出づ 二 其名未詳。聊城は齊の城 三 魯仲連 四 顧みとする臣を無くす 五 伸也。威光も齊國に行き亘らず 六 一計にして事を決す 七 諸本概ね「死を怯れず」に作る。正解は錢劉本によりて斷く改む。再計せずと同じく、其勇を一擧にして發揮すの義にて、共に下文の此れ其一時也に應じ、今此一時こそ眞智眞勇を發すべき時なれといふなるべし 八 以上八者の得失只此時にあり、此時を逸しては機は再來せじとなり 九 南面して楚魏と戰はんと思はず 一〇 聊城をさしていふ也 一一 國守也 一二 秦兵を下して齊を救はゞ魏は敢て東面して平陸を攻めじ 一三 齊秦連橫の勢合成せば楚の形勢危ふく亦南陽を攻めじ 一四 齊が也 一五 平陸を謂ふ。斷つも亦棄つるの謂也 一六 齊は利害を計り必ず之を爲さん 一七 慮也。諸侯齊を疑る者なきをいふ 一八 齊は何の心配なき地位に立つて、援兵來らざる聊城と滿一年に亘る戰爭の餘弊を相持す 一九 支持するを得ず 二〇 齊は聊城攻落しの計を決意せんに 二一 公は再計する暇もなく、今公の智を以て卽斷卽決すべき也。蓋し上文の智者は再び計らずに照應す 二二 進退を失ふ 二三 燕の將 二四 外國に打破られ 二五 大亂にてありながら 二六 土地 二七 孤立 二八 禍の古字 二九 疲弊したる聊城の人民 三〇 公

臣過ㇾ計。上下迷惑。栗腹以二十萬之衆一。五折二於外一。萬乘之國。被ㇾ圍二於趙一。壤削主困。爲二天下戮一。公聞ㇾ之乎。今燕王方寒心獨立。大臣不ㇾ足ㇾ恃。國弊甲多。民心無所ㇾ歸。今公又以二弊聊之民一。距二全齊之兵一。朞年不ㇾ解。是墨翟之守也。食ㇾ人炊ㇾ骨。士無二反北之心一。是孫臏吳起之兵也。能已見二於天下一矣。故爲ㇾ公計者。不ㇾ如下罷ㇾ兵休ㇾ士。全二車甲一。歸報中燕王。燕王必喜。士民見ㇾ公如ㇾ見二父母一。交游攜ㇾ臂而議二於世一。功業可ㇾ明矣。上輔二孤主一。以制二群臣一。下養二百姓一。以資二說士一。矯ㇾ國革ㇾ俗。於二天下一功名可ㇾ立也。意者亦捐ㇾ燕棄ㇾ世。東游二於齊一乎。請裂ㇾ地定ㇾ封。富比二陶衞一。世世稱二孤寡一。與ㇾ齊久存。此亦一計也。二者顯ㇾ名厚ㇾ實也。願公熟計而審處ㇾ一也。

且吾聞效二小節一者。不ㇾ能ㇾ行二大威一。惡二小恥一者。不ㇾ能ㇾ立二榮名一。昔管仲射二桓公一中ㇾ鉤。簒也。遺二公子糾一而不ㇾ能ㇾ死。怯也。束縛桎梏。辱ㇾ身也。此三行者。鄉里不ㇾ通也。世主不ㇾ臣也。使二管仲終窮抑幽。囚而不ㇾ出。慙恥而不ㇾ見。窮ㇾ年沒ㇾ壽。不ㇾ免ㇾ爲二辱人賤行一矣。然而管子并二三行之過一。據二齊國之政一。一二匡天下一。九二合諸侯一。爲二五霸首一。名高二天下一。光照二鄰國一。曹

輪殺宋を攻め墨子之を距ぐ、殺九たび機變を設け墨九度距ぎ、殺の機盡きて墨の守備餘りありしをいふ　三　糧食乏之の形容　四　そむきにげる　五　有名なる孫氏吳氏　六　公の材能　七　同志の士は意氣込みて其功を說かん　八　孤立の燕王　九　辯說の士に其辯說の資料を供すの意か。或は「以て」を更に又と解し、文字通りに辯客を賣け養ふと見るべきか　一〇　世の義理を顧みず　一一　來遊せれば　一二　二つの小國の名なり。陶は陶朱公、衞は商君の姓、共に古への富者とする說もあり　一三　君となりて　一四　燕に歸るは名を顯はす也、齊に遊ぶは資を厚うする也

且つ吾れ聞く、小節を效す者は大威を行ふ能はず、小恥を惡む者は榮名を立つる能はずと。昔し管仲の桓公を射て鉤に中てしは簒也、公子糾を遺れて死する能はざりしは怯也、束縛桎梏は身を辱しめし也。此三行は、鄉里も通ぜず、世主も臣とせざるものなり。管仲をして終窮抑幽、囚はれて出でず、慙恥して見えず、年を窮め壽を沒へしめば、辱人賤行たるを免かれざりしならん。然るに管子、三行の過を并せながら、齊國の政に據りて、天下を一匡し、諸侯を九合して、五霸の首と爲り、名天下に高く、光鄰國を照せり。曹沫は魯君の將と爲り、三び戰ひて三び北げ、地を喪ふ千里なり。曹子の足をして陳を離れず、計、後に出づるを顧みず、死を必して生きざらしめば、則ち敗軍の禽將たるを免かれざりしならん。曹子以へらく、敗軍の禽將は勇に非ず、功廢れ名滅びて後世稱する無きは智に非ずと。故に三北の恥を去り、退いて魯君の與に計るや、曹子以て遭へりとなす。齊の桓公の天下を有ち、諸侯を朝せしむるや、曹子一劍の任を以て、桓公を壇位の上に劫かし、顏色變ぜず、辭氣悖らず、三戰の喪ふ所、一朝にして之を反す。天下震動し、諸侯驚駭し、威、吳・楚に信び、名を後世に傳ふ。此二公の若きは、小節を行ひ、小恥に死する能はざるに非ず、以爲らく、身を殺し世を絕ち、功名

沐爲二魯君將一。三戰三北。而喪レ地千里。使下曹子之足不レ離レ陳。計不レ顧二後出一。必レ死而不レ生。則不レ免レ爲二敗軍禽將一。曹子以敗軍禽將。非レ勇也。功廢名滅。後世無レ稱。非レ智也。故去二三北之恥一。退而與二魯君一計也。曹子以爲レ遭。齊桓公有二天下一。朝二諸侯一。曹子以二一劒之任一。劫二桓公於壇位之上一。顏色不レ變。而辭氣不レ悖。三戰之所レ喪。一朝而反レ之。天下震動。諸侯驚駭。威信二吳楚一。傳二名後世一。若二此二公一者。非下不レ能下行二小節一。死中小恥上也。以爲殺レ身絕レ世。功名不レ立。非レ智也。故去二忿恚之心一。而成二終身之名一。除二感忿之恥一。而立二累世之功一。故業與二三王一爭レ流。名與二天壤一相敝也。公其圖レ之。燕將曰。敬聞レ命矣。因龍レ兵到レ檀而去。

立たざるは智に非ずと。故に忿恚の心を去つて終身の名を成し、感忿の恥を除いて累世の功を立つ。故に業三王と流を爭ひ、名天壤と相敝るゝ也。公、其れ之を圖れ。」燕將曰く、「敬んで命を聞く」と。因て兵を罷め、檀を到して去れり。故に齊國の圍を解き、百姓の死を救ひしは、仲連の說也。

一 小さいみさをだて　二 此事史記齊世家及び管仲傳に見ゆ　三 帶の鉤具（カナグ）　四 君を試せんとせし行爲也　五 管仲が公子糾に事へながら、其爲めに戰死する能はざりしは卑怯也　六 桓公に囚はれし時、自ら手かし足かしを施して囚はれの身となりしをいふ　七 同鄕人も交はらず　八 政を根柢として　九 又一例を擧ぐる也　一〇 陣也。一歩も陣地を退かず　一一 擒將也。囚はれし大將　一二 忍び　一三 爲の義ならん　一四 先日の辱を雪ぐべき時に遭へりとなす。卽ち下文に謂ふ所を指す也　一五 一劒をふるひて　一六 神色言辭常の如くにして亂れざりしをいふ　一七 三戰に亡びし土地　一八 いかりうらむ　一九 相比して下らず　二〇 其名は天地のあらん限り傳はると也　二一 鞦に通ず、矢づつ也。到は倒と普通。之を倒すは矢無きを示す也　二二 魯仲連の辯舌の功也

燕攻レ齊。齊破。閔王奔レ莒。淖齒殺二閔王一。田單守二卽墨之城一。破二燕兵一。復二齊墟一。襄王爲二太子一。徵。齊已破レ燕。田單之立疑。齊國之衆。皆以二田單一爲二自立一也。襄王立。田單相レ之。過二蓋水一。有二老人一。涉レ蓋而寒。出不レ能レ行。坐二於沙中一。田單見二其寒一。欲レ

燕、齊を攻め、齊破れて閔王莒に奔る。淖齒閔王を殺す。田單卽墨の城を守り、燕の兵を破つて、齊の墟を復す。襄王太子と爲りて徵なり。齊の已に燕を破るや、田單の立つを疑ひ、齊國の衆も皆田單を以て自立すと爲す。襄王立つや、田單之に相たり。蓋水を過ぐ。老人あり、蓋を涉つて寒え、出でたるも行く能はず、沙中に坐す。田單其寒えたるを見て、後車をして衣を分たしめんと欲せしかど、以て分つ可き者なし。單、裘を解いて之に衣す。襄王之を惡んで曰く、「田單の施は、將に以て我が國を取らんと欲してならんか。早く之を圖らずんば、恐らく之に後れん」と。左右顧みるに人なし。巖下に貫珠者あり。襄王呼んで之に問うて曰く、「女吾が言を聞けるか。」對へて曰く、「之を聞けり。」王曰く、「女以て何若と爲す。」對へて曰く、「王因て己が善と爲すに如かず。」王曰く、「奈何。」曰く、「單の

使二後車分レ衣。無下可二以分一者上。單解レ裘而衣レ之。襄王惡レ之曰。田單之施。將欲三以取二我國一乎。不二早圖レ之。恐後レ之。左右顧無レ人。嚴下有二貫珠者一。襄王呼而問レ之曰。女聞二吾言一乎。對曰。聞レ之。王曰。女以爲二何若一。對曰。王不レ如三因以爲二己善一。王曰。奈何。曰。嘉二單之善一。下レ令曰。寡人憂二民之

善を嘉して、令を下して曰へ、『寡人民の饑うるを憂ふ、單、收めて之に食せしむ。寡人民の寒ゆるを憂ふ、單、裘を解いて之に衣す。寡人百姓を憂勞す、而して單亦之を憂ふ。寡人の意に稱へり』と。單に是の善あつて、王之れを嘉す。單の善を善とするは、亦王の善也。」王曰く、「善し」と。乃ち單に牛酒を賜ひ、其行を嘉す。後數日、貫珠者復た王に見えて曰く、「王、朝日に至り、宜しく田單を召して之を庭に揖し、口づから之を勞らひ、乃ち令を布き、百姓の饑寒する者を求めて之を收穀すべし」と。乃ち人をして閭里に聞かしむ。丈夫の相與に語るを聞くに、舉曰く、「田單の人を愛するは、嗟、乃ち王の敎澤也」と。

(一) 齊の國又は都の義ならん　(二) 原文「徵」は微の誤。身分賤し。篇にも出でたる如く、太子始め逃亡し太夫の家に隱る故に微といふ　(三) 襄の字原文に於て當に田單の上にあるべき誤ならん。襄王、田單の自ら立つて齊の王たらんとするを襄ふと也　(四) 從者の車　(五) 皮衣　(六) 巖穴卽ち殿堂の廡下(ノキシタ)　(七) 珠衣を作る者、蓋し珠を貫きて器飾を作るを以て業とする者ならん　(八) 亦王の善行を表はす所以也。これ前文に所謂因て以て己が善と爲す也　(九) 大饗宴を賜ふの意也　(一〇) 群臣參朝の日　(一一) 延也。朝廷の大廣間に於て會餐を賜ひ　(一二) 女子供でなく相當な人士といふ意にや　(一三) 敎化の餘澤

饑一也。單收而食レ之。寡人憂二民之寒一也。單解レ裘而衣レ之。寡人憂二勞百姓一。而單亦憂レ之。稱二寡人之意一。單有二是善一。而王嘉レ之。善二單之善一。亦王之善也。王曰。善。乃賜二單牛酒一。喜二其行一。後數日。貫珠者復見レ王曰。王至二朝日一。宜下召二田單一。而揖之於庭一。口勞レ之。乃布レ令。求二百姓之饑寒者一。收中穀之上。乃使三人聽二於閭里一。聞二丈夫之相與語一。舉曰。田單之愛レ人。嗟乃王之敎澤也。

貂勃常惡二田單一。曰。安平君小人也。安平君聞レ之。故爲レ酒而召二貂勃一。曰。單何以得二罪於先生一。故常見レ惡二於朝一。貂勃曰。跖之狗吠レ堯。非二貴レ跖而賤レ堯也。狗固吠レ非二其

貂勃常に田單を惡しく曰く、「安平君は小人也」と。安平君之を聞き、故らに酒を爲めて貂勃を召して曰く、「單何を以てか罪を先生に得て、故らに常に朝に惡せらるゝや。」貂勃曰く、「跖の狗堯に吠ゆ。跖を貴んで堯を賤しむに非ず。狗固より其主に非ざるに吠ゆる也。且つ今公孫子をして賢にして、徐子をして不肖ならしめ、然して公孫子と徐子とを鬬はしめば、徐子の狗、猶將に公孫子の腓を攫んで之を噬まん。若し乃ち不肖者を去つて、賢者を爲くるを得ば、狗豈に特に其腓を攫んで之を噬むのみならんや」と。安平君曰く、「敬んで命を聞く」と。明日之を王に任

主也。且今使公孫子賢。而徐子不肖。然而使公孫子與徐子鬬。徐子之狗。猶將攫公孫子之腓而噬之也。若乃得去不肖者而爲賢者。狗豈特攫其腓而噬之耳哉。安平君曰。敬聞命。明日任之於王。王有所幸臣九人之屬。欲傷安平君。相與語於王曰。燕之伐齊之時。楚王使將軍將萬人而佐齊。今國已定。而社稷已安矣。何不使三使者謝於楚王。王曰。左右孰可。九人之屬曰。貂勃可。貂勃使楚。楚王受而觴之。數日不反。九人之屬相與語於王曰。夫一人之身。而牽留萬乘者。豈不以據勢也哉。且安平君之與王也。君臣無禮。而上下無別。且其志欲爲不善。內收百姓。循撫其心。振窮補不足。布德於民。外懷戎翟。天下之賢士。陰結諸侯之雄俊豪英。其志欲有爲也。願王之察之。

異日王曰。召相單來。田單免冠徒跣肉袒而進。退而請死罪。五日而王曰。子無罪。於寡人。子爲子之臣禮。吾爲吾之

む。王幸する所の臣九人の屬あり、安平君を傷けんと欲し、相與に王に語つて曰く、「燕の齊を伐つの時、楚王、將軍をして萬人を將ゐて齊を佐けしむ。今國已に定まつて、社稷已に安し。何ぞ使者をして楚王に謝せしめざる。」王曰く、「左右孰れか可ならん。」九人の屬曰く、「貂勃可ならん」と。貂勃楚に使す。楚王受けて之に觴す。數日反らず。九人の屬、相與に王に語つて曰く、「夫れ一人の身にして、萬乘に牽き留めらるゝは、豈に勢に據るを以てならざらんや。且つ安平君の王に與けるや、君臣禮なくして、上下別なし。且つ其志不善を爲さんと欲す。內百姓を收めて、其心を循撫し、窮を振ひ不足を補ひ、德を民に布き、外戎翟天下の賢士を懷け、陰かに諸侯の雄俊豪英に結ぶ。其志爲す有らんを欲する也。願はくは王の之を察せられんを」と。

一 齊人　二 そしりて　三 田單始め平安に起る、故に以て號と爲す　四 朝廷　五 盗竊。この語本文を出典とし、今主として惡に驚し賢を嫉むの喩にいふ　六 更に一例を擧げんにの意　七 戶崎允明は徐子を餘子の誤と爲す、餘子は居候部屋住の義にて、上の公孫子卽ち貴族の公達と相對して文を爲すと也　八 ふくらはぎ　九 蓋し不肖者は暗に宰臣を指し、賢者は田單を指し、自ら物に當ふるならん　一〇 助けて功を爲すと更に大なる者あらんと也　一一 自ら保證人となりて王に推薦す　一二 愛幸　一三 やから　一四 淖齒　一五 齊の國　一六 近侍の臣の內　一七 酒飲ましむ　一八 匹夫の身　一九 萬乘大國の主に　二〇 貂勃が田單の權勢に援據する故也　二一 於也。對するや　二二 謀反を企てんとす　二三 我になつけ從へ　二四 恩惠　二五 えびす

異日王曰。召相單來。田單冠を免ぎ、徒跣肉袒して進み、退いて死罪を請ふ。五日にして王曰く、「子、寡人に罪なし。子は子が臣の禮を爲せ。吾は吾が王の禮を爲さんのみ」と。貂勃楚より來る。王諸に前に賜ふ。酒酣なるとき王曰く、「相田單を召して來れ」と。貂勃席を避け稽首して曰く、「王惡くんか此亡國の言を得たるや。王、上は周の文王に孰れぞ。」王曰く、「吾若かず。」貂勃曰

一 異人　二 そしりて　三 田單始め平安に起る、故に以て號と爲す　四 朝廷　五 盗竊。この語本文を出典とし、今主として惡に驚し賢を嫉むの喩にいふ　六 更に一例を擧げんにの意　七 戶崎允明は徐子を餘子の誤と爲す、餘子は居候部屋住の義にて、上の公孫子卽ち貴族の公達と相對して文を爲すと也　八 ふくらはぎ　九 蓋

王禮而已矣。貂勃從楚來。王賜諸前酒酣。王曰。召相田單而來。貂勃避席稽首曰。王惡得此亡國之言乎。王上者與周文王。王曰。吾不若也。貂勃曰。然。臣固知王不若也。下者執與齊桓公。王曰。吾不若也。貂勃曰。然。臣固知王不若也。然則周文王得呂望。以爲太

く、「然り、臣固に王の若かざるを知る。下は齊の桓公に敦れぞ。」王曰く、「吾若かず。」貂勃曰く、「然り、臣固に王の若かざるを知る。然らば則ち周の文王は呂望を得て以て太公となし、齊の桓公は管夷吾を得て以て仲父となしゝを、今王安平君を得て獨り單と曰ふ。且つ天地の鬬け、民人の始まりてより、人臣の功を爲せる者、誰か安平君より厚き者あらんや。而るに王、單、單と曰ふ。惡くんか此の亡國の言を得たるや。且つ王、先王の社稷を守る能はず、燕人、師を興して齊の墟を襲へり。王走つて城陽の山中に之く。安平君、惴惴の卽墨、三里の城、五里の郭、敝卒七千を以て、其の司馬を禽にして、千里の齊を反す。安平君の功也。是の時に當つて、城陽を闔ぢて王たらば、天下之を能く止むる莫かりしならん。然るに而も之を道に計り、之を義に歸して、以て不可と爲す。故に棧道木閣を爲つて王と后とを城陽の山中より迎ふ。王乃ち反るを得て、百姓に子とし臨めり。今國已に定まり、民已に安し。王乃ち單、單と曰ふ。且つ嬰兒の計も此を爲さじ。

公。齊桓公。得管夷吾。以爲仲父。今王得安平君。而獨曰單。且自天地之始。爲人臣之功者。誰有厚於安平君者哉。而王曰。單單。惡得此亡國之言乎。且王不能守先王之社稷。燕人興師而襲齊。墟。王走而之城陽之山中。安平君以惴惴之卽墨。三里之城。五里之郭。敝卒七千。禽其司馬。而反千里之齊。安平君之功也。當是時也。闔城陽而王。城陽天下莫之能止。然而計之於道。歸之於義。以爲不可。故爲棧道木閣。而迎王與后於城陽山中。王乃得反。子臨百姓。今國已定。民已安矣。王乃曰。單單。且嬰兒之計不爲此。王不亟殺此九子者。以謝安平君。不然。國危矣。王乃殺九子。而逐其家。益封安平君。以夜邑萬戶。

王亟かに此九子の者を殺して、以て安平君に謝せざる。然らずんば國危ふからん」と。王乃ち九子を殺して、其家を逐ひ、安平君に益し封ずるに、夜邑の萬戶を以てせり。

(一) 俄日　(二) 宰相田單、其名を呼びて召す、之を賤しむ也　(三) 無人たる態度となり利を受けんと欲するを示す也。徒跣は素足、肉袒ははだぬぎになるをいふ　(四) 歸り來る　(五) 前に召して酒を賜ふ。吳註に「賜」は「賜」の誤ならんといふ　(六) 太公、仲父、共に尊號也　(七) 名を呼棄てにいふ　(八) 軍也　(九) 國又は都の義なちん　(一〇) 憂へ懼るゝ貌　(一一) 弊殘の卒　(一二) 主兵官、騎劫をいふ　(一三) 田單が也　(一四) 此前なる「城陽」の二字は衍也、削り譯す　(一五) 道義上自ら王たるを不可と考へたり　(一六) 棧道木閣共に以て險を通ずるもの、蓋し一物異名ならん。險阻なる城陽に掛け橋を作りてと也　(一七) 都に也　(一八) 放逐し

田單將レ攻レ狄。往見二魯仲子一。仲子曰。將軍攻レ狄不レ能レ下也。田單曰。臣以二五里之城。七里之郭。破二亡餘卒一。破二萬乘之燕一。復二齊墟一。攻レ狄而不レ下。何也。上レ車弗レ謝而去。遂攻レ狄。三月而不レ克レ之也。齊嬰兒謠曰。大冠若レ箕。脩劍拄レ頤。攻レ狄不レ能レ下。魯二枯丘一。田單乃懼。問二魯仲子一曰。先生謂二單不レ能レ下レ狄。請聞二其說一。魯仲子曰。將軍之在二即墨一。坐而織レ薦。立則杖レ揷。爲二士卒一倡曰。可レ往矣。宗廟亡矣。亡日尙矣。歸二於何黨一矣。當二此之時一。將軍有二死之心一。而士卒無二生之氣一。聞二若言一。莫レ不二揮レ泣奮レ臂而欲レ戰。此所二以破レ燕也。當レ今將軍東有二夜邑一。生奉二西有二菑上之虞一。黃金橫レ帶。而馳二乎淄澠之閒一。有二生之樂一。無二死之心一。所二以不レ勝者也。田單曰。單有レ心。先生志レ之矣。明日。乃厲レ氣循レ城。立二於矢石之所一。及レ援レ枹鼓レ之。狄人乃下。

田單、將に狄を攻めんとして、往いて魯仲子に見ゆ。仲子曰く、「將軍狄を攻むとも下す能はじ。」田單曰く、「臣、五里の城、七里の郭、破亡の餘卒を以て、萬乘の燕を破り、齊の墟を復せり。狄を攻めて下されずとは何ぞや」と。車に上り、謝せずして去る。遂に狄を攻め、三月にして之に克たず。齊の嬰兒謠うて曰く、「大冠、箕の若く、脩劍、頤を拄ふ。狄を攻めて下す能はず、枯丘に壘す」と。田單乃ち懼れて魯仲子に問うて曰く、「先王、單の狄を下す能はざるを謂ふ。請ふ其說を聞かん。」魯仲子曰く、「將軍の即墨に在るや、坐すれば蕢を織り、立てば則ち插を杖き士卒の爲めに倡へて曰く、『往く可し。宗廟亡びぬ。亡びて日尙し。何れの黨にか歸らん』と。此の時に當つて、將軍死するの心ありて、士卒生くるの氣なし。若き言を聞いては、泣を揮ひ臂を奮つて戰を欲せざるは莫かりき。此れ燕を破れる所以也。今に當つては、將軍東に夜邑の奉あり、西に菑上の虞あり、黃金帶に橫へて、淄・澠の間に馳す。生の樂ありて、死の心なし。勝たざる所以のもの也。」

孟嘗君爲レ從。

孟嘗君、從を爲す。公孫弘、孟嘗君に謂つて曰く、「君、人をして先づ秦王を觀

田單曰く、「單、心あり、先生之を志せ」と。明日乃ち氣を勵まし城に循ひ、矢石の所に立つて、乃ち枹を援つて之を鼓す。狄人乃ち下る。

一 魯仲連　二 小城の謂にて、卽墨の城をいふ　三 武官の冠、其形箕を倒にしたるに似たり。次の句と相對して容飾のいかめしきをいふ　四 長劍　五 說苑「壘二於梧丘一」とあり、こゝは字の誤なちんといふ。壘は壁壘也　六 いつまでも梧丘に屯し之を守つて狄を進み攻むる事なからんと也　七 蕢はモッコの類。土を運ぶ爲めの笊を織つて土功を助け　八 鍤に同じ、スキ也。すきを執つて土功を助け　九 唱也　十 進むべし、往きて戰ふべし　十一 鮑註には「亡ヲ見ルノ兆、其日已ニ久シ」といひ、正解には「已ニ死亡スベキノ日久シ」といへり　十二 鄉の意、生きて歸るべき所なしと也　十三 如レ此也　十四 倖也、前章末に見えたる加墨の領地　十五 煥也、夜邑は安平の東に在り、淄水は安平の西に在り、夜邑は租賦の樂あり、淄水には遊觀の樂あり、菑は淄に通ず　十六 句意未詳　十七 共に水の名　十八 よく記憶せられよ　十九 眞の元氣を奮ひ起して城に依り　二十 矢玉の飛び來る所、矢面　二十一 鼓を擊つ杖、自ら隨員に立ち攻太鼓を打つて指揮する也

公孫弘謂二孟嘘君一曰。君不レ如レ使三人先觀二秦王一。意者秦王帝王之主也。君恐不レ得レ爲レ臣。奚暇從以難レ之。意者秦王不肖之主也。君從以難レ之未レ晚。孟嘘君曰。善。願因請公往矣。公孫弘敬諾。以二車十乘一之レ秦。昭王聞レ之。面欲二愧レ之以レ辭。公孫弘見。昭王曰。薛公之地。大小幾何。

しむるに如かず。意ふに、秦王帝王の主ならんか、君恐らくは臣たるを得じ。奚の暇あつてか從して以て之を難まん。意ふに、秦王不肖の主ならんか、君從して以て之を難むも未だ晩からじ。」孟嘘君曰く、「善し。願はくは因て請ふ公の往かんことを」と。公孫弘敬んで諾し、車十乘を以て秦に之く。昭王之を聞いて、之を愧かしむるに辭を以てせんと欲す。公孫弘見ゆ。昭王曰く、「薛公の地、大小幾何ぞ。」公孫弘對へて曰く、「百里なり。」昭王笑つて曰く、「寡人地數千里あるも、猶ほ未だ敢て以て難む有らず。今孟嘘君の地、方百里にして、因て以て寡人を難まんと欲す。猶ほ可ならんや。」公孫弘對へて曰く、「孟嘘君、人を好む、大王、人を好まず。」昭王曰く、「孟嘘君の人を好むや奚如。」公孫弘曰く、「義として天子に臣たらず、諸侯に友たらず、志を得ば人主と爲るを慙ぢず、志を得ずんば人臣と爲るを肯んぜじ、此の如き者三人。而く治むること管・商の師たる可く、義を說び行を聽き、能く其主を霸王に致さん、此の如き者五人。萬乘の嚴主たるも、其使者を辱しめ

何。公孫弘對曰。百里。昭王笑而曰。寡人地數千里。猶未二敢以有レ難也。今孟嘘君之地方百里。而因欲三以難二寡人一。猶可哉。公孫弘對曰。孟嘘君好レ人。大王不レ好レ人。昭王曰。孟嘘君之好レ人也奚如。公孫弘曰。義不レ臣二乎天子一。不レ友二乎諸侯一。得レ志不レ慙レ爲二人主一。不レ得レ志不レ肯レ爲二人臣一。如レ此者三人。而治可レ爲二管商之師一。說レ義聽レ行。能致二其主霸王一。如レ此者五人。萬乘之嚴主也。辱二其使者一。退而自刎。必以二其血一汙二其衣一。如レ臣者十人。昭王笑而謝レ之曰。客胡爲若レ此。寡人直與レ客論耳。寡人善二孟嘘君一。欲三客之必諭二寡人之志一也。公孫弘曰。敬諾。公孫弘可レ謂レ不レ侵矣。昭王大國也。孟嘘君千乘也。立二千乘之義一。而不レ可レ陵。可レ謂レ足レ使矣。

ば、退いて自ら刎ね、必ず其血を以て其衣を汚さん、臣の如き者十人」と。昭王笑つて之に謝して曰く、「客胡爲れぞ此の若くなる。寡人直だ客と論ずる耳。寡人孟嘘君を善す。客の必ず寡人の志を諭さんを欲す。」公孫弘曰く、「敬んで諾す」と。公孫弘、侵されずと謂ふ可し。昭王は大國也、孟嘘君は千乘也。千乘の義を立てて陵ぐ可らず。使するに足れりと謂ふ可し。

一 合從　二 觀察せしむ　三 若し秦王明主ならば、君は必ず亡び、生きて臣たらんとするも得じ、況や合從の盟主となりて秦王の業を妨ぐる事など思ひもよらじとの意ならん　四 秦王也　五 孟嘘君　六 人の政策を妨害す　七 其の德が人主たる位にかなふ也　八 去て顧みざる也　九 能の如く讀む　一〇 管仲商鞅にまさる　一一 人主が其賢人の也　一二 暗に秦王にあてつけていふ也　一三 公孫弘に對する敬稱　一四 孟嘘君の事について　一五 十分孟嘘君が晩る樣に願ふ　一六 以下記事の辭也

魯仲連謂孟嘗君曰。君好士未也。雍門子椒亦養士未也。陽子養椒亦陽子養。飲食衣裘與之同之。皆得其死。今君之家。富於二公。而士未有爲君盡游者也。君曰。文不得是二人故也。使文得二人者。豈獨不得盡。對曰。君之廐馬百乘無捶不下被繡衣而食粟者。豈有騏驎騄耳哉。後宮十妃。皆衣縞紵。食粱肉。豈有毛嬙西施哉。今之好士未也。

魯仲連、孟嘗君に謂つて曰く、「君の士を好むは未だし。雍門子椒亦を養ひ、陽子を養ふ、飲食衣裘之と同じうし、皆其死を得たり。今君の家、二公より富めども、士未だ君の爲めに游を盡す者あらず。」君曰く、「文、是の二人を得ざるが故也。文をして二人を得しめば、豈に獨り盡すを得ざらんや。」對へて曰く、「君の廐馬百乘繡衣を衣て粟を食はざる者なし。豈に騏驎・騄耳あらんや。後宮十妃、皆縞紵を衣、粱肉を食ふ。豈に毛嬙、西施あらんや。色と馬とは今の世に取る。士何ぞ必らずしも古を待たんや。故に曰く、君の士を好むは未だしと。」

一 原文其養ひたる人名を脱す　二 二人皆其養ひたる士の死力を得たり　三 雍門子と陽子　四 士の中に君から十分交遊の道を盡されたる者なし　五 孟嘗君　六 田文卽ち孟嘗君の名の自稱　七 椒亦等也、彼の二人の如き傑士　八 游を盡す、交游の道を盡して十分に優遇する　九 文采美しき錦の上衣　一〇 菽は豆、上等の飼料也　一一 名馬、騄耳は穆王八駿の一　一二 縞は絹の精なるもの、紵はかたしむを織つて布と爲したるもの、要するに上等の布帛也　一三 粱は上等の精白米といふ類　一四 古美人の名　一五 美人

王建

秦破趙長平。齊楚救之。秦計曰。齊楚救趙。親則將退兵。不親則且遂攻之。趙無以食。請粟於齊。而齊不聽。蘇子謂齊王曰。不如聽之以却秦兵。不聽。則秦兵不却。是秦之計中。而齊楚之計過矣。且趙之於齊楚。隱蔽也。猶離之粟上者。豈有騏驎騄耳哉。後宮十妃。皆衣縞紵。食粱肉。豈有毛嬙西施哉。今之世。士何必待古哉。故曰。君之好士未也。

秦、趙の長平を破る。齊・楚之を救ふ。秦計つて曰く、「齊・楚、趙を救ふ。親しくば則ち將に兵を退けん。親しからずんば則ち且に遂に之れを攻めんとす」と。趙以て食するもの無く、粟を齊に請ふ。而るに齊聽かず。蘇子、齊王に謂つて曰く、「之を聽いて以て秦の兵を却けんに如かず。聽かずんば則ち秦兵却かじ。是れ秦の計中つて、齊・楚の計過つなり。且つ趙の齊・楚に於ける、隱蔽也。猶ほ齒の脣あるがごとし。脣亡ぶれば則ち齒寒し。今日趙を亡ぼさば、則ち明日齊・楚に及ばん。且つ夫れ趙を救ふの務は、宜しく漏甕を奉じて燋釜に沃ぐが若くなるべし。夫れ趙を救ふは高義也。秦兵を却くるは顯名也。義、亡趙を救ひ、威、强秦の兵を却く。此を爲すを務めずして、粟を愛むを務む。則ち國の爲めに計ること過てり。」

有レ脣也。脣亡則齒寒。今日亡レ趙。則明日及二齊楚一矣。且夫救レ趙之務。宜レ若レ奉二漏甕一沃中燋釜上。夫救レ趙高義也。却二秦兵一顯名也。義救二亡趙一威却二強秦兵一。不レ務レ爲レ此。而務レ愛レ粟。則爲レ國計者過矣。

或謂二齊王一曰。周韓西有二強秦一。東有二趙魏一。秦伐二周韓之西一。趙魏不伐二周韓一爲割。韓却周害也。及二韓却周害之後一。趙魏亦不レ免二與秦爲レ患矣。今齊秦伐二

㊀ 二國が趙と交り親しくば將に我秦兵を退けん　㊁ 粟の以て食ふべきなし　㊂ 兵糧　㊃ おはひかくす者。趙は秦と二國との間に在るを以て斯く謂ふ　㊄ 脣が無くなれば齒が寒くなる、關係深く相隣れる一國が亡ぶれば他國も危ふくなる喩　㊅ 水のもるかめを捧げてやけつく釜に水をそゝぎ足す如くすべし、愚圖々々してゐては不可なる喩

或るひと齊王に謂つて曰く、「周・韓、西に強秦あり、東に趙・魏あり。秦、周・韓の西を伐ち、趙・魏又周・韓を伐ちて割くを爲さば、韓却され周害せられん。韓却され周害せらるゝの後に及ばゞ、趙・魏亦秦に患せらるゝを免かれじ。今齊・秦、趙・魏を伐つは、則ち亦趙・魏の秦に應じて周・韓を伐つに異ならじ。今齊、秦に入つて趙・魏を伐たば、趙・魏亡ぶるの後、秦東面して齊を伐たん。齊安くんぞ天下に救はるゝを得んや。」

㊀ 原文「不」は「又」の誤　㊁ 秦の爲めに其地を割取す、卽ち下文に所謂秦に應じて周韓を伐つ也　㊂ 原文「却」は二字共に「却」の誤　㊃ 與は於の如き意といふ。二國秦の爲めに伐たるゝを免れじと也　㊄ 原文「果」は「異」の誤

趙魏則亦不果於趙魏之應秦而伐二周韓一。今齊入二於秦一而伐二趙魏一。趙魏亡之後。秦東面而伐レ齊。齊安得レ救二天下一乎。

國子曰。秦破二馬服君之師一圍二邯鄲一。齊魏亦佐レ秦伐二邯鄲一。齊取二淄鼠一。魏取二伊氏一。公子無忌爲二天下一循二便計一。殺二晉鄙一。率二魏兵一以救二邯鄲之圍一。使三秦弗レ有而失二天下一。是齊入二於魏一而救二邯鄲一之功

國子曰く、「秦、馬服君の師を破り邯鄲を圍む。齊・魏亦秦を佐けて邯鄲を伐ち、齊は淄鼠を取り、魏は伊氏を取る。公子無忌天下の爲めに便計に循つて晉鄙を殺し、魏の兵を率ゐて、以て邯鄲の圍を救ひ、秦をして有せずして天下を失はしむ。是れ齊、魏に入つて、邯鄲を救ふの功也。安邑は魏の柱國也。晉陽は趙の柱國也。鄢郢は楚の柱國也。故に三國、秦と壤界す。秦、魏を伐つて安邑を取り、趙を伐つて晉陽を取り、楚を伐つて鄢・郢を取り、三國の軍を覆へし、二周の地を兼ね、韓氏を舉げて其地を取らば、且に天下の半ならんとす。今又趙・魏を刦かし、中國を疏くし、衞の東野を割き、魏の河南を兼ね、趙の東陽を絕たば、則ち趙・魏亦危ふからん。趙・魏危ふきは、則ち齊の利に非ず。韓・魏・趙・楚の志、秦の天

也。安邑者。魏之柱國也。晉陽者。趙之柱國也。鄴鄆者。楚之柱國也。故三國與秦壤界。秦伐魏取安邑。伐趙取晉陽。伐楚取鄴鄆矣。覆三三國之軍。兼二二周之地。舉二韓氏一取二其地一。且三天下之半。今又刦二趙魏一。疏二中國一。封二衛之東野一。兼二魏之河南一。絕二趙之東陽一。則趙魏亦危矣。趙

下を兼ねて其君を臣とせんを恐る。故に兵を專らにし志を一にして以て秦を逆ぐ。三國の秦に與ぐるは壤界して患急なり。齊は秦と壤界せずして患緩かなり。是を以て天下の勢齊に事へざるを得ざる也。故に秦、齊を得ば、則ち權中國に重く、趙・魏・楚、齊を得ば、則ち以て秦に敵するに足らん。故に秦・楚・趙・魏、齊を得る者は重く、齊を失ふ者は輕し。齊此勢ありて、以て天下に重んぜらるゝ能はざるは何ぞや。其用ふる者過てば也。」(一九)

一 齊の大夫 二 趙括 三 軍。秦將白起、趙括の四十萬の衆を長平に阬にし、進んで邯鄲を圍む 四 趙の都 五 次の伊氏と共に趙の地名 六 魏の信陵君 七 便宜の計を行ひ 八 魏の將。秦の邯鄲を圍むや魏は晉鄙をして師を帥ゐて之を救はしむ、晉鄙は秦を畏れて敢て進まず、信陵君終に晉鄙を殺して軍を取り趙を救ふ、秦軍圍を解いて去る、史記信陵君列傳を參照せよ 九 邯鄲を有せず、乃ち天下を兼有する能はず 一〇 齊初め秦を佐けしも後に魏に應じて趙を救ひし功也 一一 都。都の國に於けるは室の柱有るが如しと也 一二 其地相接す、境を接す 一三 秦の領土は將に 一四 中國の交りを分離し 一五 割也 一六 天下を一統するをいふ 一七 拒也 一八 齊の心を得て之と與にす 一九 國政を用ふるの取計ひ當を得ず。此章は齊の宜しく三國と合して秦を拒ぐべきを言ふ也

齊王使二使者一問二趙威后一。書未レ發。威后問二使者一曰。歲亦無レ恙耶。民亦無レ恙耶。王亦無レ恙耶。使者不レ說曰。臣奉レ使使二威后一。今不レ問レ王。而先問二歲與レ民。豈先レ賤而後二尊貴一者乎。威后曰。不レ然。苟無レ歲。何以有レ民。

魏危。則非二齊之利一也。韓魏趙楚之志。恐レ秦兼二天下一而臣中其君。故專レ兵一レ志以逆レ秦。三國之與レ秦壤界。而患急。齊不二與レ秦壤界一而患緩。是以天下之勢。不レ得レ不レ事レ齊也。故秦得レ齊。則權重二於天下一者。何也。其用者過也。

齊王、使者をして趙の威后を問はしむ。書未だ發かず、威后使者に問うて曰く、「歲亦恙なきや、民亦恙なきや、王亦恙なきや」と。使者說ばずして曰く、「臣、使を奉じて威后に使す。今王を問はずして、先づ歲と民とを問ふ。豈に賤を先にして、尊貴を後にする者ならずや。」威后曰く、「然らず。苟くも歲なくんば、何を以てか民あらん。苟くも民なくんば、何を以てか君あらん。惡くんぞ本を問ふを舍いて末を問ふ者あらんや」と。乃ち進めて之に問うて曰く、「齊に處士あり、鍾離子と曰ふ。恙なきや。是れ其の人と爲り、糧ある者も亦食ましめ、糧なきも者亦食ましむ。衣ある者も亦衣せ、衣なき者も亦衣す。是れ王を助けて其民を養ふ者也。何を以て今に至るまで業あらしめざるや。葉陽子恙なきや。是れ其の人と爲り、

苟無民。何以有君。惡有舍問本而問末者耶。乃進而問之曰。齊有處士二曰鍾離子。無恙耶。是其爲人也。有糧者亦食。無糧者亦食。有衣者亦衣。無衣者亦衣。是助王養其民者也。何以至今不業也。葉陽子無恙乎。是其爲人。哀鰥寡。卹孤獨。振困窮。補不足。是助王息其民者也。何以至今不業也。北宮之女嬰兒子無恙耶。徹其瑱。瑱至老不嫁。以養父母。是其率民而出於孝情者也。胡爲至今不朝也。此二子弗業。一女不朝。何以王齊國。子萬民乎。於陵子仲尚存乎。是其爲人也。上不臣於王。下不治其家。中不索交諸侯。此率民而出於無用者。何爲至今不殺乎。

(一)鰥寡を哀れみ、孤獨に卹み、困窮を振ひ、不足を補ふ。是れ王を助けて其民を息んずる者也。何を以て今に至るまで業あらしめざるや。北宮の女嬰兒子恙なきや其環瑱を徹し、老に至るまで嫁せずして、以て父母を養ふ。是れ其民を率ゐて孝情に出でしむる者也。胡爲れぞ今に至るまで朝せしめざる。此の二士業あらず、一女朝せず、何を以てか齊國に王とし、萬民を子とせん。於陵の子仲尚ほ存せりや。是れ其の人と爲り、上、王に臣たらず、下、其家を治めず、中、交を諸侯に索めず。此れ民を率ゐて無用に出でしむる者なり。何爲れぞ今に至るまで殺さざるや。」

一 威后の安否を問はしむ　二 其封を開かざるに也。一說には、未だ奉ちざるにの義とす　三 歲の豐凶を問ふ　四 王の使命を奉じて威后を問安す、威后にありても宜しく王の安否を問はるべき也然るに　五 氣節順當なるにあらずば　六 端を改めて更に問はんとす、故に使者をして更に其座を進ましむる也。但「進んで」と訓ずるも亦通ずべきか　七 衣糧の有無を問はず如何なる人物にも恩惠を施すと也　八 位にありて其職業を爲すを得ざるを言ふ　九 やもをやもめ　一〇 みなしごや老いて子なき者　一一 北宮は里の名、嬰兒子は女子の名也　許

齊閔王之遇殺。其子法章變姓名。爲莒太史家庸夫。太史敫女奇法章之狀貌。以爲非常人。憐而常竊衣食之。與私焉。莒中及齊亡臣相聚。求閔王子。欲立之。

齊の閔王の殺に遇ふや、其子法章、姓名を變じ、莒の太史家の庸夫となる。太史敫の女、法章の狀貌を奇とし、以て常人に非ずと爲し、憐れんで常に竊かに之に衣食し、與に私す。莒中及び齊の亡臣相聚まつて、閔王の子を求め、之を立てんと欲す。法章乃ち自ら莒に言ふ。共に法章を立てゝ襄王となす。襄王立つや、太史氏の女を以て王后となし、子建を生めり。太史敫曰く、「女、媒なくして嫁ぐ者は、吾が種に非ず。吾が世を汙せり」と。終身覩ず。君王后賢なり。覩られざるの故を以て、人子の禮を失はず。襄王卒す。子建立つて齊王と爲る。君王后、

[illegible]は「幼ニシテ人ニ嫁セズ故ニ嬰兒子ト稱スルカ」といへり　一二 瑱は耳玉、環は帶に佩く環、徹は撤に同じ去る意、凡て女子の詩とする裝飾を去るをいふ也　一三 參朝を許さざるや　一四 地名　一五 存生

法章乃自言於莒。共立法章爲襄王。襄王立。以太史氏女爲王后。生子建。太史敫曰。女無媒而嫁者。非吾種也。汙吾世矣。終身不視。君王后賢。不以不視之故。失人子之禮也。襄王卒。子建立爲齊王。君王后事秦謹。與諸侯信。以故建立四十有餘年。不受兵。秦昭王

秦に事へて謹み、諸侯と信あり。故を以て、建立つて四十有餘年、兵を受けず。秦の昭王嘗て使者を遣り、君王后に玉連環を遺つて曰く、「齊に智多し、能く此環を解くや不や」と。君王后以て群臣に示す。群臣解くを知らず。君王后椎を引いて之を椎破し、秦の使に謝して曰く、「謹んで以て解く」と。君王后病んで且に卒せんとするに及び、建を誡しめて曰く、「群臣の用ふ可き者は某」と。建曰く、「請ふ之を書せん。」君王后曰く、「善し」と。筆牘を取つて言を受く。君王后曰く、「老婦已に忘れたり」と。君王后死す。後に、后勝、齊に相たり。多く秦間の金玉を受け、賓客をして秦に入らしむ。皆變辭を爲し、王に秦に朝せんことを勸め、攻戰の備を修めざらしむ。

一 楚の將淖齒に殺さる　二 備夫。其圉丁となりし事前に見ゆ、太史は王室の記錄を掌る官　三 衣食を與ふる　四 私通　五 莒の中の人及び齊の臣にて今は逃亡して諸所に流浪せる人々　六 自ら其の太子たる事を名乘る　七 一代の歷史　八 對面せず　九 玉製にして兩環相連なりたるもの、智惡の環の類　一〇 智者　一一 其智萬に富みたるをいふ也　一二 誰それ　一三 王建が也。牘は書版、筆と書き板とを取りて　一四 鮑註には「蓋し建が心受せざるを怒り、託するに病篤を以てするのみ」といひ、岡井叔皮は病の篤きをいふ也、賢后いかで建の小過を怒りて國家を誤る事あらんと反駁せり　一五 秦の間者の贈物を取り　一六 其賓客は亦皆秦の賄賂を受くる者なるを以て何れも體よき詐言を爲し。變辭は變詐の辭と註す、程のよい事、あためごかしといふ類也

嘗遣二使者一。遺二君王后玉連環一曰。齊多レ智。能解二此環一不。君王后以示二群臣一。群臣不レ知レ解。君王后引レ椎椎二破之一。謝二秦使一曰。謹以解矣。及二君王后病且レ卒一。誡レ建曰。群臣之可レ用者某。建曰。請書レ之。君王后曰。老婦已忘矣。君王后死。後后勝相レ齊。多受二秦間金玉一。使二賓客入レ秦。皆爲二變辭一。勸二王朝レ秦。不レ修二攻戰之備一。

齊王建入二朝於秦一。雍門司馬前曰。所レ爲レ立レ王者。爲二社稷一耶。爲レ王立レ王耶。王曰。爲二社稷一。司馬曰。爲二社稷一立レ王。王何以去二社稷一而入レ秦。齊

齊王建、秦に入朝す。雍門の司馬前んで曰く、「王を立つるを爲す所のものは、社稷の爲めにか、王の爲めに王を立つるか。」王曰く、「社稷の爲めに王を立てば、王何を以て社稷を去つて秦に入るや」と。齊王、車を還して反る。卽墨の大夫、雍門の司馬が諫めて聽かれしと聞き、則ち以爲へらく、以て謀を爲す可しと。卽ち入つて齊王に見えて曰く、「齊の地、方數千里、帶甲數十萬あり。夫の三晉の大夫、皆秦を便とせずして、阿・鄄の間に在る者百

王遂車而反。卽墨大夫聞之雍門司馬諫而聽之。則以爲可以爲謀。卽入見齊王曰。齊地方數千里。帶甲數十萬。夫三晉大夫。皆不便秦。而在圍鄄之間者百數。王收而與之十萬之衆。使收三晉之故地。卽臨晉之關。可以入矣。鄄鄄大夫。不欲爲秦。而在城南下者百

數あり。王收めて之に十萬の衆を與へ、三晉の故地を收めしめば、卽ち臨晉の關以て入る可し。鄄・鄄の大夫、秦の爲めにするを欲せずして、城南の下に在る者百數あり。王收めて之に十萬の師を與へ、楚の故地を收めしめば、卽ち武關以て入る可し。此の如くせば、則ち齊の威立つ可く、秦國亡ぼす可し。南面の制を稱するを舍いて、乃ち西面して秦に事ふ。大王の爲めに取らざる也」と。齊王聽かず。秦、陳軫をして齊王を誘うて之を內れしめ、五百里の地を與へんと約す。齊王、卽墨の大夫に聽かずして、陳軫に聽き、遂に入る。秦之を共の松栢の間に處らしむ。餓ゑて死す。是より先き、齊之が爲めに歌うて曰く、「松か栢か、建を共に住ましむる者は客か」と。

一 齊の城門の名、司馬は官名　二 國家　三 軍隊　四 韓魏趙　五 秦に從ふを利とせず　六 二個の齊の地名　七 秦に入ちんとする關の名。通鑑の註に「三晉兵ヲ收メ河東ヨリ秦ヲ攻ムレバ則チ臨晉關ニ入ラン」　八 楚の二個の地名　九 齊城の南　一〇 秦の南關　一一 天下に王たるを捨てて　一二 齊の賓客にて秦に入れる者なちん　一三 共は地名、齊松栢は塞の名、趙が松栢を植ゑて秦と界を爲したるものにて當時秦の有たりし也と

數。王收而與之十萬之師。使收楚故地。卽武關可以入矣。如此。則齊威可立。秦國可亡矣。舍南面之稱制。乃西面事秦。爲大王不取也。齊王不聽。秦使陳軫誘齊王內之。約與五百里之地。齊王不聽。卽墨大夫。而聽陳軫。遂入。秦處之共松栢之間。餓而死。先是。齊爲之歌曰。松耶栢耶。住建共者客耶。

いふ　一四 秦が食を與へざりし也　一五 歌意に關し諸說紛々たれど、要するに建を共に住ませしは松にあらず栢にあらず將た客にもあらずして、建自身忠諫を用ひざりしの致す所也と痛歎せるにや

齊楚構ㇾ難。宋請二中立一。齊急ㇾ宋。宋許ㇾ之。子象爲ㇾ楚謂二宋王一曰。楚以ㇾ緩失ㇾ宋。將ㇾ法二齊之急一也。齊以ㇾ急得ㇾ宋。後將二常急一矣。是從ㇾ齊而攻ㇾ楚。宋二必利一也。齊戰ㇾ勝ㇾ楚。勢必危ㇾ宋。不ㇾ勝。是以二弱宋一干二强楚一也。而令二兩萬乘之國。常以ㇾ急求ㇾ所ㇾ欲。國必危矣。

㊀ 宋の爲めに也 ㊁ 齊楚 ㊂ 宋の國家

卷第五

楚

宣王

齊・楚難を構へ、宋中立せんと請ふ。齊、宋に急にす。宋之に許す。子象、楚の爲めに宋王に謂つて曰く、「楚、緩を以て宋を失へり。將に齊の急に法らんとす。齊、急を以て宋を得たれば、後將に常に急ならんとす。是れ齊に從つて楚を攻むるなり、未だ必ずしも利ならざる也。齊戰つて楚に勝たば、勢ひ必ず宋を危くせん。勝たずんば、是れ弱宋を以て强楚を干す也。而して兩萬乘の國をして、常に急を以て欲する所を求めしめば、國必ず危ふからん。」

㊀ 戰端を開かんとし ㊁ 齊楚共に宋に援を乞ふ故に宋は中立を請ふ也 ㊂ 齊迫して援をまむ、所謂高壓手段也 ㊃ 楚人 ㊄ 遷和の手段を以てせし故宋の援を失へり ㊅ 今後齊の宋に對する常に必ず高壓手段を用ひん

邯鄲之難。昭奚恤謂二楚王一曰。王不ㇾ如二無ㇾ救ㇾ趙而以强ㇾ魏。魏强。其割ㇾ趙必深矣。趙不ㇾ能ㇾ聽。則必堅守。是兩敝也。景舍曰。不ㇾ然。昭奚恤不ㇾ知也。夫魏之攻ㇾ趙也。恐三楚之攻二其後一。今不ㇾ救ㇾ趙。趙有二亡形一。而魏無二

邯鄲の難に、昭奚恤、楚王に謂つて曰く、「王、趙を救ふ無くして以て魏を强くせんに如かず。魏强くば、其の趙を割くや必ず深からん。趙聽く能はずんば、則ち必ず堅く守らん。是れ兩つながら敝ゆる也。」景舍曰く、「然らず。昭奚恤知らざる也。夫れ魏の趙を攻むるや、楚の其後を攻めんを恐る。今趙を救はずんば、趙亡形あつて、魏・楚の憂なし。是れ楚・魏、趙を共にする也、割必ず深からん。何を以てか兩つながら敝えん。且つ魏、兵を合せて以て深く趙を割かば、趙亡形を見て、楚の己を救はざるを知るや、必ず魏と合して以て楚を謀らん。故に王少しく兵を出して、以て趙の援を爲すに如かず。趙、楚の勁きを恃んで必ず魏と戰はん。魏は趙の勁きを怒り、而して楚の救の畏るゝに足らざるを見ば、必ずや趙

楚憂。是楚魏共趙也。害必深矣。何以兩敵也。且魏令兵以深割趙。趙見亡形。而知楚之不救己也。必與魏合而以謀楚。故王不如少出兵以爲趙援。趙恃楚勁。必與魏戰。魏怒於趙之勁。而見楚救之不足畏也。必不釋趙。趙魏相敵。而齊秦應楚。則魏可破也。楚因使景舍起兵救趙。邯鄲拔。楚取睢濊之閒。

を釋てじ。趙・魏相敵えて、齊・秦、楚に應ぜば、則ち魏は破る可し」と。楚因て景舍をして兵を起して趙を救はしむ。邯鄲拔け、楚、睢・濊の閒を取る。

一 魏が趙を伐ちたる時 二 楚の王族、時に楚の相たり 三 趙魏兩國相持す、必ず俱に敵えん 四 趙を救ひて魏の後を攻むるを恐る 五 亡ぶべき形勢 六 共に趙を攻むると同じ譯也 七 原文「害」は「割」の誤といふ說に從ふ、趙は堅守する能はず必ず深く地を割きて以て魏に與つて和せんと也 八 原文「合」は「合」の誤といふ說による、魏は始め楚の其後を攻めんを恐れ、兵を分つて以て之に當つ、今楚の趙を救はざるを知ちば兵を合せて趙を攻めんとなるべし 九 烈しく趙を攻め立てん 一〇 楚が魏を攻むるの時に應じて亦之を伐たば 一一 二つの川の名、魏の地を取りたるを謂ふ

江乙爲魏使於楚。謂楚王曰。臣入境聞。楚之俗不蔽人之善。不言人之惡。誠有之乎。王曰。誠有之。江乙曰。然則白公之亂得無遂乎。誠如是。臣等之罪免矣。楚王曰。何也。江乙曰。州侯相楚。貴甚矣。而主斷。左右俱曰。無有。如出一口矣。

江乙、魏の爲めに楚に使す。楚王に謂つて曰く、「臣、境に入つて聞けり、楚の俗、人の善を蔽はず、人の惡を言はずと。誠に之ありや。」王曰く、「誠に之あり。」江乙曰く、「然らば則ち白公の亂遂ぐる無きを得んや。誠に是の如くんば臣等の罪免かれん。」楚王曰く、「何ぞや。」江乙曰く、「州侯、楚に相として、貴きこと甚だしくして、斷を主る。左右俱に曰ふ、『有る無し』と。一口に出づるが如し。」

一 魏人 二 太子建の子勝也、其父建太子讒言に依りて鄭に走りしかば、鄭は後難を恐れて之を殺す、白公鄭を伐たんと請ひしに宰臣子西その言を聽かず、白公遂に子西を殺し、其當時の國王たりし惠王を脅かして國亂を起したるも其罪を免れしをいふ、事左傳哀公十六年の條に見ゆ 三 斯る大亂をも成さざるを得んや 四 人の罪を言はざれば也 五 頃襄王の宰臣也、俱、年代に數十年の差あり、別人かといふ 六 國政を專決す 七 專斷の事あるなしといふ、卽ち人の惡を言はざる也 八 多人數の言ふ所皆一致せり

荊宣王問羣臣曰。吾聞北方之昭奚恤之畏也。果誠何如。羣臣莫對。江乙對曰。虎求百獸而食之。得狐。狐曰。子敢食我也。子之食我。是逆天帝命也。子以爲不信。爲子爲百獸走。孰敢不走。吾視其所以畏者。而已畏昭奚恤也。今子與中國之大。

荊の宣王、羣臣に問うて曰く、「吾れ北方の昭奚恤を畏るゝを聞く、果して誠に何如」と。羣臣對ふる莫し。江乙對へて曰く、「虎百獸を求めて之を食はんとし、狐を得たり。狐曰く、『子敢て我を食ふ無かれ。天帝、我をして百獸に長たらしむ。今子我を食はゞ、是れ天帝の命に逆ふ也。子我を以て信ならずと爲さば、吾れ子

之。得レ狐。狐曰。子無二敢食レ我也。天帝使二我長二百獸一。今子食レ我。是逆二天帝命一也。子以レ我爲レ不レ信。吾爲二子先行一。子隨二我後一。觀二百獸之見レ我而敢不レ走乎。虎以爲レ然。故遂與レ之行。獸見レ之皆走。虎不レ知二獸畏レ己而走一也。以爲畏レ狐也。今王之地。方五千里。帶甲百萬。而專屬二之昭奚恤一。故北方之畏二奚恤一也。其實畏二王之甲兵一也。猶二百獸之畏レ虎也。

昭奚恤與二彭城君一議二於王前一。王召二江乙一而問焉。江乙曰。二人之言皆善也。臣不三敢言二其後一。言二其後一。此謂レ慮レ賢也。

の先行たらん。子我が後に隨つて、百獸の我を見て敢て走らざるかを觀よ』と。虎以て然りと爲す。故に遂に之と與に行く。獸之を見て皆走る。虎、獸の己を畏れて走るを知らず、以爲らく狐を畏るゝ也と。今王の地、方五千里、帶甲百萬あつて、專ら之を昭奚恤に屬す。故に北方の奚恤を畏るゝは、其實は王の甲兵を畏るるなること、猶ほ百獸の虎を畏るゝがごとき也。」

㊀ 楚 ㊁ 楚は南方の國なるゆゑ中國即ち本土の諸國を指して斯くいふ也 ㊂ 「虎の威を假る狐」の出典 ㊃ 軍卒

昭奚恤、彭城君と、王の前に議す。王、江乙を召して問ふ。江乙曰く、「二人の言皆善し。臣敢て其後に言はじ。其後に言ふは、此れを賢を慮らしむと謂ふ」と。

江尹欲レ惡二昭奚恤於楚王一。而力不レ能。故爲二梁山陽君一請二封於楚一。楚王曰。諾。昭奚恤曰。山陽君無レ功二於楚國一。不レ當レ封。江尹因得二山陽君一與レ之共惡二昭奚恤一。

江尹、昭奚恤を楚王に惡せんと欲すれども、力能はず。故に梁の山陽君の爲めに、封を楚に請ふ。楚王曰く、「諾」と。昭奚恤曰く、「山陽君、楚國に功なし。當に封ずべからず」と。江尹因て山陽君を得て、之と與に昭奚恤を惡せり。

㊀ 楚人なちん ㊁ 鮑註に「慮ハ猶ホ疑ノゴトシ、賢者ノ言善シ、已レ復タ之ヲ言ハズ、將ニ王ヲシテ彼ヲ疑ヒ之ヲ思慮セシメントス」とあり、つまり王が折角信用して聞き居らるゝ所を横合より口を出しては却て之を疑はしむる事となる故一切可否の意見を述べずとなちん、要するに讒言の可否を言はずして却て王をして二人の人物を疑はしむる反面的陰險手段と見るべし

㊀ 江乙也 ㊁ 惡しざまにいひて用ひられざらしむ ㊂ 魏 ㊃ 山陽君の昭奚恤を怨めるを利用し之を同志として共に昭奚恤を惡したり

魏氏惡二昭奚恤於楚王一。楚王告二昭子一。昭子曰。臣朝夕

魏氏、昭奚恤を楚王に惡す。楚王、昭子に告ぐ。昭子曰く、「臣、朝夕、事を以て命を聽く。而るに魏、吾が君臣の間に入る。臣大いに懼る。臣、魏を畏るゝに

以レ事聽レ命。而魏入二吾君臣之間一。臣大懼。臣非レ畏レ魏也。夫泄二吾君臣之交一。而天下信レ之。是其爲レ人也近レ苦。夫苟不レ雖レ爲二之外一。豈忘レ爲二之內一乎。臣之得レ罪無レ日矣。王曰。寡人知レ之。大夫何患。

江乙惡二昭奚恤一。謂二楚王一曰。人有下以二其狗一爲レ有レ執而愛上之。其狗嘗溺レ井。其鄰人見二狗之溺レ井也。

非ず。夫れ吾が君臣の交を泄して、天下をして之を信ぜしむる。是れ其の人たる君に近からむ。夫れ苟くも之を外にするを難からず、豈に之を內にするを忘れんや。臣の罪を得る日なからん。」王曰く、「寡人之を知る。大夫何ぞ患へんや。」

一 魏王也、魏の臣にして今は使ひして楚にある江乙をして中傷せしめしならん　二 王命によりて政事を行ふ諸侯の意にて魏をいふ也　四 原文「苦」は「君」の誤といふ。君臣の交を泄す者は必ず君の左右親近の人ならん　五 既に君臣の交を外に泄し外國をして之を離間せしむる位のものなれば、いかで內に讒を構へて君臣の間を割かざるべき　六 近き內にあらん

江乙、昭奚恤を惡し、楚王に謂つて曰く、「人其の狗を以て執るありとして之を愛する有り。其狗嘗て井に溺す。其隣人、狗の井に溺するを見て、入つて之を言はんと欲す。狗之を惡み、門に當つて之を噬む。鄰人之を憚れ、遂に入つて言ふを得ざりき。邯鄲の難に、楚、兵を進めば、大梁取れたらんを、昭奚恤、魏の寶

欲二入言一之。狗惡レ之。當レ門而噬レ之。鄰人憚レ之。遂不レ得二入言一。邯鄲之難。楚進レ兵。大梁取矣。昭奚恤取二魏之寶一。以二臣居レ魏知一之。故昭奚恤常惡二臣之見一王。

江乙欲レ惡二昭奚恤一於楚。謂二楚王一曰。下比周則上危。下分爭則上安。王亦知レ之乎。願王勿レ忘也。且人有下好レ揚二人之善一者上於レ王何如。王曰。此君子也。近レ

器を取れり。臣、魏に居て之を知れるが故に、昭奚恤、常に臣の王に見ゆるを惡む」と。

一 よく夜を守る能ありとして之を愛せり　二 小便す　三 飼主に告げんとす　四 魏の趙を伐ちたるをいふ、前に出でたり　五 魏の都　六 賄賂として寶器を取りて因て兵を進めざりし也

江乙、昭奚恤を楚に惡せんと欲し、楚王に謂うて曰く、「下比周すれば則ち上危く、下分爭すれば則ち上安しと、王亦之れを知るか。願はくば王忘るゝ勿れ。且つ人、人の善を揚ぐるを好む者あらば、王に於て何如。」王曰く、「此れ君子也。之を近づけん。」江乙曰く、「人、人の惡を揚ぐるを好む者あらば、王に於て何如。」王曰く、「此れ小人也。之を遠さけん。」江乙曰く、「然らば則ち且に子其父を殺さんとし、臣其主を殺さんとする者あるも、王終に已に知らざる者あらん。何となれ

之。江乙曰。有下人好レ揚二人之惡一者。於レ王何如。王曰。此小人也。遠レ之江乙曰。然則且有下子殺二其父一。臣殺二其主一者。而王終已不レ知者。何也。以下王好レ聞二人之美一。惡レ聞二人之惡一也。王曰。善。寡人願兩聞レ之。

江乙說二於安陵君一曰。君無二咫尺之功一。骨肉之親一。處二尊位一。受二厚祿一。一國之衆。見レ君莫レ不二斂レ衽而拜一。撫委而服一。何以也。曰。王過舉以レ色。不レ然。無二以二王一レ此。江乙曰。以レ財交者。財盡而交絕。以レ色交者。華落而愛渝。是以嬖女不レ敝レ席。寵臣不レ避レ軒。今君擅二楚國之勢一。而無三以深自結二於王一。竊爲レ君危レ之。安陵君曰。然則奈何。江乙曰。願君必請二從レ死以レ身爲レ殉。如レ是。必長得レ重二於楚國一。曰。諾。受レ令。三年而弗レ言。江乙復

ば、王、人の美を聞くを好んで、人の惡を聞くを惡むを以て也。」王曰く、「善し。寡人願はくは兩つながら之を聞かん。」

㊀ 徒黨を組む、組合ひて惡を助けあふをいふ　㊁ 美も惡も兩方共に聞かん。斯くて江乙が昭奚恤を惡すべき土臺を固めたる也

江乙、安陵君に說いて曰く、「君、咫尺の功、骨肉の親なくして、尊位に處り、厚祿を受く。一國の衆、君を見て衽を斂めて拜し、撫委して服せざる莫し。何を以てぞや。」曰く、「王、過つて舉ぐるに色を以てす。然らずんば以て此に至る無けん。」江乙曰く、「財を以て交はる者は、財盡くれば交絕え、色を以て交はる者は、華落つれば愛渝る。是を以て嬖女は席を敝らず。寵臣は軒を罷らず。今君、楚國の勢を擅にして、而も以て深く自ら王に結ぶ無し。竊かに君の爲めに之を危ぶむ。」安陵君曰く、「然らば則ち奈何せん。」江乙曰く、「願はくは君必ず死に從つて身を以て殉を爲さんと請へ、是の如くせば必ず長く楚國に重んぜらるゝを得ん。」曰く、「謹んで命を受く」と。三年にして言はず。江乙復た見えて曰く、「臣君の爲めに道ふ所、今に至るまで未だ效あらず。君、臣の計を用ひずんば、臣請ふ敢て復た見えじ。」安陵君曰く、「敢て先生の言を忘れたるにあらず。未だ聞を得ざるなり」と。是に於て、楚王雲夢に游ぶ。結駟千乘、旌旗天を蔽ふ。野火の起る、雲蜺の若く、兕虎嘑ゆるの聲、雷霆の若し。狂兕あり、車に蹕り、輪に依つて至る。王親ら弓を引いて射、一發にして殪す。王、旃旄を抽いて兕首を抑へ、天を仰いで笑つて曰く、「樂しいかな、今日の游や。寡人萬歲千秋の後、誰と與にか此を樂しまん」と。安陵君、泣數行下りて、進んで曰く、「臣入つては則ち席を編ね、出でゝは則ち陪乘す。大王萬歲千秋の後、願はくは身を以て黃泉に試み、螻蟻に蓐するを得ん。又如何ぞ此の樂を得て之を樂まん」と。王大いに說び、乃

見曰。臣所二爲レ君道一。至レ今未レ效。君不レ用二臣之計一。臣請不二敢復見一矣。安陵君曰。不三敢忘二先生之言一。未レ得レ聞也。於レ是楚王游二於雲夢一。結駟千乘。旌旗蔽レ天。野火之起也。若二雲蜺一。兕虎嗥之聲若二雷霆一。有二狂兕一牂レ車依レ輪而至。王親引レ弓而射。一發而殪。王抽二旃旄一而抑三兕首一。仰レ天而笑曰。樂矣今日之游也。寡人萬歲千秋之後。誰與樂レ此矣。安陵君泣數行下。而進曰。臣入則編レ席。出則陪乘。大王萬歲千秋之後。願得下以レ身試二黃泉一。蓬中蠟蟻。又何如得二此樂一而樂レ之。王大說。乃封レ壇爲二安陵君一。君子聞レ之曰。江乙可レ謂二善謀一。安陵君可レ謂レ知レ時矣。

ち壇を封じて安陵君となす。君子之を聞いて曰く、「江乙善く謀ると謂ふ可く、安陵君時を知ると謂ふ可し」と。

一 名は壇、楚の寵臣にて所謂美少年也 二 少しの手柄 三 畏敬する也 四 身をかがめ脊を曲げて伏する也 五 自分の美色 六 壁は賤しくて至愛せちるゝ女、廁やぶるゝに及ばずして愛弛ぶ、卽ち愛久しからずと也 七 原文の「避」は「罷」の誤といふ說に從ふ。軒は轅(ナガエ)の曲りたる屋形車也。これも其寵の久しからざるをいふ 八 王の死 九 殉死 一〇 御敎訓 一一 殉死を謂ふ事を王に言はず 一二 之を王に言ふべき機會 一三 源の名。游は遊獵也 一四 四頭立の馬を非常に多く連ね 一五 蜺は虹也 一六 兕は野牛の類 一七 車を目蹴けて馳せ來り、輪に身をすり寄せて向つて來る 一八 旗は曲柄の旗、旄は牛尾を竿頭に着けた幟 一九 陪乘せる安陵君に向つて曰ふ也 二〇 死後 二一 王と席を連ね 二二 王の車に侍し乘る 二三 王の爲めに身を犧として爲めに我身を以て先づ黃泉に試み其他謠說あり。要するに黃泉までも御伴しての意也 二四 王の爲めに身を犧として蠟蟻を欖がん 二五 又今日の如き樂あらんや 二六 安陵君の名。此時始めて封ぜられて安陵君となる也

鄢人有二獄三年一不レ決者。故令三人請二其宅一。以下二其罪一。客因爲レ之謂二昭奚恤一曰。鄢人某氏之宅。臣願レ之。昭奚恤曰。鄢人某氏不レ當レ服レ罪。故其宅不レ可レ得。客辭而去。昭奚恤已而悔レ之。因謂レ客曰。奚恤得レ事レ公。公何爲以レ故與二奚恤一。客曰。非レ用レ故也。曰。試而不レ得。有二說色一。非レ故如何也。

鄢人、獄三年にして決せざる者あり。故に人をして其宅を請はしめ、以て其罪をトせんとす。客因て昭奚恤に請うて曰く、「鄢人某氏の宅、臣之を願ふ」と。昭奚恤曰く、「鄢人某氏、當に罪に服す可らず、故に其宅得可らず」と。客辭して去る。昭奚恤已にして之を悔ゆ。因て客に謂つて曰く、「奚恤、公に事ふるを得たり。公何爲れぞ故を以て奚恤に與ふるや。」客曰く、「故を用ひしに非ず。」曰く「請うて得ずして、說べる色あり。故に非ずして如何ぞや。」

一 楚の鄢郢の人 二 裁判 三 有罪ときまれば宅は官に沒收せちる、故に今有罪となるか否かをトせん爲めに人をしてわざと自分の宅が既に沒收せちれたるものの如く空とぼけて之を官に請はしめたる也 四 依賴を受けたる人也 五 宅官に沒收されず、故に君之を得べからず 六 自稱也。余は年來君と親しく交はる 七 然るに君は何故殊更に巧める手段を余に仕向くるや。故は詐故、與は仕向くる意

蘇秦之楚。三日乃得見乎王。談卒辭而行。王曰。寡人聞先生。若聞古人。今先生乃不遠千里而臨寡人。曾不肯留。願聞其說。對曰。楚國之食貴於玉。薪貴於桂。謁者難得見如鬼。王難得見如天帝。今令臣食玉炊桂因鬼見帝。王曰。先生就舍。寡人聞命矣。

蘇秦、楚に之き、三日にして王に見ゆるを得たり。談卒つて辭して行く。王曰く「寡人先生を聞くと、古人を聞くが若し。今先生乃ち千里を遠しとせずして寡人に臨みながら、曾ち留まるを肯んぜず。願はくは其說を聞かん。」對へて曰く、「楚國の食は玉よりも貴く。薪は桂よりも貴し。謁者の見るを得難きこと鬼の如く、王の見ゆるを得難きこと天帝の如し。今臣をして玉を食み桂を炊ぎ、鬼に因つて帝に見えしむ」と。王曰く、「先生舍に就け。寡人命を聞く」と。

一 其直ちに見ゆるを得ざりしをいふ。但、三日は遲緩にあちず、開君長は或は三月の誤かといへり　二 古哲を欽慕する如く、早く見ざるを恐れたり　三 我國に留まるを肯ぜざる理由　四 有名の句也。陽に楚の豪華と王室の權威とをいひて、陰に己に對する待遇の厚からず、用ひられざるを以て去るの意を述べたるならん。今桂玉之地と熟語として所謂土一升金一升といふ如き意に用ふ　五 王に取次ぐ役人　六 天帝。これ卽ち留まるを肯ぜざる所以と也　七 先生定めの旅舍に入られよ、我よく先生の意の在る所を知れりと也

蘇秦爲趙合從。說楚威王曰。楚天下之強國也。大王天下之賢王也。楚地西有黔中巫郡。東有夏州海陽。南有洞庭蒼梧。北有汾陘之塞鄩陽。地方五千里。帶甲百萬。車千乘。騎萬匹。粟支十年。此霸王之資也。夫以楚之強。與大王之賢。天下莫能當也。今乃欲西面事秦。則諸

蘇秦、趙の爲めに合從せんとし、楚の威王に說いて曰く、「楚は天下の強國也。大王は天下の賢王なり。楚の地、西に黔中・巫郡あり、東に夏州・海陽あり、南に洞庭・蒼梧あり、北に汾陘の塞・鄩陽あり。地、方五千里、帶甲百萬、車千乘、騎萬匹、粟十年を支ふ。此れ霸王の資也。夫れ楚の強と、大王の賢とを以てせば、天下能く當るもの莫けん。今乃ち西面して秦に事へんと欲す。則ち諸侯西面して章臺の下に朝せざるは莫からん。秦の天下に害とする所、楚に如くは莫し。楚強ければ則ち秦弱く、楚弱ければ則ち秦強し。此れ其勢兩立せじ。故に大王の爲めに計るに、從親して以て秦を孤とするに如くは莫し。大王從親せずんば、秦必ず兩軍を起し、一軍は武關より出で、一軍は黔中を下らん。此の若くせば、則ち鄢・郢動かん。臣之を聞く、之を其の未だ亂れざるに治め、之を其の未だ有らざるに爲すと。患至つて後之を憂へば、則ち及ぶ無からんのみ。故に願はくは大王の早く之を計られんことを。大王誠に能く臣に聽かば、臣請ふ、山東の國をして四時の獻を奉じて、以て大王の明制を承け、社稷宗廟を委ね、士を練り兵を厲ぎ、

俟莫レ不三四面而朝二於章臺之下一矣。秦之所レ害二於天下一。莫レ如レ楚。楚強則秦弱。楚弱則秦強。此其勢不二兩立一。故爲二王至計一。莫レ如二從親一以孤レ秦。大王不二從親一。秦必起二兩軍一。一軍出二武關一。一軍下二黔中一。若レ此則鄢郢動矣。臣聞レ之。治二之其未一レ亂。爲二之其未一レ有也。患至而後憂レ之。則無レ及已。故願大王之早計レ之。大王誠能聽レ臣。臣請命下山東之國。奉二四時之獻一。以承二大王之明制一。委二社稷宗廟一。練レ士厲レ兵。在中大王之所レ用之。大王誠能聽二臣之愚計一。則韓魏齊燕趙衛之妙音美人。必充二後宮一矣。趙代良馬橐駝。必實二於外廐一。故從合則楚王。橫成則秦帝。今大王之之を用ふる所に在らしめん。大王誠に能く臣の愚計を聽かば、則ち韓・魏・齊・燕・趙・衛の妙音美人は、必ず後宮に充ち、趙・代の良馬橐駝は、必ず外廐に實たん。故に從合はゞ、則ち楚、王たらん。橫成らば、則ち秦、帝たらん。今霸王の業を釋てゝ、人に事ふるの名あるは、竊かに大王の爲めに取らざる也。夫れ秦は虎狼の國也、天下を呑むの心あり。秦は天下の仇讎也。橫人は皆諸侯の地を割き、以て秦に事へんと欲す。此れ所謂仇を養ひ讎に奉ずるものなり。夫れ人の臣として、其主の地を割き、以て外、强虎狼の秦に交はり、以て天下を侵さんとす。卒かに秦の患あらんも、其禍を顧みず。夫れ外、强秦の威を挾さみ、以て內、其主を刦かして、以て地を割かんを求む。大逆不忠、此に過ぐる者無し。故に從親せば、則ち諸侯、地を割いて以て楚に事へん、橫合はゞ、則ち楚、地を割いて以て秦に事へん。此の兩策は相去る遠し。億兆の數あり。兩者、大王何れにか居らん。故に敝邑の趙王、臣をして愚計を效し、明約を奉ぜしむ。大王の之を命ずるに在り。」楚王曰く、「寡人の國、西、秦と境を接す。秦、巴蜀を擧げ、漢中を幷するの心あり。秦は虎狼の國なり、親しむ可らず。而して韓・魏は秦の患に迫る。與に深く謀る可らず。與に深く謀らば、恐らくは人に反いて秦に入らん。故に謀未だ發せずして、國已に危からん。寡人自ら料るに、楚を以て秦に當る、未だ勝つを見ず。內、群臣と謀る、悖むに足らず。寡人臥して席に安んぜず食して味を甘しとせず。心搖搖として懸旌の如く、終に薄まる所なし。今主君、天下を一にし、諸侯を安んじ、危國を存せんと欲す。寡人謹んで社稷を奉じて以て從はん。」

(一) 要害の地　(二) 軍卒　(三) 西は獸畜の歌詞　(四) 兵糧　(五) 天下の旗幟となるべき資料　(六) 秦の臺、諸侯皆秦に事ふべきをいふ。但、程恩澤は楚の臺とし、原本「西面」を舊本によりて「南面」とすべく「莫不」の「不」は衍ならんといへり。卽ち諸侯また南面して、楚に事ふるなしと也　(七) 世の中にて邪魔物と思ふもの　(八) 六國合從の約を結びて　(九) 孤立無援　(十) 水陸兩軍　(十一) 郢は楚の別都、鄢は楚の首都の名、動かんは陷落せんの意を婉曲にいふ也　(十二) 四季に出來る國產を楚王に獻上し　(十三) 正大なる命令を遵奉し　(十四) 國家を楚に託

釋二霸王之業一。而有二事レ人之名一。竊爲二大王一不レ取也。夫秦虎狼之國也。有下呑二天下一之心上。秦天下之仇讎也。横人皆欲下割二諸侯之地一以事上秦。此所レ謂養レ仇而奉レ讎者也。夫爲二人臣一而割二其主之地一。以外交二強虎狼之秦一。以侵二天下一。卒有二秦患一。不レ顧二其禍一。夫外挾二強秦之威一。以内刦二其主一。以求レ割レ地。大逆不忠。無二過レ此者一。故從親。則諸侯割レ地以事レ楚。横合。則楚割レ地以事レ秦。此兩策者。相去遠矣。有二億兆之數一。兩者大王何居焉。故敵邑趙王使下臣效二愚計一。奉中明約上。在二大王命一之。楚王曰。寡人之國。四與レ秦接レ境。秦有下舉二巴蜀一。并二漢中一之心上。秦虎狼之國。不レ可レ親也。而韓魏迫二於秦患一。不レ可レ與深謀一。與深謀。恐反レ人以入二於秦一。故謀未レ發。而國已危矣。寡人自料。以レ楚當レ秦。未レ見レ勝焉。内與二群臣一謀。不レ足レ恃也。寡人臥不レ安レ席。食不レ甘レ味。心搖搖如二懸旌一。而無所二終薄一。今主君欲下一二天下一。安二諸侯一。存中危國上。寡人謹奉二社稷一以從。

威王問二於莫敖子華一曰。自二

威王、莫敖子華に問うて曰く、「先君文王より、以て不穀の身に至るまで、亦爵

して之に味方し　一五　武器を礪ぎ　一六　昔樂に堪能なる美人　一七　夷國の名　一八　驕能　一九　連衡　二〇　連衡を爲すは卽ち秦に事ふる也　二一　虎狼の如く貪りて厭くなき國也　二二　連衡を主唱する人　二三　にはかに秦に攻めらるゝの愚有らん、而も横人は其禍を顧慮せず　二四　連衡成立せば　二五　相去る事の遠きを極言せる也　二六　合從連横二者の中　二七　契約を結ばしむといふ意の敬語也　二八　仰せを承りたし　二九　徐孚遠曰く「邁中ハ楚ノ地、巴蜀ハ楚ノ地ニ非ズ、連ネテ之ヲ言フハ、勢相接スレバ也」　三〇　今にも秦より攻められんとしつゝあり　三一　我に背反して也　三二　まだ相談のまとまらぬ内に　三三　我國家　三四　心に動搖して定まらざること懸れる旌旗の如く　三五　止也

從先君文王。以至二不穀之身一。亦有下不二爲レ爵勸一。不二爲レ祿勉一。以憂二社稷一者上乎。莫敖子華對曰。如レ章不レ足二以知一之矣。王曰。不レ於二大夫一。無所レ聞レ之。莫敖子華對曰。君王將二何問一者也。彼有下廉二其爵一。貧二其身一。以憂二社稷一者上。有下崇二其爵一。豐二其祿一。以憂二社稷一者上。有下爵二其爵一。以憂二社稷一者上。有下斷レ頭決レ腹。一瞑而萬世不レ

の爲めに勸むるにあらず、祿の爲めに勉むるにあらずして、以て社稷を憂ふる者あり。」莫敖子華對へて曰く、「章の如きは以て之を知るに足らず。」王曰く、「大夫に於てせずんば、之を聞く所なし。」莫敖子華對へて曰く、「君王將に何を問はんとする者ぞ。彼の其爵を廉にし其身を貧にして、以て社稷を憂ふる者あり。其爵を崇くし、其祿を豐かにして、以て社稷を憂ふる者あり。頭を斷ち腹を決き、一たび瞑して萬世視ず、益する所を知らずして、以て社稷を憂ふる者あり。其身を勞し、其志を愁へしめて、以て社稷を憂ふる者あり。亦爵の爲めに勸むるにあらず、祿の爲めに勉むるにあらずして、以て社稷を憂ふる者あり。」王曰く、「大夫の此言將た何の謂ぞや。」莫敖子華對へて曰く、「昔、令尹子文、緇布の衣以て朝し、鹿裘以て處り、未明にして朝に立ち、日晦れて歸り、食は朝夕を謀らず、一日の積なし。故に彼の其爵を廉にし、其身を貧にして、以て社稷を憂へし者は、令尹子文是れ也。昔は葉公子高、身表薄に獲られて、柱國を財し、白公の禍を定め、楚

視。不レ知レ所レ益。以憂二社稷一者。有下勞二其身一。愁二其志一。以憂二社稷一者。亦有下不二爲レ爵勸一。不二爲レ祿勉一。以憂二社稷一者。王曰。大夫此言。將何謂也。莫敖子華對曰。昔令尹子文。緝布之衣。以朝。鹿裘以處。未明而立二於朝一。日晦而歸。食朝不レ謀レ夕。無二一日之積一。故彼廉二其爵一。貪二其身一。以憂二社稷一者。令尹子文是也。昔者葉公子高。身獲二於表薄一。而財二於柱國一。定二白公之亂一。寧二楚國之事一。恢二先君一。以捧二方城之外一。四封不レ侵。名不レ摧二於諸侯一。當二此之時一也。天下莫二敢以レ兵南鄉一。葉公子高食田六百畛。故彼崇二其爵一。豐二其祿一。國の事を寧んじ、先君を恢いにして以て方城の外を捧ひ、四封侵されず、名諸侯に挫かれず。此の時に當つて、天下敢て兵を以て南に鄉ふもの莫く、葉公子高、食田六百畛ありき。故に彼の其爵を崇くし、其祿を豐かにして、以て社稷を憂へし者は、葉公子高是れ也。

一 楚の官名、子華は名。一說には字 二 諸侯の自稱代名詞、寡人といふ類 三 子華の字。一說には名 四 聞かずんば 五 食ちず 六 首をきられ腹をきり 七 一死して萬世を視ず 八 死の已に益する所あるを知らず、卽ち死しても何等身を益する事なくして 九 楚の官名、首相の職 一〇 緝布、粗衣也 一一 鹿の革衣、質素なるをいふ 一二 夜の未だ明けきらぬ內 一三 朝の食事はしても夕食の計には及ばず 一四 貯蓄 一五 表は外、薄は疎、縣令疎外の身より擧げられて 一六 柱國は國都、財は財に通ず、一國の政權を握るをいふ 一七 白公內亂の事三四七の頁註に見ゆ 一八 先君の遺業をおし弘めて國外に迄も及ぼす、恢は恢弘の義、捧は光被する也、方城は楚の地 一九 四境 二〇 鄉は向の借字、楚を鄉ふをいふ 二一 畛は井田間のあぜ、六百畛は約六十萬畝

昔者吳與レ楚戰二於柏舉一。兩軍之間。夫卒交。莫敖大心撫二其御之手一。顧而太息曰。嗟乎子乎。楚國亡之日至矣。吾將三深入二吳軍一。若扑二一人一。以與二大心一者也。社稷其庶幾乎。故斷レ頭決レ腹。一瞑而萬世不レ視。不レ知レ所レ益。以憂二社稷一者。葉公子高是也。

昔は吳、楚と柏舉に戰ひ、兩軍の間、夫卒交はる。莫敖大心、其の御の手を撫で顧みて太息して曰く、『嗟乎子か。楚國亡ぶるの日至れり。吾將に深く吳軍に入らんとす。若し一人を扑ち、若し一人を捽み、以て大心に與する者あらんには、社稷其れ庶幾からんか』と。故に頭を斷ち腹を決き、一たび瞑して萬世視ず、益する所を知らずして、以て社稷を憂へし者は、莫敖大心是れ也。昔吳、楚と柏舉に戰ひ、三たび戰つて郢に入り、君王自ら出でゝ、大夫悉く屬し、百姓離散せり。棼冒勃蘇曰く、『吾れ堅を被むり銳を執り、强敵に赴いて死せば、此れ猶ほ一卒のごとけん。若かず諸侯に奔らんには』と。是に於てか糧を贏ひて潛かに行く。崢山に上り、深溪を踰え、瞭穿たれ膝暴はる。七日にして秦王の朝に薄り、雀立して轉ぜず。晝吟じ宵哭し、七日にして告ぐるを得ず。水漿口に入る無く、瘨して殫悶

社稷ニ者。莫敖大心是也。昔吳與レ楚戰ニ於柏舉。三戰入レ郢。寡君身出。大夫悉屬。百姓離散。棼冒勃蘇曰。吾被レ堅執レ銳。赴ニ強敵一而死。此猶ニ一卒一也。不レ若奔ニ諸侯一。於レ是贏レ糧潛行。上ニ崢山一。踰ニ深溪一。蹠穿膝暴。七日而薄ニ秦王之朝一。雀立不レ轉。晝吟宵哭。七日不レ得レ告。水漿無レ入レ口。

し、旄として人を知らず。秦王聞いて之に走むく。冠帶相及ばず。左に其首を奉げ、右に其口を濡ほす。勃蘇乃ち蘇へる。秦王身ら問ふ、『子は孰れの誰ぞや。』棼冒勃蘇對へて曰く、『臣、異に非ず。楚の使にて、新たに盩を造せる、棼冒勃蘇なり。吳、楚人と柏舉に戰ひ、三たび戰つて郢に入り、寡君自ら出でゝ、大夫悉く屬し、百姓離散す。下臣をして來つて亡を告げ、且つ救を求めしむ」と。秦王願みて起たざらしむ。『寡人之れを聞けり、萬乘の君も、罪を一士に得れば、社稷其れ危しと。今此の謂』也と。遂に革車千乘、卒萬人を出し、之れを子滿と子虎とに屬し、塞を下つて以て東し、吳人と濁水に戰つて、大いに之を敗り、亦遂浦に鬬へり。故に其身を勞し、其思を愁へしめて、以て社稷を憂へし者は、棼冒勃蘇是れ也。

一 楚の地名　二 夫は千夫百夫などいふ夫、兵卒互に入れ亂れて戰爭の始まりたるをいふ　三 官名、大心は名　四 御者　五 御者を指していふ也　六 擊也　七 髮をつかむ、敵をとりひしぐ意なちん　八 助力する　九

旗面殫悶。旄不レ知レ人。秦王聞而走レ之。冠帶不ニ相及一。左奉ニ其首一。右濡ニ其口一。勃蘇乃蘇。秦王身問レ之。子孰誰也。棼冒勃蘇對曰。臣非レ異。楚使新造レ盩。棼冒勃蘇。吳與ニ楚人一戰ニ於柏舉一。三戰入レ郢。寡君身出。大夫悉屬。百姓離散。使ニ下臣來告レ亡且求レ救。秦王顧令ニ之起一。寡人聞レ之。萬乘之君。得ニ罪一士一。社稷其危。今此之謂也。遂出ニ革車千乘卒萬人一。屬ニ三之子滿與ニ子虎一。下レ塞以東。與ニ吳人一戰ニ於濁水一。面大敗レ之。亦鬬ニ於遂浦一。故勞ニ其身一。愁ニ其思一。以憂ニ社稷一者。棼冒勃蘇是也。

吳與レ楚戰ニ於

吳、楚と柏舉に戰ひ、三たび戰つて郢に入り、君王身ら出でゝ、大夫悉く屬し、

亡びざるに庶幾かちん、我を助けて奮鬪する者無しと歎きて討死せりと也　一〇 吳軍が楚都郢に攻め入る　一一 原文「寡君」は「君王」の誤といふ說に從ふ、楚王自ら陣頭に立つ也　一二 皆共に出征し　一三 堅甲をつけ記　一四 兵(利刃)を執り　一五 立ちむかひて戚死せば　一六 他國に出奔して援兵を請はんに若かず　一七 糧をつゝみてとも訓ずべし、糧食を持ちて也　一八 けはしき山　一九 履破れ衣破るゝをいふ　二〇 原文「雀立」は「孤立」の誤、雀は鶴の俗字といふ說に從ふ、直立不動をいふ　二一 晝夜哀しみ泣く　二二 秦王に見ゆるを得ず　二三 水、漿は飲料の義　二四 顚倒して人事不省に陷り。瘋は病んでと訓ずるも可なちん　二五 心がぼつとして　二六 冠帶するの遑なく、急遽之に赴けり　二七 左手　二八 右手　二九 別人ならず　三〇 原文「疑」は熱の誤にて誤也、不敬の罪を犯して敢て推參せる。其他諸說あれど略す　三一 自國の君をいふ語　三二 原文「令之起」の「之」の字舊本「不」に作る從ふべし、渡れたるを勞りて殊に起つに及ばずといふ也　三三 一勇士の怒に觸るれば　三四 兵車　三五 共に秦將　三六 地名、齊楚の境、或はいふ吳楚の境　三七 楚の地、原文「鬪」は「鬪」の誤

柏舉。三戰入郢。君王身出。大夫悉屬。百姓離散。蒙穀結鬬於宮唐之上。舍鬬奔郢曰。若有孤。楚國社稷。其庶幾乎。遂入大宮。負鷄次之典。以浮於江。逃於雲夢之中。昭王反郢。五官失法。百姓昏亂。蒙穀獻典。五官得法。而百姓大治。此蒙穀之功多。與存國相若。封之

百姓離散す。蒙穀、鬬を宮唐の上に結ぶ。鬬を舍て郢に奔つて曰く、『若し孤あらば、楚國の社稷、其れ庶幾からんか』と。遂に大宮に入つて、鷄次の典を負ひ、以て江に浮んで、雲夢の中に逃る。昭王郢に反る。五官法を失ひ、百姓昏亂す。蒙穀、典を獻ず。五官法を得て、百姓大いに治まる。此れ蒙穀の功多く、國を存すると相若けり。之れを執圭田六百畛に封ず。蒙穀怒つて曰く、『穀は人の臣に非ず社稷の臣也。苟くも社稷血食せば、餘は豈に君なきを患へんや』と。遂に自ら磨山の中に棄つ。今に至るまで胄無し。故に爵の爲めに勸むるにあらず、祿の爲めに勉むるにあらずして、以て社稷を憂へし者は、蒙穀是れ也。」王乃ち太息して曰く、「此れ古の人也。今の人焉くんぞ能く之あらんや。」莫敖子華對へて曰く、「昔は先君靈王、小腰を好む。楚の士、食を約し、馮つて能く立ち、式つて能く起てり。食の欲す可きも、忍んで入れず、死の惡む可きも、就いて避けず。章之を聞く、其君發を好めば、其臣決拾すと。君王直だ好まざればなり。若し君王誠

執圭田六百畛。蒙穀怒曰。穀非人臣。社稷之臣。苟社稷血食。餘豈患無君乎。遂自棄於磨山之中。至今無胄。故不爲爵勸。不爲祿勉。以憂社稷者。蒙穀是也。王乃太息曰。此古之人也。今之人焉能有之邪。莫敖子華對曰。昔者先君靈王好小腰。楚士約食。馮而能立。式而能起。食之可欲。忍而不入。死之可惡。就而不避。章聞之。其君好發者。其臣決拾。君王直不好。若君王誠好賢。此五臣者。皆可得而致之。

に賢を好まば、此の五臣は皆得て之を致す可し。」

一 楚の將　二 宮唐邊にて一騎打ちを爲す　三 孤は父なき子の稱にて昭王の子を謂ふ、時に昭王存亡の不明かなりず故に其子を言ふ也　四 存するに庶幾からん　五 太祖の廟ならん　六 政法の書、法典也、語義につきては歌謡あれど完かならず　七 澤の名　八 行政の各官法を失ひて天下の法度棄る、百姓は百官也　九 量に負ひて逃れたる法典　一〇 相等し　一一 爵位の名　一二 血食は祀ること、國家存續し社稷祀を絶たざるをいふ　一三 君なしとは仕へざるを謂ふ、人の臣とは君に事ふる人の謂にして社稷の臣とは社稷を安んずるを以て悅と爲す者也、我は社稷の臣なれば、既に國家の存續を見る以上將に祿位を棄てむとすと也　一四 子孫なし。原本「冒」に作るは「胄」の誤といふに從ふ。但、「冒すなし」と訓じても意は通ずべきか　一五 細腰、腰細の美人。次の楚の士といふに徵すれば腰細の男子か。又は「士」或は「女」の誤か　一六 食を減じて腰を細くし　一七 馮は物により すがるをいふ　一八 軾に通ず、車前の橫木にて人の車前にて敬禮を爲すに遇依する所、故に又遇の義として用ひたる也、遇式して立ち起つは食を減じて力なき狀をいふ也　一九 子華の名　二〇 矢を放つ、決はゆがけ、拾はゆびて。君が弓矢を好めば臣は其意を迎へてゆがけゆびてを著く、上が行へば下も之に倣ふの喩也

蘇子謂二楚王一曰。仁人之於レ民也。愛レ之以レ心。事レ之以二善言一。孝子之於レ親也。愛レ之以レ心。事レ之以レ財。忠臣之於レ君也。必進二賢人一以輔レ之。今王之大臣父兄。好二傷レ賢以爲レ資。厚賦二斂諸臣百姓一。使二王見レ疾二於民一。非二忠臣一也。大臣播二王之過於百姓一。多賂二諸侯一。以二王之地一。是故退二王之

蘇子、楚王に謂つて曰く、「仁人の民に於けるや、之を愛するに心を以てし、之に事とするに善言を以てす。孝子の親に於けるや、之を愛するに心を以てし、之に事ふるに財を以てす。忠臣の君に於けるや、必ず賢人を進めて、以て之を輔く。今王の大臣父兄は、賢を傷つて以て資と爲すを好み、厚く諸臣百姓に賦斂して、王をして民に疾まれしむ。忠臣に非ざるなり。大臣は王の過を百姓に播き、多く諸侯に賂ふに王の地を以てす。是の故に王の愛する所を退く。亦忠臣に非ざる也。是を以て國危し。臣願はくは、羣臣の相惡するを聽く無く、大臣父兄を愼み、民の善する所を用ひ、身の嗜慾を節して、以て百姓と與にせられんことを。人臣は妬む無くして賢を進むるより難きは莫し。王の爲めに死するは易し。垂沙の事、死する者千を以て數ふ。主の爲めに辱しめらるゝは易し。令尹より以下、王に事ふる者千を以て數ふ。妬む無くして賢を進むるものに至つては、未だ一人だに見ざる也。故に明主の其臣を察するや、必ず其の妬む無くして賢を進むるに知

懷王

所レ愛。亦非二忠臣一也。是以國危。臣願無レ聽二羣臣之相惡一也。愼二大臣父兄一。用二民之所レ善。節二身之嗜欲一。以與二百姓一。人臣莫レ難二於無レ妬而進レ賢。爲レ王死易。垂沙之事。死者以レ千數。爲レ主辱易。自二令尹一以下。事レ王者以レ千數。至二於無レ妬而進レ賢。未レ見二一人一也。故明主之察二其臣一也。必知二其無レ妬而進レ賢也。賢臣之事二其主一也。亦必無レ妬而進レ賢。夫進レ賢之難者。賢者用。且レ使二己廢一。貴。且レ使二己賤一。故人難レ之。

る。賢臣の其主に事ふるや、亦必ず妬む無くして賢を進む。夫れ賢を進むるの難きは、賢者用ひらるれば、且に己を廢せしめんとし、貴なれば、且に己を賤しからしめんとす。故に人之を難しとするなり。」

一 力を用ひて之を喰すに　二 飲食衣服の類、所謂肉體の養也　三 王族の大臣をいふ　四 賢を毀つて用ひざらしめず、以て自利の資となす　五 課稅　六 前の大臣父兄といふは同族の大臣にて、こゝに單に大臣といへるは異姓の大臣を謂へるにや、彼も忠臣にあらずこれも亦忠臣に非ずと也　七 はどこすとも訓ず、播也、布也、あげ知らすること　八 互に惡しざまに言ふ　九 輕々しく用ひず　一〇 無沙の戰役に於て。但其地名及び事實の考證は諸說紛々たり姑く後考を俟つ　一一 首相　一二 良否を觀察判斷する　一三 進むるによりて其良臣なるを知る　一四 賢者が貴き身分となれば